

現代生活における自然とかかわる活動の意義
－丹後・丹波地方の事例検討－

生命環境科学研究科 環境科学専攻

Sasai Toshifumi

目 次

第 1 章 序論	3
1-1 研究の背景	3
1-2 本研究の目的	4
1-3 研究の方法	5
1-3-1 研究の主軸——家政学と生活学	5
1-3-2 マイナー・サブシステム、「遊び仕事」	7
1-4 調査手法の参考として——民俗学	8
1-4-1 民俗学における自然	8
1-4-2 研究形態	10
1-5 関連する研究事例	10
1-6 論文の構成	13
引用文献	13
第 2 章 現代生活の中での害獣駆除の意味	19
2-1 本章の目的	19
2-1-1 獣害を取り巻く環境	19
2-1-2 生活の中の害獣駆除	21
2-1-3 調査の目的	22
2-2 調査の概要	23
2-2-1 調査対象者と調査方法、調査期間	23
2-2-2 害獣駆除の実態	23
(1) 駆除概要	23
(2) 駆除および処理に使う道具	24
(3) 捕獲	25
(4) 獲物の処理	27
2-3 害獣駆除の目的と動機	29
2-3-1 害獣駆除の特殊性	29
(1) 時間	29
(2) 経済	29
(3) 危険性	30

2-3-2	活動を続ける動機	30
(1)	活動のきっかけ	30
(2)	害獣駆除に中にある「楽しみ」	31
2-4	考察	33
(1)	「楽しみ」の発見	33
(2)	「楽しみ」抽出の意義	34
(3)	「楽しみ」の伝承	34
(4)	害獣駆除に対する心	34
(5)	まとめ	35
	引用文献	36
第3章	「おかずとり」の意味と共同体意識	39
3-1	本章の目的	39
3-2	調査の概要	40
3-2-1	既往研究	40
3-2-2	調査の概要	42
(1)	調査対象地	42
(2)	調査方法	42
(3)	袖師の人の地域認識	44
3-2-3	採捕活動概要	45
(1)	採捕・栽培される生物	45
(2)	採捕物の利用形態について	45
(3)	漁場と岩場の名称	47
(4)	採捕に関する規定	48
3-2-4	各生物の採捕	49
(1)	採捕の概要	49
(2)	採捕に関するまとめと考察	53
3-3	採捕の動機と伝承	53
3-3-1	採捕の動機	53
3-3-2	「おかずとり」の楽しみと伝承	56
(1)	採捕活動の意義	56
(2)	採捕物の価値	59
3-4	考察	60
	引用文献	63

第 4 章 自然とかかわる自立自存的な生き方	67
4-1 本章の目的	67
4-2 調査の概要	67
4-2-1 調査対象	67
(1) 調査対象地	68
(2) 対象者	68
(3) 調査方法及び期間	71
4-2-2 調査結果	71
(1) 食生活とそれに関する道具類	72
(2) 住生活にかかわる行動	77
4-3 対象者の生活の基盤となる行動理念	80
4-3-1 生活の外周の 3 要素	80
(1) 自然環境	80
(2) 社会環境	80
(3) 経験	81
4-3-2 特徴的な思考 3 要素	81
(1) 「もったいない」	82
(2) 「思い切り」	82
(3) 「備えと蓄え」	83
4-3-3 生活の基盤となる 7 要素	83
(1) 「モノ」が「もったいない」という概念	83
(2) 「労力」が「もったいない」という概念	84
(3) 「金銭」が「もったいない」という概念	85
(4) 「思い切り」と「投資」「資材など」	85
4-3-4 行動の 5 要素	86
(1) 物々交換	86
(2) 協力・技術伝承	87
(3) おすそわけ	87
(4) 付加価値の創造	87
(5) 生活の場の創造	88
4-3-5 生活の根幹の 3 要素	89
(1) 「他者とかかわり」	89
(2) 「創造する力、発想と技術」	90
(3) 「先を見据えた行動」	90
4-3-6 各要素の指向	92

4-4	生活のデザイン	92
4-5	考察	94
	引用文献	95
第 5 章	総括	99
5-1	総括	99
5-1-1	第 1 章の概要	99
5-1-2	第 2 章の概要	99
5-1-3	第 3 章の概要	100
5-1-4	第 4 章の概要	100
5-2	結論	101
5-3	今後の課題	102
	参考文献一覧	107
	謝辞	115

第 1 章 序 論

第 1 章 序論

1-1 研究の背景

現代の日本社会では、農林水産業を主たる生業とする地域において、多くの場合労働人口は都市部へ流出し、生業の維持が困難になってきている。その上、安価な農産物や木材の輸入等により、消費社会での競争力に欠け、現金収入を十分に得ることが難しい状況にある。

しかし、わが国の農林水産業にかかわる地域において、労働面や経済面などの問題点はあるにせよ、商品経済に絡めとられている現代社会の一般的な生活様式とは異なり、自然とかかわる活動をとおして生活者としての自立自存的な生き方を実践する事例も多く残存している。

すなわち、近年収入を得るための生業（サブシステンス）に対して、生業活動の陰にあって経済的な意味が目指されていない活動をマイナー・サブシステンスと呼び、この自然とかかわる活動が積極的に評価されてきている。マイナー・サブシステンスは、かつてイヴァン・イリイチ（1990）が貨幣経済中心の社会に警鐘を鳴らし、現金収入が得られない類の労働の重要性を訴えたその考え方にも関連するものである¹⁾。

鬼頭（1996）は、「生業」は生活の糧を得る人間の営みであるが、それでは生活のかかなりの部分が抜け落ちてしまうとし、人間と自然とのかかわりは多様で「遊び」を含んだもっと豊かなものである、と指摘した。そして、主たる生業以外の生業的な営みをマイナー・サブシステンスと呼んだ²⁾。さらに鬼頭（2009）は、現代生活に自然への倫理観を採り入れるために、自然活動の「楽しみ」に注目し、活動にあるゲーム性や喜びをすなわち「遊び」と表現して、その遊びが見いだせる自然活動を「遊び仕事」と名付けている。この「楽しみ」の要素は、活動を熱心に続けていくための目標や動機となっていることを指摘し、マイナー・サブシステンスを、物質・経済性よりも精神性が強い営みであると評価して、概念を拡大している³⁾。

松井（1998）は、「集団にとって最重要とされている生業活動の陰にありながら、それでもなお脈々と受け継がれてきている副次的ですらないような経済的意味しか与えられていない生業活動」をマイナー・サブシステンスと定義し、その活動は人間と自然とのかかわり方、すなわち、身体全体を通して自然との直接的なかかわりを体験させるものである⁴⁾、と述べる。

以上のようなマイナー・サブシステンス、「遊び仕事」についての論は、消

費社会において見過ごされてきた自然とかかわる人間の生活のあり方を考えなおすきっかけとなっているといえよう。

なお、自然とかかわる活動にはレジャー、観光など消費行動としての「遊び」もあるが、その「遊び」は一時的であったり、生活の場と離れた活動であったりする点で、持続性・継続性があり定住の場を拠点とするマイナー・サブシステム、「遊び仕事」とは意味合いが異なっている。したがって本研究においては消費行動としての自然とかかわる「遊び」は対象とはしない。

以上のような背景を踏まえて、小規模な自然とかかわるマイナー・サブシステムの活動をおこなって主体的に生活を営んでいる人びとに焦点をあて、その活動がもたらす地域社会のあり方や自然とかかわる活動をおこなう精神的な要因などに注目していくこととする。

1-2 本研究の目的

本研究の目的は、自然とかかわるマイナー・サブシステムとしての活動が、活動の担い手やその生活にとって、さらには当事者が属する地域社会にとって、どのような意味をもつのかを明らかにすることである。

本研究において、従来の生業を中心とした研究や統計資料ではあらわれていない住民の「生きがい」や社会的なかかわりを調査から明らかにすることにより、マイナー・サブシステムが生活にもたらす意義を示したい。

研究対象地として選択したのは、以下の活動がおこなわれている3地域である。調査方法は、聞き取り調査と行動観察であり、それぞれ2～3年間の継続調査である。

1. 公的な自然活動としては、農作物の獣害を駆除するために、副業もしくは無償の活動という程度の規模でおこなわれている現代的な害獣駆除猟について、福知山市において調査する。
2. 公的な自然活動と私的な自然活動の中間として、集落単位でおこなわれる伝統的な小規模採捕活動が維持されている京丹後市を調査する。
3. 私的な自然活動として、宮津市で実質的に独居生活をおこなっている高齢男性を例にとり、物々交換やモノの製作をとおした、貨幣経済のみに依らない生活について調査する。

いずれも、生業でも趣味的でもない小規模な自然活動や採捕活動が長年にわたって継続されている事例であり、個々の活動の手法ではなく生活の中での文

脈に着目して選定した。

以上の調査対象の個別の検討結果から、共通する結論をまとめることを目的とする。

1. それぞれの地域の自然とかかわる活動において抽出される動機や精神性を明らかにする。
2. 対象者たちの生活の実態から、自然とかかわる活動が地域社会にどのような意味を持っていたのかを検証する。
3. マイナー・サブシステムとしての活動が、生活の中でどのように生かされ、伝えられているのかを明らかにする。

これらの調査をもって、調査対象の人々が生業としての活動のほかに自然とかかわりつつ、時には危険を冒してまでも継続する自然活動の動機と、活動を継続させる精神性を明らかにする。すなわち、小規模な自然活動を継続させる動機と精神性の要素を抽出し、その精神的な背景を明らかにすることとする。

本研究は、後述するように、家政学、生活学を研究の主軸とし、民俗学の研究手法を参考として調査研究をおこなうものである。調査対象地に共通することとして、生活を支える生業としての活動ではなく、生業の片手間になされるマイナー・サブシステム、「遊び仕事」が維持されている点である。1年の季節の移り変わりを通した自然とのかかわりのなかで複数年の調査をおこない、成果を得ることに意義があると考ええる。

さらに特定の地域で、異なった自然環境であるにもかかわらず、生業以外の活動に自立自存の生活を重ね合わせていく研究は、既往研究ではみられなかったものである。

1-3 研究の方法

1-3-1 研究の主軸——家政学と生活学

日本家政学会（1984）は「家政学は、家庭生活を中心とした人間生活における人間と環境との相互作用について、人的、物的両面から、自然・社会・人文の諸科学を基盤として研究し、生活の向上とともに人類の福祉に貢献する実践的総合科学である」としており⁵⁾、富田（1990）は、家政学は人間がまわりの環境と関連を持ちつつ日常生活を営む諸相を研究する学問である、と定義している⁶⁾。

家政学に非常に近い学問として生活学があり、以下のような定義が述べられ

ている。

佐々木（1975）は、生活は人間が自然に働きかけ、それを取り込み消費する行動過程としての規定であるといい、そこには何らかの社会的共同がある、という。さらに「人間が生きていく上での土台となる、基本的で普遍的な活動」を狭義の生活である⁷⁾と定義し、家庭生活を地域社会の生活との関連を予想するものであるとすべき、とする。

住田（1977）は、生活とは「食、衣、住生活を中心とし、さらに地域的に展開している日常生活」のことである⁸⁾、と定義する。

川添（1982）は、家政学が「人間を中心とした人間生活を研究する学」である、といい、生活学は、自分の学であり、「一人一人の私」について実証的な方法で明らかにすることであるとする⁹⁾。すなわち、生活とは、個人の日常生活全体を表す言葉であり、人間がモノを生産し利用することによって作り上げた人間独自のものである、としている。

今井（1991）は、個人の生活に焦点を合わせるのが家政学であり、広い生活一般に焦点をあてるのが生活学であって、両者はその相互作用で自己実現をしていけるであろう¹⁰⁾、といい、家政学と生活学の両者の関係を明らかにしている。

以上の家政学や生活学の考え方を踏まえ、本研究では身近な生活行動と生活事象の意味をさぐるべく、それらを対象化し、理論化することが生活学の仕事（市川 1978）¹¹⁾という見解や、消費生活を中心としながらも、家族とは独立的に営まれるさまざまな人間関係や、地域における協同的關係、自然との共生などの問題を扱わなければならない（柴田 2000）という見解に基づき、調査を進める。さらに本研究の視点としては柴田が生活学の研究対象を、生活に関連するさまざまな社会関係や人間形成の問題にまで拡大するものでなければならないとしている点¹²⁾や、天野（1996）が「生活者」として自らの生活に関して自己決定できる市民の発展を求めていること¹³⁾と関連して、学問を社会の現実の問題に結びつける視点を設定する。

以上のように、本研究においては、生活を軸とした隣接するこの二つの学問、家政学と生活学を研究の軸に据えることとして論考をおこない、生活を以下のように定義し、調査対象を限定する。

本研究では、生活を人間と環境との相互作用によって営まれる「地域に根差した日常活動」と定義し、丹後・丹波地方における生業ではない、自然とかわる生活を調査対象とする。

1-3-2 マイナー・サブシステムス、「遊び仕事」

本研究の生活調査において、マイナー・サブシステムスは主要な概念である。前述のように、生業活動の陰にあって経済的な意味がほとんど存在しない活動をマイナー・サブシステムスとし、これを「遊び仕事」と名づけている研究者もあってそれぞれの意味を明らかにする必要がある。

鬼頭（1996）は主たる生業以外の生業的な営みをマイナー・サブシステムスと呼称し、さらに複合生業論とのかかわりを指摘して、人間の営みを複合的にとらえる安室の報告を挙げている¹⁴⁾。さらに鬼頭は、自然活動の「楽しみ」に注目し、遊びが見いだせる自然活動を「遊び仕事」と名付け、それは活動を続けていく目標や動機となっていることを指摘してマイナー・サブシステムスを精神性が強い営みとしている（鬼頭 2009）¹⁵⁾。

また、マイナー・サブシステムスの「遊び」の存在は、山下（2006）も指摘するように「遊び」のなかにこそ伝承の力が存在するという。「遊び」の領域には、自然とのかかわりのなかで山菜やキノコ採り、イナゴを捕まえるなどが挙げられ、この自然とのかかわりが遊びの営みを通じて伝承されていることに注目している¹⁶⁾。

松井（1998）は、生業活動の陰にありながら、それでもなお脈々と受け継がれてきている生業活動をマイナー・サブシステムスと定義した。しかし、必ずしも主要な生業とマイナー・サブシステムスが対概念にはとどまらないとしており、マイナー・サブシステムスは遊びの色彩が強い労働であると同時に伝統的な活動であり、楽しみや遊びといった情緒的な価値がもたらされているとし、その活動は身体全体を通して自然との直接的なかかわりを体験させるものである¹⁷⁾、と述べている。

安室（2006）は、「遊び仕事」を農作業の合間におこなう娯楽性の高い作業と定義し、生業との関係性を述べている。すなわち、稲作の合間に水田で魚やドジョウを獲り、農作業の終わりにカモを獲りに行く、というような遊びと仕事の間にある小さな生業を「遊び仕事」と呼び、それがあからこそ生業によって生活全体が維持されている、と述べる。そこでは完全に遊びではなく、生活の一部として多少の収入につながったり、食生活を豊かにしたりする要素を見出すことができる¹⁸⁾。

さらに安室は「まごつき仕事」という言葉を使用して、マイナー・サブシステムスが主要な生業の動機や意欲の維持に役立っていることを指摘した。まごつき仕事は、たとえば主要な生業や大きな経済規模の農林水産業に従事する行き帰りの山菜採り、生業のための道具整備など、生業の合間におこなわれる仕事のことで、規模は小さいながら、生活における重要な役割を果たしているも

のであると述べる。

結城（2006）は、「山遊び、川遊び、磯あそびのにぎわい」として、それぞれの遊びの解禁日、休み日などの例を挙げ、「遊び仕事」は楽しみの仕事であるという東北地方の例を挙げている¹⁹⁾。山下（2006）は、過去の「遊び仕事」の記録から、現代の過疎地域の高齢者の記憶を呼び起こすことによる変化を挙げ、「遊び仕事」の伝承が地域を未来につなげることになる²⁰⁾と述べている。福永（2009）は、「マイナー・サブシステム」も「遊び仕事」も、農山漁村を問わず、主要な生業ではなく、山菜採りや魚釣りなどの楽しみを備えた行為を意味する²¹⁾と述べる。

三橋（2013）は、「遊び仕事」を通したサブシステムについて、イリイチの「サブシステム＝自立自存」の観念に立ち返って「遊び仕事＝サブシステム」の視点からとらえ直し、その価値について述べている。そこでは「遊び仕事」の特質を挙げ、自然共生、サブシステムとしての価値をまとめている^{22) 23)}。

ただし、こうしたマイナー・サブシステムや「遊び仕事」などの言葉は、本来の語源からすれば矛盾する単語を並べたものであり、その定義や定着性には疑問が残る。サブシステムは自給自足と訳され、自立自存も自給自足と同義語とされる言葉であるために、マイナー（小規模）なサブシステム（生業）とは本来の「生業」の意味とも齟齬がある。「遊び」と「仕事」も対立して使用されることが一般的である単語であり、「遊び仕事」は馴染みが良いとはいえず、研究者によってとらえ方が異なる原因とも考えられる。さらに、前出の松井（1998）が指摘しているとおり、生業やそのほかの自然活動とマイナー・サブシステムは密接に関連していて切り離せるものではなく、そこに遊びの要素があるかどうかは当事者にとってはまた別問題である。

しかし、本研究においては、マイナー・サブシステムを生業活動のかたわらにありながら受け継がれてきている自然とかかわる活動であり、遊びの色彩が強い活動であると同時に伝統的な活動である、と定義する。

こうした用語上の問題はあるが、本研究では、前項で述べた家政学・生活学の視点を踏まえつつ、マイナー・サブシステム、「遊び仕事」の諸研究を参考にして類似の事例を調査することとする。

1-4 調査手法の参考として——民俗学

1-4-1 民俗学における自然

鬼頭（1996）は、民俗学における自然活動について、人間と自然との関係性、人間の営み自体に目を向け、人間の自然に対する能動的な働きかけを「生業」、人間にとって

自然から受ける受動的な働きかけを「生活」と定義している²⁴⁾。

松井（1997）は、自然という概念についての議論をおこない、文化と自然とのかかわり方、人間と自然とのかかわり方という課題を具体的な問題として論じ、多くの事例を挙げている²⁵⁾。鳥越（2004）は、生活者の立場から環境を考えるとし、自然と人間とのかかわりについて、人間が自然をどのように利用してきたか、という視点から「自然の力」と「人間の力」を二つの変数として設定する²⁶⁾、としている。

このように民俗学において、かつてのような地域の生業を詳細に記録している研究については、あらたな視点で考察することが必要であるといわれている。とりわけ、生業と自然環境とのかかわりについての論考が多くなってきており、篠原（1992）²⁷⁾（1994）²⁸⁾（1995）²⁹⁾の提唱する環境民俗学では、自然と人間とのかかわりを多様な面から考察し、これまでの民俗学的調査に対して、「観察」や「聞き書き」を同等に評価する民俗誌の必要性が述べられている。

菅（2006）は、サケ漁の例をあげてコモンズとしての川の問題を取りあげ、それがどのように変化してきたかを述べている。菅はコモンズを「複数の主体が共的に使用し管理する資源や、その共的な管理・利用の制度」と定義している。それは国家や政府の「公」的な位相と、個人の「私」的な位相の中間の「共」的な位相に存在する、といい、かつては伝統的在地社会であった³⁰⁾と述べており、単なる漁の調査ではなく、そこから社会の規範を導き出したとらえ方は新しい視点であり、参考となる考えである。

本研究においては、以上の研究に共通する「自然」の概念を、漁業や農業、林業といった生業との関係における対象として捉えるのではなく、生業の合間になされる山、川、海での遊びの要素の強いかかわり方の対象として定義する。

家政学の研究対象は、前述のように人間と環境との相互作用であり、食生活、衣生活、住生活など、人間がまわりの環境と関連を保って日常生活を営む諸相を研究すること（富田 1990）であった³¹⁾が、それは単にモノの研究をおこなうのではなく、生活のなかでモノがどのように使われているのか、ということが重要であると捉えられる。また、生活学でも生活の全過程を対象として「日常生活」の問題を研究対象とする（住田 1997）ことであった³²⁾。

これらの点において、民俗学の研究も生活を対象とした視点からの研究では家政学・生活学と非常に似通ったものであり、環境民俗学が「観察」と「聞き取り」に重きを置いているところとも相通じるところである。

よって本研究でも、観察と聞き書きを研究手法の中心に据えることとする。

1-4-2 研究形態

観察や聞き書きによる人々の生活を記録するという方法の研究において、結城（2009）の「地元学」は、自然と共に暮らす人びとの生活を見つめ、ともに生きることによる研究³³⁾を示したが、これは新しい生活研究の切り口であるといえよう。さらに、岩本ら（2012）による「自分史」や「聞き書き」を加えた研究も重要視されてきている³⁴⁾。菅（2012）もまた、人間と民俗とのかかわりのなかに価値が生成される生活者主義の観点からなされる公共民俗学を提案し、現場への多様な実践として、個別の地域と人びと、それが育む地域文化に深く入り込んで様々な価値をすくい取ること³⁵⁾の重要性を説いている。さらに中村（2012）がアカデミズムとアマチュアリズムとの関係から「野の学問」である民俗学を位置付け、「ノ」=フィールドで得られたデータによってこそ「ヤ」=在野=市民・民衆・地域に資する研究が成り立つ、という「新しい野の学問」を提唱する³⁶⁾。そして、佐藤（2009）は、研究者自身について一定期間地域を訪れる従来の研究者を「訪問型」研究者といい、外部の第三者としての立場であるという。しかし、この研究者は集中的な研究は可能であるが、長期的な研究をおこなうことは難しいとし、地域社会に定住して、地域社会の一員として生活する「レジデント型研究者」の必要性を述べている³⁷⁾。

本研究では、このような現在の研究の流れを汲み、まず、調査対象地域への踏査を前提とすることとする。また、調査対象地域に短期間滞在したり、構造化された質問や取材をおこなったりするだけではなく、中長期的な滞在、定期的な訪問を可能な限り繰り返すことで、在来の研究に見られる単発事例の報告ではなく、研究対象者や研究対象地域の生活を俯瞰して個々の事例を位置づけられるように試みる。

1-5 関連する研究事例

生活に関する研究は多岐の分野にわたって行われてきているが、なかでも近年は地球環境問題や生活環境問題を軸として、自然と人間とのかかわり方に関する研究が盛んである。

秋道（1995）は、日本人の自然観と民俗文化との関係を概観し、資源を活用する人間のあり方として、「なわばり」という言葉を用いている。そこでは各地の調査による具体的な海、山、川の資源の例を取りあげている³⁸⁾。この研究は、自然とかかわる活動を地域との関連で考える手掛かりとなる。

鬼頭（1996）は、前述のように自然的環境に偏りがちであった研究を、社会的環境・精神的環境の三者を総合的にみていく環境倫理を提唱し、人間と自然の関係性、人間の営みに目を向けて、「生業」と「生活」という両者の視点からのアプローチを試みた。そこでは、自然とかかわっている人びとには「生身の自然」、自然と切り離された生活をしている人びとには「切り身の自然」とあらわされ、具体的には食生活における肉料理をあげている。すなわち、飼育され、あるいは確保されて屠殺され、食物となった「切り身」の肉と、食用にはなっても害獣として駆除対象となるイノシシやシカといった動物との違いによって理解されている³⁹⁾。

田中（2010）もまた、猪は害獣とみられて防獣の対象とされてきたが、狩猟人口の減少、山林の荒廃などにより、分布図が拡大して個体数も減少していない、と述べているが⁴⁰⁾、猟の具体的な調査事例ではない。

今里（2004）は、丹後半島の集落の定置網漁村における複合生業形態の計量分析を行っている⁴¹⁾が、昭和初期の事例である。鈴木・松本（2011）の舞鶴市の漁業管理の事例調査⁴²⁾など、個々の調査事例があるが、いずれも行政からの調査であり、本研究の視点とは異なっている。

田辺（2014）は、日本各地の磯漁についての詳細な調査に基づく報告をおこなっていて、各地の磯漁の呼び名も記されている詳細な研究である⁴³⁾。丹後地方の事例も挙げられているため、参考となるものである。

そのほかには、各地の民俗的な著作や研究論文、武田（1973）の京都の民俗研究⁴⁴⁾などがいくつかみられ、丹後地方にかかわる事例報告として、森本（1980）⁴⁵⁾、井之本（2005）の報告⁴⁶⁾や、日本海沿岸を対象とした北村（2005）の調査報告⁴⁷⁾などがある。これらはいずれも地域の民俗の事例報告に留まっている。

さらに、ものづくりや「自然と人間の共生」という視点から、三橋ら（1996）⁴⁸⁾、大鋸ら（2011a）の資源循環体系の比較検討⁴⁹⁾などの調査事例がある。これらの研究は、これまでの地域調査に対して行動の規範観念を想定し、人々の生活に精神的な要因を解明しようとした点に特色がある。そして、その背景には、自然と共生する人々の生活を見出しており、本研究にも参考となるものである。

食生活に関しては、伝統的な食事の記録や地域に固有の食材の調査などが多い。和仁（1998）は「食物文化」を形成する要因を考察する際に「文化」について

明らかにする必要がある⁵⁰⁾、としている。京都府の食生活では、畑（1985）の「丹後海岸の食、自然、農・漁業」の項に伊根町でなされた当時の調査が記されている⁵¹⁾。一方、江原（2009）⁵²⁾（2012）⁵³⁾は、儀礼食、行事食などの特別なものではなく、日常の食生活を記録し、地域の食生活の実態を料理形式と関連させた研究が期待される、と述べている。このように、行事食や伝統食の記録は地域や行事が限られていてすべての記録を地域ごとに網羅することは難しい。それとは別に、日常の食生活を記録することは、地域の生活を調査する上でも重要であり、本研究にも参考となる視点である。

「自立自存」については、イリイチが「(収入、食料不足の時の) 生存」「(ぎりぎりの) 生活：設計」という意味の「サブシステム」という言葉を「人間生活の自立自存」と再定義している⁵⁴⁾。そこから、現代の自立自存的な生活に関する研究を調べた結果、適切な事例は少なかった。

自立的生活を論じる場合には、一般的に高齢者に焦点をあてている。すなわち、高齢者は生業としての活動よりはマイナー・サブシステムの活動が主となることが多いからである。中村（2010）が宇治市の事例として地域集会施設の役割を検証し、さらに、高齢者自身が地域の集合施設の運営管理にかかわっていることを報告し⁵⁵⁾、松川（1996）は山梨県を事例として、山村高齢者の自立的生活について同地区の高齢者の現状を調査して生活を支える人間関係などの報告をおこなっている⁵⁶⁾。また、小林（2003）は、山陰地方の中山間地域住む高齢者の実態を調査している⁵⁷⁾。

一般的に高齢者については多くの研究事例があるが、自立的生活については直接参考となる文献は少なく、また、自然とかかわる生活との関連においてはさらに少ない。本研究では自然とかかわる自立自存的な生活を研究対象としているので、前項の研究と関係を持ちながら、本研究の基礎となる理論を確立していきたい。

このように、食生活や自立的生活については本研究に直接かかわる研究は少ないが、調査の方法や過去の実情などは参考となるものである。

ここまでみてきたいずれの研究においても、個々の自然活動や生活習慣、文化の記録として非常に意義深いものがあるが、その多くは記録や比較が中心となっている。民俗学や生活学における研究は、生活を俯瞰する視点を中心にやはり記録や比較を内容とするものが多い。環境倫理学においては、自然と人間とのかかわりの新たな問題を提起している。

日本家政学会の家政学の定義は、「家庭生活を中心とした人間生活における人

間と環境との相互作用について研究し、生活の向上とともに人類の福祉に貢献する実践的総合科学」、となっている。ここで実践的総合科学であると述べられている以上、家政学や生活学の研究においては、広い視点から生活を研究していくために一般化して提案していかなければならない。レジデント型研究者が待たれているのは、実際の生活に根差した「野の学問」が求められているからであり、それは家政学や生活学の研究手法として有効である。

したがって本研究においては特徴的な研究対象者とともに、研究対象地域において長期間にわたって生活を共にし、その生活を広く調査していくものとする。

1-6 論文の構成

本論文は序論（第1章）、本論（第2章～第4章）、総括（第5章）から構成されている。

第1章では、序論として研究の背景と目的、研究の方法を述べ、さらに調査手法の参考となる民俗学の検討と類似する研究例を述べた。

第2章では、福知山市山間部での害獣駆除について、猟師への聞き取りをおこなった。

第3章では、京丹後市袖志地区の磯漁の調査をおこない、「おかずとり」という活動が継続されていることを明らかにした。

第4章では、宮津市由良地区の高齢男性に聞き取りをおこない、自立自存的な生き方について、行動理念を中心として考察した。

第5章は総括として、各章の概要と本研究の全体の考察をおこない、さらに今後の課題をまとめた。

引用文献

- 1) イリイチ, イヴァン (1990), 玉乃井芳郎・栗原彬訳: シャドウ・ワーク. 岩波書店
- 2) 鬼頭秀一 (1996): 自然保護を問いなおす—環境倫理とネットワーク. 筑摩書房.
- 3) 鬼頭秀一 (2009): 環境倫理の現在—二項対立図式を越えて. 鬼頭秀一・福永真弓編: 環境倫理学. 東京大学出版会. 14-20
- 4) 松井建 (1998): マイナー・サブシステムの世界—民俗世界における労働・自然・身体. 現代民俗学の視点 1 民俗の技術. 247-26

- 5) 日本家政学会 (1984) : 家政学将来構想 1984. 日本家政学会編. 光生館. 32
- 6) 富田守 (1990) : 家政学とはどういう学問か. 日本家政学会編: 家政学原論. 1-31
- 7) 佐々木嘉彦 (1975) : 生活科学について. 日本生活学会編: 生活学. ドメス出版. 35-55
- 8) 住田昌二 (1977) : 生活科学の立論と課題. 西山卯三編著: 住居学ノート—新しい生活科学のために. 勁草書房. 35-87
- 9) 川添登 (1982) : 生活学の提唱. ドメス出版. 233-248
- 10) 今井光映 (1991) : 生活の学としての家政学. 家政学の総合化と独自化. 今井光映・山口久子編: 生活学としての家政学. 有斐閣. 1-52
- 11) 市川孝一 (1978) : 「生活学」のための覚え書き. 文教大学紀要. 12, 89-94
- 12) 柴田周二 (2000) : 生活学の視点から. 長嶋俊介編: 生活と環境の人間学. 昭和堂. 46-58
- 13) 天野正子 (1996) : 生活者とはだれか. 中央公論社. 124-135
- 14) 鬼頭秀一 (1996) : 前掲 2)
- 15) 鬼頭秀一 (2009) : 前掲 3)
- 16) 山下裕作 (2006) : 「遊び仕事」の記憶と農村伝承 「過疎高齢化」という「錯覚」を超えるもの. 現代農業八月増刊号. 73, 148-157
- 17) 松井建 (1998) : 前掲 4)
- 18) 安室知 (2006) : 「遊び仕事」と「まごつき仕事」—小さな生業にみる自然と人の調和. 現代農業八月増刊号. 73, 140-147
- 19) 結城登美雄 (2006) : 人、自然とともに山野河海の人生を楽しむ. 現代農業八月増刊号. 73, 14-25
- 20) 山下裕作 (2006) : 前掲 16)
- 21) 福永真弓 (2009) : 精神・豊かさ—生きものと人がともに育む豊かさ. 鬼頭秀一・福永真弓編: 環境倫理学. 東京大学出版会. 100-105
- 22) 三橋俊雄 (2011) : 遊び仕事を通した Subsistence の再考. 第 4 回横幹連合コンファレンス. 北陸先端科学技術大学院大学 & 石川ハイテク交流センター
- 23) 三橋俊雄 (2013) : 遊び仕事の自然共生・Subsistence な生き方 : 自立自存、自分の力で生きることの大切さに関連して. Bulletin of Asian Design Culture Society. 7, 877-884
- 24) 鬼頭秀一 (1996) : 前掲 2)
- 25) 松井健 (1997) : 自然の文化人類学. 東京大学出版会. 91-94
- 26) 鳥越皓之 (2004) : 環境社会学—生活者の立場から考える. 東京大学出版会. 19-22

- 27) 篠原徹 (1992) : 聞き書きの中の自然. 日本民俗学. 190, 27-26
- 28) 篠原徹 (1994) : 環境民俗学の可能性. 日本民俗学. 200, 111-125
- 29) 篠原徹 (1995) : 海と山の民俗自然誌. 吉川弘文館. 37-49, 73-167
- 30) 菅豊 (2006) : 川は誰のものか—一人と環境の民俗学. 吉川弘文館.
- 31) 富田守 (1990) : 前掲 6)
- 32) 住田昌二 (1977) : 前掲 8)
- 33) 結城登美雄 (2009) : 地元学からの出発—この土地に生きた人びとの声に耳を傾ける. シリーズ地域の再生 1. 農山漁村文化協会
- 34) 岩本通弥 (2012) : 民俗学と実践性をめぐる諸問題—「野の学問」とアカデミズム. 岩本通弥・菅豊・中村淳編著: 民俗学の可能性を拓く「野」の学問とアカデミズム. 青弓社. 9-81
- 35) 菅豊 (2012) : 公共民俗学の可能性. 岩本通弥・菅豊・中村淳編著: 民俗学の可能性を拓く「野」の学問とアカデミズム. 青弓社. 83-140
- 36) 中村淳 (2012) : 野の学問とアカデミズム. 岩本通弥・菅豊・中村淳編著: 民俗学の可能性を拓く「野」の学問とアカデミズム. 青弓社. 209-230
- 37) 佐藤哲 (2009) : 知識から智慧へ—土着的知識と科学的知識をつなぐレジデント型研究機関. 鬼頭秀一・福永真弓編: 環境倫理学. 東京大学出版会. 211-226
- 38) 秋道智彌 (1995) : なわばりの文化史—海・山・川の資源と民俗社会. 小学館. 216-7
- 39) 鬼頭秀一 (1996) : 前掲 2)
- 40) 田中宣一 (2010) : 野生動物への対応とグローカリゼーション. 小島孝夫編: 地域社会・地方文化再編の実態. 成城大学民俗学研究所グローバル研究センター
- 41) 今里悟之 (2004) : 定置網漁村における複合生業形態の計量分析—昭和初期の丹後半島新井集落を事例として. 日本民俗学. 240, 1-28
- 42) 鈴木龍也・松本一実 (2011) : 共同的・自主的漁業管理の課題と可能性 舞鶴市野原地区の事例調査から. 龍谷法学. 44-1, 142-181
- 43) 田辺悟 (2014) : 磯. ものと人間の文化史 164. 法政大学出版局. 3, 406-41
- 44) 武田聴州 (1973) : 日本の民俗京都. 第一法規出版. 69-72
- 45) 森本孝 (1980) : 特集・丹後の海. あるくみるきく. 158, 16
- 46) 井之本泰 (2005) : 丹後袖志冬物語. 季刊東北学. 5, 148-163.
- 47) 北村敏 (2005) : 日本海沿岸イワノリ調査報告. 大田区立郷土博物館紀要. 15, 62-92
- 48) 三橋俊雄 (2013) : 前掲 23)
- 49) 大鋸智, 植田憲, 宮崎清 (2011a) : 伝統的ものづくり羽越しな布にみる資源循環型生活の要素の抽出—現代における資源循環型社会の志向と比較

- して.デザイン研究. 57-6, 9-18
- 50) 和仁皓明(1998):食物文化の形成要因について. 食文化の領域と展開. 日本の食文化第1巻. 雄山閣出版. 99-110
- 51) 畑明美代表(1985): V 丹後海岸の食、自然、農・漁業. 聞き書京都の食事. 日本食生活全集 26. 農山漁村文化協会. 321-328
- 52) 江原絢子(2009): 食文化研究の蓄積と課題—調理、料理形式、日常の食生活を中心に—. 日本調理科学会誌. 42-5, 269-274
- 53) 江原絢子(2012): 家庭料理の近代. 吉川弘文館. 187
- 54) イリイチ(1990): 前掲 1)
- 55) 中村久美(2010) 地域生活における集会所運営の評価とそのあり方—宇治市における集会所の運営・管理の方法—. 生活学論叢. 18, 3-12
- 56) 松川昭子(1996): 山村高齢者の自立的な生活—山梨県東八代郡芦川村上芦川地区の事例—. 早稲田大学人間科学研究. 9-1, 57-74
- 57) 小林定数(2003): 山陰地方の中山間地域における高齢者の生活環境に関する調査研究. 人間と生活環境. 10 (1)

第 2 章

現代生活の中での害獣駆除の意味

第 2 章 現代生活の中での害獣駆除の意味

2-1 本章の目的

2-1-1 獣害を取り巻く環境

近年、特定の生物の生息数の増加による生態系や農作物の被害が深刻化している。陸上生物で、農林水産業等に害を及ぼす動物を「有害鳥獣」と呼称し、ニホンジカやイノシシ、ハクビシンやカラスなどがその例に挙げられ、環境省により、鳥類 28 種、獣類 20 種が現在指定されている¹⁾。なお、狩猟鳥獣については、都道府県によっては捕獲が禁止されているものや、捕獲数が制限されている場合がある。これら有害鳥獣（以下、原則的に害獣と記す）による農作物の被害を軽減するために、1. 電気柵、フェンスなどで害獣と隔離する方法、2. 猟により増加した生物の個体数を減らしていく方法がある。それぞれを組み合わせ、自治体単位もしくは個人単位で有害鳥獣対策をおこなっている。

本論に関連して視察した田畑では、周りに金属製の柵や電気柵を張り巡らしている例が大半で、柵なしでは害獣に荒らされることが常態化している。しかし柵の設置と維持にかかる費用は少なくなく、また豪雪地帯では電気柵の冬季撤去や雪による破損など問題が多発する。そこで抜本的な対策のひとつとして、害獣の駆除をおこなうものである。

狩猟の期間は、北海道以外の区域では毎年 11 月 15 日～翌年 2 月 15 日、猟区内では毎年 10 月 15 日～翌年 3 月 15 日となっており、北海道ではそれぞれ 10 月 1 日～翌年 1 月 31 日と猟区内 9 月 15 日～翌年 2 月末日である。これは、農作業や落葉の状況、また鳥獣の保護の観点から設定されている。

害獣の捕獲頭数は年々増えており、2000 年と 2010 年の比較ではシカは約 14 万頭から 36 万頭、イノシシは約 15 万頭から約 48 万頭へと大幅に増加した²⁾。その中でも有害鳥獣駆除として捕獲された数はシカが約 4 万 7 千頭から約 19 万 5 千頭へ、イノシシが約 4 万 8 千頭から約 24 万 9 千頭へと極度の増加を見せている。狩猟としての捕獲頭数はそこまでの変化がないことから、害獣駆除が大きな負担となっているとみられる。

本論で取り上げる京都府福知山市は、平成 22 年度に「福知山市鳥獣被害防止計画」を作成し、23 年度から 25 年度にかけてこれを運用している³⁾。ここでは、ニホンジカ、イノシシ、アライグマ、アナグマ、ヌートリア、タヌキ、ニホンザル、カラスがもたらす農林水産業等における被害を明示し、これらの駆除に関する規定を示している。これによれば、福知山市域全体で平成 21 年度、

ニホンジカによる被害は 19.33ha で 1,933 万円、イノシシでは 14.38ha で 1,693 万円にのぼり、市域の 76%を森林が占める同市では深刻な問題となっている。

ニホンジカ(以下シカと記す)とイノシシの被害は他の害獣より極度に多く、同計画では以下のように述べている。

〔イノシシ〕 市内の全域に生息し、生育期から収穫期の期間に頻繁に出没し、継続して水稻、豆類、野菜などの農作物や農業用施設への被害が発生している。特に市域の東部に位置する六人部、三和地域などで多くの被害が見られる。

〔ニホンジカ〕 10 年ほど前までは、夜久野地域など市域の西部地域に被害が発生しているのみであったが、近年、生息区域の拡大と共に生息数も急激に増加し、シカの生息数が少ないといわれていた三和地域においても、被害が増加している。被害は、播種期から収穫期まで年間通して発生しており、植林をしても枝葉や樹の食害により、苗が枯損したり正常に生育できないなど、森林被害も各地で見られる。

上で述べられているような被害傾向は、福知山市を含む中丹地方および隣接する丹後地方での、筆者らの聞き取り調査においても明らかになっている〔未発表〕。

また、福知山市と舞鶴市および宮津市は、京都府下でも害獣被害がもっとも大きく、2012 年度に駆除したシカやイノシシは京都府内の計約 1 万 2 千頭のうち約 5 千頭を 3 市が占めている。駆除した害獣は、駆除した者が穴を掘って埋設するなどの処理をおこなっているが、高齢化などの理由によってこれも困難となっていることから、3 市は焼却処理施設を作ることを決めている⁴⁾。さらに福知山市は 2011 年に府内初の常設駆除隊の設置を試みた。これは、猟友会から推薦された人員を、恒常的に害獣駆除のために巡回して回るという計画であったが、実現しなかった⁵⁾。現在は、猟友会に所属している猟師が、メスジカは無制限、オスジカは 1 人 1 日 1 頭までの捕獲としており、被害の様子を見て駆除目標頭数を調整するとしている。一般的な猟も可能な「猟期」としては国の指定と同様である(2013 年は 11 月 15 日から 2014 年 3 月 15 日)が、害獣駆除としておこなわれる駆除猟は現在 4 月から 10 月の間も続けられている。

しかしながら、猟師の年齢構成の高齢化傾向と、猟師人口自体の不足は依然として全国的な課題である。ふたたび環境省による全国の統計を見れば、狩猟免許所持者数は 1975 年の 51 万 8 千人から 2000 年の 21 万人まで急落し続け、以後 20 万人前後で推移している⁶⁾。そのうえで、60 歳以上の免許所持者比率は、1975 年には 4 万 6 千人で 1 割以下であるのに対し、2000 年は 8 万 1 千人で約 4 割、そして 2010 年には 19 万人中 12 万 2 千人と、約 6 割に達してきている。こ



図1 福知山市雲原



冬景色

の傾向に改善はみられておらず、狩猟の高齢化と人口減少は害獣問題にとって大きな課題であるといえる。これに対し、既出の「福知山市鳥獣被害防止計画」では、「(害獣の駆除)隊員は、有害鳥獣の捕獲に意欲と技量を持った者で構成する。休日等限定した期間のみの活動参加しかできない場合も、幅広く参加を認めていく。」⁷⁾としている。このように、害獣を駆除するための人員は幅広く求められているところである。

図1は、調査対象地である福知山市雲原の景色である。

2-1-2 生活の中の害獣駆除

こうした数字からも読み取れる通り、高齢化によって体力的に害獣駆除をおこなうことが困難となっている地域も少なからずみられる。また、若い世代は職を集落の外に求め、他地区に移住しているか通勤していることが一般的にみられ、害獣駆除に割ける時間がないことも、駆除隊員確保が困難な一因となっている。それに反して、獣害は増加の一途をたどっているのが現状である。

今後、若い世代を採り入れて駆除に必要な人材を確保し、かつ広く継続的に活動をおこなっていくためには、害獣駆除活動それ自体が苦であるだけではなく、何かしらの形で利益を得られることが望ましい。ただし、有害鳥獣の駆除に助成金や補助金といった金銭的な補助を出すにも限度があり、また現在もすでになされていることである。今後、害獣駆除を続けていくための新たな動機が必要である。

そこで、長年にわたり継続されている他の自然活動の例を参考にすることとする。すなわち害獣駆除は、自然の中で野生の動物を相手におこなわれることから、自然活動の一種とみなせる。ところで、ここまで述べてきた害獣駆除は、専門の猟師としてではなく、農業など他の職業を生業としている者が猟をおこ

なっている場合があり、家計における経済的な収入に占める猟の割合は少ない。こうした本業の合間になされる自然活動は、さまざまな学問から研究がなされており、ここでは以下の3つを取り上げる。

松井（1998）のマイナー・サブシステム⁸⁾は、経済規模が比較的小さな自然活動であり、害獣駆除もここに区分されうるが、捕獲された害獣は消費されずに投棄もしくは焼却されることが一般で、その場合は現金収入も獲物の売却ではなく補助金であることが特徴的である。そこに獲物自体を目的とした「猟」と「害獣駆除」の違いがある。また補助金収入を含めて、獲物やそれによる金銭的な収入自体を本目的にしているものではなく、あくまで農林水産業に悪影響を及ぼす獣類を駆除することが目的であることも、他の自然活動と成り立ちを異にしているところである。

安室（2006）が提唱する「まごつき仕事」の概念⁹⁾を、害獣駆除に当てはめた場合、仕事の合間に猟をおこなうことは、農林業などの本業を守るための前提の仕事、すなわちまごつき仕事であると解釈ができる。ただしこれも、農林業の直接的な準備ではなく、たとえば道具を整備することなどとは異なり、あくまで障害を取り除くという意味で趣を異にするところがある。

鬼頭（2009）は、自然活動における「楽しみ」の要素は、活動を熱心に続けていくための目標や動機となっていることを指摘した¹⁰⁾。さらにマイナー・サブシステムを、物質・経済性よりも精神性が強い営みであると評価し、概念を拡大している。しかし害獣駆除を考える際に、このような視点から論じ、害獣駆除における「楽しみ」については言及されているものはない。そこで、害獣駆除に携わる者の聞き取り調査から「楽しみ」の要素を見出すことができ、その「楽しみ」の要素を伝えていくことが可能ならば、これまで害獣駆除をおこなわなかった人たちが興味をもち活動を始める契機となり、広く害獣駆除をおこなうことが可能となり、害獣の頭数の減少と農地等の保全を実現することが期待できる。

2-1-3 調査の目的

獣害の駆除に関してはその技法や規則、問題点についてはすでに研究や公開がなされているので、細かく述べない。ここでは、害獣駆除をおこなっていて本業が別に存在する兼業猟師2名に話を伺い、その事例研究として害獣駆除活動にある「楽しみ」の要素に着目した。2人の猟師の生活の中で、害獣駆除がどういう位置づけにあるかを明らかにするとともに、害獣駆除活動を継続する動機づけ、特にその中で「楽しみ」の要素がどこにあるのかを分析することで、今後、害獣駆除を生活に組み入れていく際の知見とすることを目的とする。

2-2 調査の概要

2-2-1 調査対象者と調査方法、調査期間

本研究では、京都府福知山市の山間部で害獣駆除をおこなっている2人の猟師に話を伺った。

X氏は現在65歳の男性で、近畿地方他地区から転入してきた。一般企業を定年退職して、農業を主たる生業（以下本業と呼称）としている。約10年前に猟銃を扱える免許を取り、猟を始めた。猟は害獣の駆除が主目的である。またX氏の猟師仲間であるY氏（63歳男性）とも、猟や道具作成の際などに行動を共にしている。

Y氏は近隣の丹後地方の他地区から転入してきた。钣金工を本業としている。猟は約10年前から害獣駆除および趣味のためにおこなっている。

方法は、聞き取りと非構造化面接法によって発言の記録をおこない、実際の害獣駆除に同行しての動画および写真による記録である。そののち、発言や行動から、調査対象者の意識を抽出していく。

駆除の動向及び聞き取り調査期間は、おもに2011年10月から2013年3月までの13回おこなった。それ以外も2013年3月に至るまで、会話を記録するなど本論に関連して月に1～2回程度、現地入りをおこなっている。

2-2-2 害獣駆除の実態

（1）駆除概要

害獣の駆除には免許が必要で、下記4種類に区分される。

- 1：網猟免許……網を使用する猟法
- 2：わな猟免許……わなを使用する猟法
- 3：第1種銃猟免許……装薬銃を使用する猟法
- 4：第2種銃猟免許……空気銃を使用する猟法〔環境省〕

このうちで、2のわな猟にあたるものの中で、「はこわな」とも称される捕獲柵と捕獲檻¹⁾、そしてくくりわな等があり、研究対象者の2人は柵、檻、くくりわなによる猟をおこなっている。

研究対象者の害獣駆除方法は以下のとおりである。

X氏は本業の農業の合間に、Y氏は板金工の合間におこなう。両氏ともにおこなうのは、おもに捕獲柵もしくは捕獲檻を使用した駆除で、かかった害獣を槍で突く方法である。シカ、イノシシが対象である。駆除に使う槍は両氏の手製で、捕獲柵または檻のうち5メートル四方面程度の大きな柵は市が管理するもの（既定の大きさがある）、奥行き2メートル×間口1メートル程度の小型の檻

は、後述のY氏が作成したものがある（図2～5）。Y氏は、柵による駆除のほか、くくりわな猟も広くおこなっている。くくりわなは金属ワイヤー製のもので、害獣が上をとおり、設置されたワイヤーの間を足で踏み抜くとワイヤーがばねの力で飛び出し、足をくくる仕掛けのものである（図6、7）。最終的には槍で突き処理する方法である。

駆除の流れは、以下のとおりである。まず、くくりわな猟の場合はわなを仕掛けに行く。柵や檻の場合も、仕掛けを掛けに行く。次の日の朝、見回りをするか人から情報を聞き入れるかで、獲物がかかっているかを確認する。かかっていた場合は、すぐに駆除に入る。どの仕掛けの場合も、両氏は槍を使用して、獲物の急所を突く。そののち、わなから獲物を外し、市に提出する書類のため、シカは前歯、イノシシは尾を切断して保管し、写真を撮る。獲物を自動車に積み、柵や檻は元の通りに仕掛けなおし、くくりわなは撤去する。獲物は投棄穴に捨てに行く。そののち、道具類や自動車を洗浄して終了となる。一連の流れ自体は、猟として特筆すべきことはないと思われる（図8、9）。

（2）駆除および処理に使う道具

X氏とY氏の場合、前述したように、自ら道具を作成していることが特徴だろう。特にY氏は板金工であり、溶接や塗装などの道具が完備されているため、X氏も多くの道具をY氏に作成依頼している。檻は、鉄筋コンクリート用の鉄筋を溶接し、フェンス状にしたものを、L字型アングルなどを介して箱状に組み立て、仕掛けとなる扉や小道具を取り付け、最後に塗装をおこなったもので、Y氏はこれらの作業をすべて手掛ける。

くくりわな（以下、単にわなと表記）はY氏が自ら作成している。塩ビパイプ、金属ばね、金属ワイヤー、カシメやフックから構成される。市販の完成状態のわなを購入するより廉価であるため、Y氏は原材料を大量購入して、本業のひまをみては作成しているとのことである。

両氏が使用している槍であるが、柄はパイプを用い、先端にナットを溶接したもので、この先にボルトを溶接した槍先をねじ込むようになっている。槍先は、軽自動車のトラックに使用されている板バネを加工したもので、加工のしやすさや素材が適していること、材料が容易に手に入ることからこれを選択している。

獲物を食用にさばく際、包丁を使用するが、これもY氏が作成したものが多い数あり、X氏はそれを譲り受けたり、また自ら製作したりしている（図10）。刃の形状に何種類かあるが、それぞれに用途が異なり、最適な形状を模索した結果だという。材料は一般的な調理用の洋包丁である。廃棄されていたものや、

錆びきっていたものの刃先を削り出し、形状を変えて再利用している。形状は、引いて切るときに都合がいいものと押して切るときに都合がいいもの、肉を骨から削ぐ際に都合がいいものなどさまざまであるが、各人によって最適な形状は違うと両氏は口をそろえる。

このように、害獣駆除に必要な道具は購入できるものであるが、自主製作をおこなうことで、費用の削減と同時に使用方法に適した形状に変化させることができ、両氏ともに積極的に作成をおこなっている。

(3) 捕獲

害獣がかかったことは、他人から知らされることがあるが、たいていは自分で見回りにいく。ほぼ毎日のようにわなや柵を見て回っており、猟期の日課のようになっている。Y氏は手掛けている柵やわなの場所が多く、他人からも依頼されているため、地域内を広く巡回することになる。



図2 柵の作成の様子
(筆者撮影 2011年10月)



図3 完成した柵
(筆者撮影 2012年3月)



図4 柵を仕掛けた様子(白いものは米ぬか)
(筆者撮影 2011年10月、部分拡大)



図5 柵にシカがかかった状態
(筆者撮影 2011年11月)



図 6 くくりわな
(筆者撮影 2012 年 3 月)



図 7-1 くくりわなの作り方
(筆者撮影 2012 年 4 月)



図 7-2



図 7-3



図 7-4



図 7-5



図 8 捕獲物の記録 (写真撮影)
(筆者撮影 2011 年 12 月)



図 9 獲物の搬入
(筆者撮影 2011 年 12 月)

1) 柵および檻による捕獲

柵と檻（以下まとめて柵と表記）では、エサを撒いて害獣をおびき寄せる方法をとる。

害獣をおびき寄せるためのエサは、特に米ぬかがいいという。そこに塩を混ぜてみるなど、獲物が好むようにいろいろと試しているがなかなか思ったとおりにはいかないとX氏は述べる。また、芋類もよく使用する。柵の手前から撒き、柵に侵入するように誘導する。仕掛け線の奥に向かって餌を増やしていき、害獣が奥に誘導されて仕掛け線をはじくように狙う。

2) わなによる捕獲

わなに関しては、設置場所にさまざまな判断を必要とする。まず、捕獲したい害獣が通る道、もしくは通りうる場所に仕掛けることは絶対条件である。よって、いわゆるけものみちに設置することとなるが、シカとイノシシのどちらが通るか、クマなどほかの動物が通りうるのかなど、様々に予見しておき、狙った獲物がかかるように適した場所を選定する。シカとイノシシは足跡のほか、胴体の高さが違うため、植物の枝の折れ具合でも判断できる、とY氏は述べる。次に、わなをかける際は、必ず獲物が足を踏みそうなところを選ぶ。両脇に草木が生えているところ、道が狭くなっているところなどは獲物がすり抜けようとする予測でき、もしその間隔が広ければ、確実にわなの場所を足で踏むように、木の枝などを通らせたくない場所に刺して立て、通路を狭くしておく。この際には、獲物が四本足であることを踏まえ、足の動きを前提にして予測する必要がある。動物との駆け引きがある、とY氏は語る。

わなをかける際には穴を掘るが、掘った土や木の葉はビニール袋に入れ、わなを仕掛けて覆い隠すために埋め戻す際、掘り出した土や木の葉を使用する。こうすることで、においに敏感な獲物に対して効果があるという。においに関連して、人のにおいなどに対しても敏感であるため、害獣駆除を始めてからタバコを吸わないようになったというY氏。軍手やビニール手袋を入念に使用するのも、においがつくことを避けるためだそう。それでも失敗して、わながはじかれただけで獲物がかからない時や、獰猛なイノシシによって掘り起こされることがあるそう。

（４）獲物の処理

捕獲した害獣は、ほとんどの場合がシカもしくはイノシシで、大半は市の認定を受けた投棄場所で投棄し、埋め立て処理とする。処理する前に、シカは前歯を抜き、イノシシは尾を切断してそれらを保存し、写真を添付して害獣駆除の証明とする。投棄穴は、市で大きさが規定されているので、Y氏はその規格に合わせて重機を使用し穴を掘る。

獲物の中で、一部は食用にまわす。シカは初夏、イノシシは冬季に脂がのっており、食用としては旬とされているため、自家消費もしくはおすそわけ、販売に向けて成形・調製される。そのために前述の刃物を使用している（図 11）。



図 10 自家製の解体道具



図 11-1 燻製作り
（筆者撮影 2013 年 3 月）



図 11-2



図 11-3



図 11-4



図 11-5

2-3 害獣駆除の目的と動機

2-3-1 害獣駆除の特殊性

食用肉や皮などの成果物を得るためにおこなわれる猟とは異なり、原則的には獲物は投棄し成果として利用しないので、猟はほぼ無駄足であるといっても過言ではない。自治体からの助成金等があるが、前述のように十分に家計を助けるものではなく、それと引き換えに割かれる労力は多大なものである。

害獣問題について、X氏とY氏にうかがったところ、下記のような答えが得られた。

現在はすでに手遅れとなっている。30年ほど前までは、シカがこのあたりに出るという話はほとんど聞かなかったが、近年急増し、シカとイノシシがすでに駆除が追いつかないほどになってしまっている。現在はクマについて、同一個体の一度目の捕獲では放獣とし、二度目で駆除ということにしているが、すぐに駆除が追いつかなくなるのではないかと、との懸念がある。

駆除の活動自体は、そのために割かれる時間と労力は多大なもので、生活を圧迫することがある。

(1) 時間

害獣駆除には相当な時間を要する。Y氏は朝の見回りだけで1時間以上かかることがあり、もし獲物がかかっていたらそれだけ駆除の時間が伸びることとなる。参考までにX氏とともに出動して、駆除をおこない、害獣の投棄をY氏に依頼してから帰宅し、道具をすべて片づけるまで、約3時間を要した。柵までの移動時間は10分程度であり、それに比して道具の片づけと害獣の処理に時間が必要となる。もしシカやイノシシを食用とするため解体するならば、さらに時間がかかることとなる。

また、仕掛けにかかった場合、早く仕留める必要があることから、予定していた本業の活動ができなくなることがあり、非常に困っているといい、特に自然相手の農業は天候も大きく影響するため、左右されやすい。

(2) 経済

前述の時間に相応して、本業の時間を圧縮することとなる。X氏ならば農業の予定が大幅に狂うことがあり、Y氏も害獣駆除のために本業の時間を捻出するため仕事量を減らしているから、その経済損失は容易にはかり切れず、測定できない。なおかつ、駆除に必要な道具類、わな仕掛けや自動車の燃料など、経費はさまざまにかかる。これらは駆除するごとに、1頭当たりという形で市から受ける補助金によってある程度は相殺され、単純な金銭ではもうけが出ることがあるが、労働時間を時間給と見立ててみればまったく儲かるものではない。

い、と両者口をそろえる。Y氏は猟師生活 10 年の中で軽自動車のトラックを 1 台新規購入できたが、これも前のトラックが使用できなくなるほど害獣駆除のために使用したことと、新しいトラックもほぼ害獣駆除のために存在していることを考えれば、必要経費としてみるべきだろう。

また、Y氏は前述の通り、他人が所有する柵・檻やわなも併せて管理しており、狭い範囲内にもかかわらず時間と労力がかかるとともに、3 日で自動車のガソリンが空になることもあるなど、経済的にも負担になっている。

このように、経済的には厳密に計れない要素が多いものの、決して儲けが多く出ることはないことが、両者の言葉から明らかになった。

(3) 危険性

いうまでもなく、相応の体力が必要とされる仕事である。仕留めた害獣をトラックに積み下ろしする際や、出勤から帰着後の片づけ一連にわたるまで、前述のような時間がかかる活動であるため、体力は消耗する。

また、同時に危険な体験もあったという。特にイノシシは獰猛であり、危険を察知するとこちらに向かってくる習性があるため、危険である。Y氏は、わなにかかったイノシシを仕留めようとして、イノシシのわなが外れ、襲われたことがあった。その際は、とっさに荷物のリュックサックを蹴りだし、それにイノシシがくらくらいついている間に逃げたという。

クマに遭遇することもあり、危険を常々から感じているとY氏は述べる。

2-3-2 活動が続ける動機

(1) 活動のきっかけ

前述のように、多大な労力と危険が伴うものであるから、害獣駆除は好まれない。それでも猟師たちが害獣駆除をおこなう動機がある。害獣駆除に対する姿勢を明らかにするため、その動機を探った（図 12）。

X氏とY氏は、本業が別にあり、ともに年齢が 50 代になってから害獣駆除を始めている。そのきっかけを問うた。

また、両氏の考えを消極的な理由と積極的な理由に分けてみる。

1) 消極的な理由

- ・害獣を駆除しないと、農業ができない（X氏）
- ・身体が辛い、やらないと害獣が増えてしまうからしかたない（Y氏）

以上のように、「しかたない、やるしかない」ということが大きな理由となっているのが実情である。くわえてX氏は、「都会のものは農業の被害の現状を知らんから、動物がかわいそうなどというけれど、こっちはかわいそうだとは思っても、自分たちの生活を守らなければならない」と述べ、獣類に対する考

えの違いを指摘している。

また、周囲の人たちも害獣による被害には困っており、駆除には賛成しているものの、なかなか実際には手が出せていない。害獣駆除には相応の体力や時間が必要で、高齢化の進んだ地域ではそもそも若年層が少ないうえに、若年層の多くは勤務先が遠方にあるため時間的余裕がなく、そもそも駆除に向いた人材が不足しているという実態もある。

2) 積極的な理由

両氏ともに、害獣駆除を始める際の動機には、積極的かつ前向きな理由があった。

- ・鉄砲を撃つのが好きだった（X氏、ただし前述のとおり現在は銃を使用しない）
- ・親が猟師で自分にも経験と知識があり、やってみたかった（Y氏）
- ・誰かがやらなければならない、という気持ち、使命感（X氏）

X氏は、自衛隊に所属していた時から鉄砲の扱いに慣れていて、鉄砲撃ちがしたかった。また、退職後の農業において、害獣が問題化していたため、駆除する必要が生じた。結局、鉄砲は使わずに槍を用いて駆除をおこなっているが、これは鉄砲に対する規制が厳しかったり、物騒なものであるとの認識があったりしたためであるという。

Y氏は、父親が猟師だったので、子どものころから猟に興味があった。また、経験があったので、わな猟に特に興味があった。自分が板金工なので、道具を作ることが得意であったという。

（2） 害獣駆除の中にある「楽しみ」

積極的な動機づけには、猟をおこなっていくなかで得られた「楽しみ」の要素が大きく含まれていることが示唆されている。害獣駆除とはいえども、猟にはそれにとまなう楽しみがあり、それを見出してX氏とY氏は害獣駆除作業を楽しんでいる部分があることが表された。下記にそれをまとめる。

1) 目的・動機にある楽しみ

- ・道具を工夫し、考えながら作る試行錯誤の過程が楽しい（X氏、Y氏）
- ・わな掛けの場所ややり方を工夫することが楽しい（Y氏）
- ・狙った獲物がかかるとうれしい（X氏、Y氏）

繰り返して話題に出たのは獲物のことよりも道具のことである。両氏とも道具製作は積極的におこなっており、各自工夫して道具の改良をおこなっている。それは必要からくる面もあるが、道具製作それ自体に楽しみを見出している面がうかがえる。実際に2人とも道具の創意工夫は楽しいと語っており、道具を

考えては2人やほかの猟師仲間との間で見せ合いつつ、情報交換をおこなっている。たとえば、Y氏は包丁の柄に鹿の角を取り付けているが、これは滑りにくい、握りやすいなどの実用以上に、「遊び心」と述べている（図10の一部の包丁）。

また、X氏が獲れたシカやイノシシを燻製として調整する際に使用する燻製釜を、2人で協力してドラム缶を原料に作成している。その際はドラム缶の切断位置や空気穴の開け方などに試行錯誤があり、何器か製作しているが、次はどうするか、今度作ったものの出来はどうか、などに楽しみを感じている様子がみられた。さらに、獲れたシカの中で、形のいい角が取れるとうれしい、とY氏は述べており、置物やキホルダーなど、様々な嗜好品の製作をおこなっているが、その際にシカの頭部をゆでる釜もY氏が製作している。

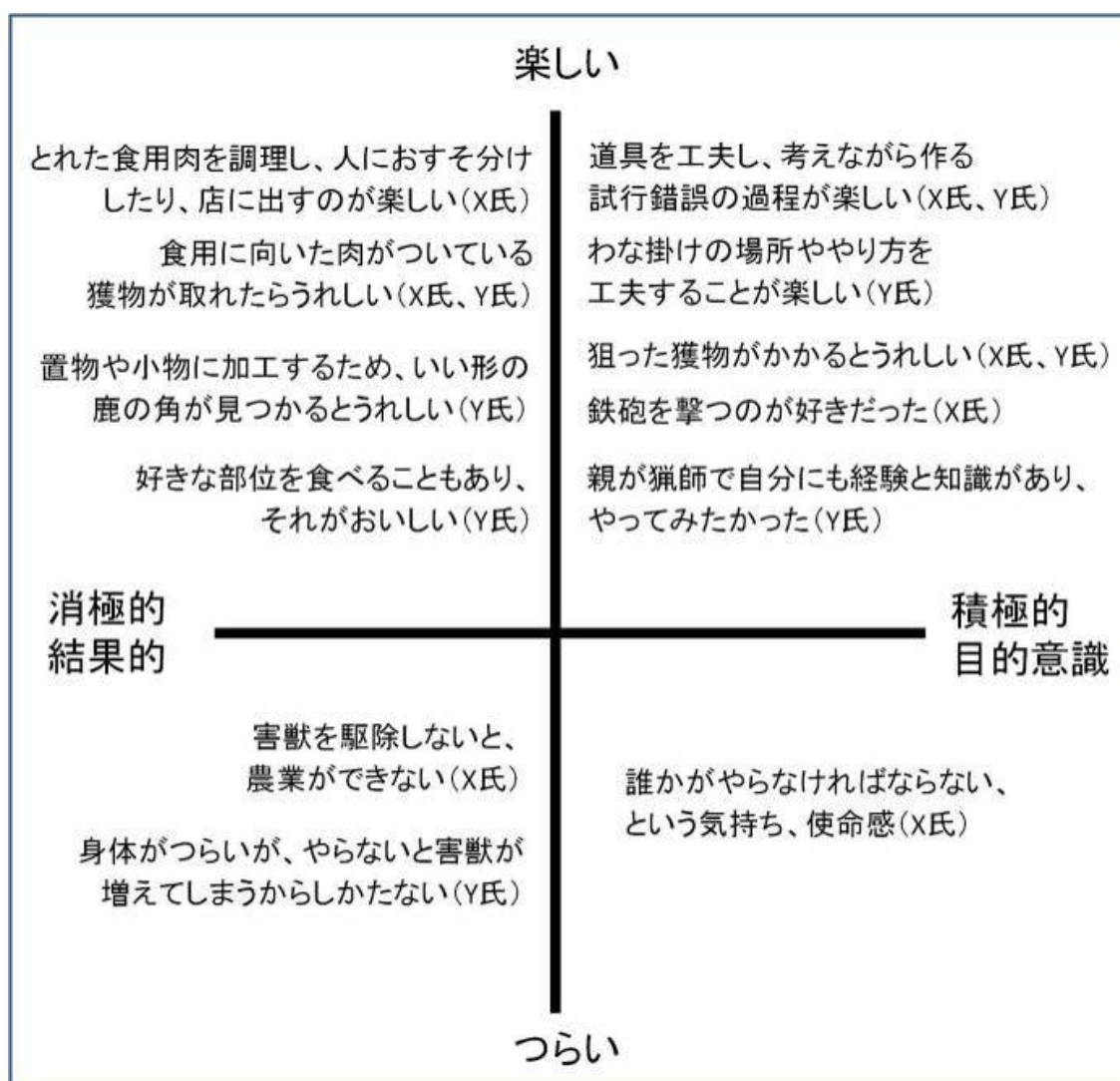


図12 害獣駆除を続ける心理

2) 結果的な楽しみ

- ・食用に向けた肉がついている獲物が取れたらうれしい（X氏、Y氏）
- ・とれた食用肉を調理し、人におすそわけしたり、店に出すのが楽しい（X氏）
好きな部位を食べることもあり、それがおいしい（Y氏）
- ・得られたシカの角や骨などを、置物や小物に加工していく楽しみがある。それ故に、いい形のシカの角が見つかるとうれしい（Y氏）

獲物を食用肉にすることは、相対的には少なく、ほとんどおこなわないが、X氏は地域の飲食店でイノシシを使った料理「ボタン汁」を提供するため、必要分のイノシシの解体をおこなっている。両氏ともに自らの食用にすることは少なく、肉類も購入してきた牛・豚・鶏肉を食することが日常であるというが、捕らえたシカやイノシシの肉質がよさそうなとき、脂がのっていいそうなときにはうれしくなるという。そして、解体をおこない、調理をしたり知り合いにおすそわけしたりすることがある。前述した燻製の場合は、味付けや燻製方法を探るところからはじめているが、隠し味を付けたり、味付けを変えてみるなど、そこにも楽しみを感じている。脂が多く肥えているイノシシは、Y氏は販売に行くこともあるそうだが、それも数は少なく、年間何度あるかの臨時収入になる程度であるが、それが故にとれるとうれしいというところがあり、活動中の娯楽性、ゲーム性がそこに見出せる。自然が相手ならではの不確定要素が楽しみに大きく影響しているところである。

Y氏は本業の板金工に直接的には害獣が被害を及ぼさないが、活動全体において遊び心をもっておこなっている面があり、害獣駆除を続けるうえで楽しみは重要な要素であると考えられる。

2-4 考察

(1)「楽しみ」の発見

ここまで2人の猟師の活動をみてきたように、害獣駆除はたいへん労力と時間が割かれ、費用も負担となる活動であることが明らかとなった。獣害は、害と呼ばれる以上、ない方がいいことであることは自明である。

ところが、2人の猟師は、害獣駆除という活動の中にも楽しさを見出していることが示された。特に道具の作成に関しては、情報を交換し合ったり、共同で製作したりするなど、道具を介した楽しみの共有をおこなっている。また、時折、食用肉として解体し成形した肉は、おすそわけが大半であり他人とのかかわりを広げている活動だとみられる。食肉は自分たちが楽しむ部分でもあり、その調製・調理方法を学び情報交換し合うことも楽しみの要素として挙げられる。

(2) 「楽しみ」の抽出の意義

先行研究や一般にも広く述べられてきたように、獣害は多大な負担となって現代の生活を脅かしている問題である。そして、害獣駆除をおこなう者にとって、その活動が必ずしも金銭的な利益にはつながらず、また害獣の駆除が終わることは到底予見できないほど獣類の頭数が増えている実態がある。このようななかで、時間、労力にくわえ、危険性や、害獣がかかることの予測の不可能さなど、害獣駆除に手を出すことをためらわせる要因は多々ある。何より、若年層が減じている過疎高齢化地域において、害獣駆除をおこなう人材自体が少なくなっており、いかに若年層を害獣駆除へ向けていくか、また地域の課題として解決していくかは喫緊の課題である。

そのなかにあって、本論で触れた2人の猟師が、苦しさの要素とともに「楽しみ」の要素をさまざまな面から述べていたことは特筆に値する。害獣駆除は決して楽な仕事ではなく、本論の2人の猟師も相応の労力を割いてしかたなしに活動が続けている一面があることは事実でかつ根幹ではあるものの、傍らで楽しみ要素を見出そうとし、実際に楽しみながら活動をおこなっているところがあることは、害獣駆除を続ける動機として強い下支えになっていると考えられる。

(3) 「楽しみ」の伝承

狩猟は、両氏を見ている限り、明文化されてない暗黙知、口頭伝承による知識が基盤となっている。さらに、体験をとおして得られた知識、すなわち体験知や自然知が付加されている。その体験を重ねる過程において、自然環境に依存するところが大きいため、その地域に合ったやり方、各狩猟者に合ったやり方を試行錯誤することが必要である。実際に2人の猟師とも、駆除経験を道具や次の駆除活動に反映して、試行錯誤を繰り返している。

また、こうした知識を発展させる過程では、知識の共有が必要である。X氏とY氏が共同で道具を作成したり、猟の状況をたずねあうことはその一例である。試行錯誤それ自体を楽しみに変えているのは、他人とのかかわりによるところもあり、獲れた獲物のおすそわけや道具、細工物の贈呈等にも表れている。

こうした「楽しみ」の要素を次世代へつなげていくことで、害獣駆除の技術を伝承する一助となり、かつ新たに活動を始めたり、今後も活動が続けていくための動機づけになるであろう。

(4) 害獣駆除に対する心

最後に、「楽しみ」の要素とともに大切だと考えられることを両氏が述べてい

たことを付記しておく。前述のように、害獣駆除には楽しみの要素があるとしたが、その楽しみの部分は限定されることに注目する必要がある。すなわち、楽しみは道具の作成や成果物を得ることであって、出勤することそれ自体や、動物の命を取ること、農業等への被害など、苦渋のうちになされる要素が多々あるということである。それは害獣駆除の根本的な課題である。「本当は無駄な殺生はしたくないが、やらないとこちらも（田畑を）やられてしまうから、やるしかない」（X氏）という言葉からも表れているとおり、2人の猟師は決して殺生すること自体を楽しんでいるわけではない。そこには人間の本能的な楽しさがあるかもしれないが、すくなくとも両氏の意識としては、命を取るとは重く受け止めようとしていることに意味があるだろう。Y氏は動物の供養のため、毎年、寺の鳥獣供養の際にお参りに行く。いくら害獣を問題だとして、「害」とであると見立てても、こうした命に対する意識こそ、次世代へつなげていくべきものだと思いたい。

（５）まとめ

本論により、害獣駆除という活動においても、猟師は「楽しみ」の要素をそこに見出し、活動を続ける原動力としていることが明らかになった。趣味や本業としての猟と異なり、害獣駆除は成果物を目的とするものではなく、獲物も投棄処分など利用されることなく処理されるものであるが、それでも活動の中には「楽しみ」がある。もちろん、害獣駆除は本来は生活の邪魔であり、大きな問題であることに変わりはない、しかし、生活の中で害獣の駆除をしなければならないという現状がある以上、それを少しでも継続していけるような前向きな動機が猟師には必要であろう。そして、害獣駆除の動機を形成するためには、補助金など助成制度のみではなく、知識や情報を共有する組織を作り、そのなかで楽しみも打ち出していかなければ、活動を始める動機づけが強くないのではないか。

このように、害獣駆除活動は、本来は地域の公的な活動として位置づけられている。駆除は農業や林業などの生業にかかわる重要な作業であり、猟それ自体が目的ではない。すなわち、地域の人々にとっては生活を円滑におこなっていく上で必要な作業である。そこに、公的な仕事としての義務だけでなく、猟をとおした地域貢献といえるのではないか。そこに猟師の地域に対する使命感を見ることができる。

さらに、害獣駆除という「苦しみ」の活動の中に見いだされる「楽しみ」の要素は、記録し伝承していくことに値するものであり、それがあって害獣駆除の心理的な負担が少しでも軽減されることを期待する。動植物の採捕採集と同

様、害獣駆除の「楽しみ」を若い世代へとつなぐことができ、多くの参加を集めることができれば、「しかたのない」活動から生活の中に溶け込んだ文化の一部となって、適切に自然が管理される社会を導き出すことができるかもしれない。

今後は、若年層が害獣駆除に携われない・携わらない要因を解明するとともに、その要因を取り除いていくことで、猟師年齢の若返りを図ることが必要である。また、自然動物保護の観点と対立しうる猟については、害獣の問題に対し、より多くの人が理解し、適切な対策を取っていけるようにしていく必要がある。

引用文献

- 1) 環境省自然環境局 (2014) : 狩猟制度の概要
<http://www.env.go.jp/nature/choju/hunt/hunt2.html>
- 2) 環境省 (2010) : 「年齢別狩猟免許所持者数」及び「狩猟及び有害捕獲等による主な鳥獣の捕獲数」「捕獲数及び被害等の状況等」より
- 3) 福知山市農林商工部林業振興課 (2012) : 福知山市鳥獣被害防止計画 (平成 25 年度 変更計画作成)
<http://www.city.fukuchiyama.kyoto.jp/shisei/docs/251204tyouztyo.pdf>
- 4) 京都新聞 2013 年 12 月 16 日付 「有害鳥獣、3 市で焼却 福知山・舞鶴・綾部、14 年度に施設建設」
<http://www.kyoto-np.co.jp/politics/article/20131216000025>
- 5) 京都新聞 2011 年 8 月 23 日付 「常設捕獲隊発足できず 福知山市の有害鳥獣対策」
- 6) 前掲 1)
- 7) 前掲 2)
- 8) 松井健 (1998) : マイナー・サブシステムの世界—民俗世界における労働・自然・身体. 現代民俗学の視点 1 民族の技術. 朝倉書店. 247-268
- 9) 安室知 (2006) : 「遊び仕事」と「まごつき仕事」—「小さな生業」にみる自然との調和. 現代農業 8 月増刊. 140 - 147
- 10) 鬼頭秀一 (2009) : 環境倫理の現在—二項対立図式を越えて. 鬼頭秀一・福永真弓編 : 環境倫理学. 東京大学出版会. 14-20
- 11) 前掲 2)

第 3 章

「おかずとり」の意味と共同体意識

第3章 「おかずとり」の意味と共同体意識

3-1 本章の目的

これまで調査研究を行ってきた丹後半島の京丹後市丹後町袖志地区において海や磯における自然活動の概要を把握し、その活動が受け継がれてきた理由、要因を探ることである。磯でマイナー・サブシステムとして位置づけられる自然活動は、収入を目的とはしない採捕活動にある。かつては生業としての漁業であった活動が、規模を縮小し、収入を目的としない活動へと変化しながら継続されている。

袖志地区においては、このような自然活動の中で実際におこなっている採捕活動が「おかずとり」と呼ばれていることに注目した。おかずとりは、「おかず」＋「とる」が名詞になったものと考えられる。おかず（御数）とは、「数を揃える」意味から発生したもので、我が国の食生活において稲作が定着し、米や穀物を主食とし、その他の食材を副食とする食生活の習慣から生まれた言葉である。宮本（1999）は酒の肴がおかずを生んだ、としている¹⁾。また、江原（2012）は、家庭料理の変化について、日常の食事は、ご飯を主食に、汁、おかず、漬物の基本形をとることを示し、おかずの内容がさまざまに変化してきていることを述べている²⁾。したがっておかずをとる、ということは副食物を手に入れる、ということであり、調査地では稲作を主体とした生業が成立している背景から生まれたものであることが窺える。すなわち「おかずとり」という言葉は調査対象地の人々にとって栽培、養殖、購入ではない採捕によるものとして用いられ、彼らの食生活において大きな意味を持っているといえる。

次に、調査にあたって中心的な生業との違いを明確にするため、個々人もしくは家族単位での活動を対象とし、商業利用を主目的としない活動であることを原則とした。この点で、専業漁師や農家の生業としての漁や生産活動は含まないこととする。また、「とる」ということから生物を「とる（捕る・採る）」活動であり、その点からも田畑での栽培や海を区画して行う養殖などは含まないこととする。また、「日常のおかずをとりにいく」という意味付けであるため、採捕者の生活圏内でおこなわれる活動であることを原則とする。

したがって、本研究は袖志地区において海や磯における自然活動の概要を把握し、その活動が受け継がれてきた理由、要因を探ることである。袖志地区の「おかずとり」は本来、海、山、川など自然の中のさまざまな場所でおこなわれる活動である。ここでは「おかずとり」を「食生活においておかずとなるも

のを栽培、養殖、購入ではなく採捕によって手に入れること」と定義することができよう。

この調査地域で見出された「おかずとり」という活動は、前述のマイナー・サブシステムとして位置付けられる。これまで生活者の視点からは十分に調査がなされていなかった多様な自然環境の中での食生活に必要な活動の実態を明らかにするとともに、なぜそれらが継続されてきたのか、またその活動に人々がどのような要素を見出しているのかを聞き取り調査を中心として明らかにする。

3-2 調査の概要

3-2-1 既往研究

ここで調査対象とする丹後半島の磯漁に関連する既往研究には、水産資源の資源管理の観点から漁業慣行において書かれたものが存在する。漁業慣行や規則について、鈴木・松本（2011）は舞鶴市野原地区の事例³⁾を、秋道（1995）も同様に様々な地域の漁業慣行について述べている⁴⁾。また、今里（2004）は定置網集落の生業形態の分類をおこなっている⁵⁾が、これらは主たる生業としての漁業を焦点としたものである。磯漁については田辺（2014）が全国 65 か所の調査結果において、丹後半島で使われている「イソミ（磯見）」という言葉とその漁の特徴を記しており、経ヶ岬灯台付近のノリを取りに行く子どもたちの様子（1964 年頃）を写真で伝えている（図 1）。さらにイソミという言葉を用いている地域は日本海沿岸の 6 か所であることが示されている⁶⁾。また、おもに丹後のイワノリ漁業について現地での聞き取りを基にした民俗誌や紀行文が存在する⁷⁾⁻⁹⁾が、単にイワノリ漁の活動における記録的要素が強く、ほかの自然活動を合わせて丹後の生活を俯瞰したものではない。これらの活動に対して、地域固有の呼び名があることは記されていないだけでなく、それらはほとんどが収入を得るための磯漁であることがわかる。



図 1 朝から磯ノリを採りに行く
子供たち（経ヶ岬灯台付近、
1964 年頃、田辺悟撮影）



図 2 袖志地区の位置
(国土地理院白地図に加筆)



図 3-1 袖志集落 (集落東側の棚田より
2013 年 8 月 18 日 筆者撮影)



図 3-2 袖志集落



図 3-3 岩場



図 3-4 海岸



図 3-5 海から見た経ヶ岬

3-2-2 調査の概要

(1) 調査対象地

調査は、京都府京丹後市丹後町の袖志（そでし）地区である。丹後半島最北端、経ヶ岬の西側に位置する集落で（図2）、海岸と棚田や畑を有する南の丘陵との間に、細長く集落が密集している（図3）。世帯数は微減にとどまるものの、人口は大幅に減少した。2013年の統計では世帯数は84、人口は204人、一世帯あたりの人数は2.4人である¹⁰⁾。15年前（1988年）の一世帯あたりの人数は3.8人であり、年々減少傾向にある。高齢化率は42%¹¹⁾である。気候は多湿地帯であり、年間をとおして雨が多く、快晴の日が少ない。

積雪期間は100日におよぶことがある。冬は北西の風の日が続き、海上は荒れ模様となり、波の高度が高い（1m以上）日がほとんどである¹²⁾。

1999年、袖志の棚田が棚田百選に選ばれたことから、現在はおもに愛知県を中心とした中京方面より、連日のように見学者・観光客が訪れている。

(2) 調査方法

調査方法は聞き取り調査による。

聞き取り調査は、地区に住む11世帯13名に実施した。調査期間は2013年5月～11月である。調査対象者は60代後半～80代前半で、女性10名、男性3名である。そのほとんどが現在、年金で生活している。実際に予備調査では、比較的に女性が積極的に参加しているということが明らかとなったため、調査人数の男性が少なくても実態を把握できると考えた。また、磯での採捕活動である「おかずとり」をおこなっている世帯はほとんどが高齢世帯であった。

調査対象世帯と対象者については、表に詳細を記録した（表1）。そこでは本調査7世帯に加えて、補足調査を行った4人についても簡単に取り上げ、個人記号を付けた。前述のとおりこの地域では高齢世帯が多く、さらに居住年数もほとんどが生活年数と一緒であることが明らかとなった。すなわち、袖志地区に生まれ育ち、一時的には地域外で生活をしていても生家のある地域に戻ってきていたり、結婚後この地域に住み着いていたり、ということであった。

現在おこなっている採捕について文献や統計を参照するとともに、方法、道具、場所、制度などの概要に加えて、袖志地区の産業や年中行事など、その地域の民俗や暮らしについても聞き取りをおこなった。

農漁業をおもな生業としてきた集落であり、1960年には農業従事者4%に対し漁業従事者82%だった¹³⁾が、2010年には農業が12%、漁業は6%¹⁴⁾と、漁業の縮小が目立っている。農業では棚田にみられるように米作がなされており、その他は野菜、果物などが生産されている。

アジア・太平洋戦争以前はほとんどの世帯で牛を飼っており、メス牛を産ん

だら、半年の間の生活が十分できるだけの収入になったという。また、「テングサカツギ」という、素潜りでテングサ漁をおこなう海女がおり、1934年には70人の海女がいた¹⁵⁾。最盛期には、兵庫県沿岸から福井県沿岸にまでおよび、遠出する人は鳥取や隠岐まで採集圏がおよんだとする資料がある¹⁶⁾。袖志の漁業については、昭和37年ごろの聞き取り調査¹⁷⁾や近年の調査報告¹⁸⁾にも詳しくなされている。

表1. 調査対象者の概要

調査区分	世帯記号	世帯人数	個人記号	性別	年齢	備考
本調査	A	2	a	女性	60代	袖志生まれ。ずっと袖志。機織りに従事。
	B	2	b1	男性	60代	集落外(他県)出身。就職で京丹後に。転勤で20年くらいは袖志を離れ、数年前戻ってきた。かつてサービス業従事。
			b2	女性	60代	袖志生まれ。上記と同様。
	C	2	c1	男性	80代	袖志生まれ。ずっと袖志。半農半漁世帯。
			c2	女性	80代	袖志生まれ。ずっと袖志。半農半漁世帯。
	D	2	d	女性	60代	袖志生まれ。かつて機織りに従事。
	E	7	e	女性	70代	袖志生まれ。かつてサービス業従事。10年ほど大阪におり、帰ってきた。
	F	-	f	女性	70代	袖志生まれ。
	G	2	g	女性	60代	集落外(京丹后市弥栄町)出身。結婚を機に袖志に。機織りに従事。
補足調査	H		h	男性	60代	袖志生まれ。かつて機織りに従事。
	I		i	女性	-	-
	J		j	女性	-	-
	K		k	女性	-	-

袖志漁港は利用範囲が地元漁業を主とする第1種漁港である。規模は大きくないが地元での消費を中心とした漁業が営まれている。冬場は前述のとおり雪が降り、海も凧になることが少なく、戸外での作業はほとんどできなくなる。そのため、男性はおもに伏見や灘、西宮、名古屋などの造り酒屋へ杜氏などとして出稼ぎに行った。昭和50年代は多くの人が出稼ぎに行っており、丹後半島全体でも一般的だったが、造り酒屋へ出稼ぎは今ではほとんどみられない。

各家庭では年間を通じ、機織り業が盛んであった。丹後半島一帯は、丹後ちりめんを中心とする日本国内の約1/3の絹を生産するほどの日本最大の絹織物産地¹⁹⁾であったため、ちりめん産業の拡大とともに、地区内でも機を織る人が増えた。需要の低下と高齢化によりここ20年のうちにやめた人が多く、現在は3軒程度である。

袖志地区の北東端にある経ヶ岬灯台は1898（明治31）年に初めて点灯されて以来、日本海域屈指の灯台として知られ、一大観光名所であった²⁰⁾。丹後半島一周道路の開通を機に、1964（昭和39）年に経ヶ岬レストハウスというみやげ物屋兼食堂が開店し、大盛況だった。その当時は海水浴客が多く、民宿も多かったが、近年観光業は縮小し、レストハウスは撤退、民宿は数件を残すのみである。

（3）袖志の人の地域認識

袖志の北側には日本海、集落を挟んで南側には棚田や畑から続く山があり、飲料水や生活用水、田んぼにひく水を供給する小川が流れている。

袖志に伝わる唄に「嫁入りさすには 袖志か三津か 山や木もある 水もある」²¹⁾という唄がある。「三津」は網野町の集落であり、袖志と同じく山、川、海があるといった自然環境である。環境の豊かさを自慢する唄であり、様々な小さい生業を積み重ねて生活してきた袖志の人々にとって、豊かな生活を支える周辺環境には必要であったことが窺える。

「海があって、山があって、水があって、薪があるから、袖志は暮らしやすいところと昔の人は言っていたんです。もちろん、近隣から比べてですよ。飲み水に不自由しない、山に行けば薪もある、海のものも山のものも適当に食べる分だけはとれる、ノリやワカメは現金収入になるから」との声が聞かれた。このような調査対象者の声からも、現在も海や山といった環境の豊かさに対する認識があることが窺い知れる。また、「採ろうと思ったら何でも採れる」「ちょっと動くとな、ちょっとごそごそすると、（食物を）とって食べられる」「こまめに動けば食べられるところ」という話も聞かれ、採捕活動の継続を可能にする地域に行けているという認識を人々が持っていることも明らかになった。

このように、現在まで維持されている豊かな自然環境がおかずとり活動を可能とし、継続している要素のひとつであることが唄や言い伝えなどとして調査対象者の話から示唆された。

3-2-3 採捕活動概要

(1) 採捕・栽培される生物

袖志地区の各世帯がおこなっている農漁業と収穫物の利用形態を前に挙げた7世帯において調査した。

本研究においては、採捕物もしくはその活動をおかずとりの事例とし、栽培や養殖はそれに含めないこととしたが、ここでは自然活動を概観するために稲作・畑作についてもあわせて調査した。採捕日に規定がある場合については、後述する。年間をとおして、海・山での様々な採捕・栽培がみられた。特に海藻や貝類など、磯での採捕も盛んにおこなわれている。サザエは舟の上から採捕する場合は年中採捕をおこなうが、潜りによる採捕は夏季に限られる。魚類は、タコ、イカ、ブリ、カレイ、ハタハタなどが捕獲される。一方畑では、夏はトマト、キュウリ、ナス、カボチャ、スイカ、ゴマなどを、冬は白菜、大根、キャベツ、玉ねぎ、ジャガイモなどを主として代わるがわる栽培している。袖志では川の採捕活動はおこなわれていなかった。また磯漁の例が多く、調査でも聞き取りや会話時間の大半が磯の話であった。

(2) 採捕物の利用形態について

7世帯に、採捕および栽培したものの利用形態を、自家消費・おすそわけのみに利用している「完全自給利用」、収穫量が多かった場合のみに少量出荷する「自給利用+やや商業利用」、出荷と自家消費両方おこない、その割合が半々くらいの「商業利用+やや自給利用」の3段階で答えてもらい、その結果をまとめた(表2)。なお、「商業利用のみ」の利用形態はなかった。採捕物のほとんどを出荷している世帯でも、規格外の採捕物や、梱包作業において発生する切れ端などを自家消費しており、「商業利用のみ」という回答がなかった。

イワノリ・ワカメ・サザエは商業利用されているとの回答があるが、それらも含め、採捕した貝類や海藻類は自家消費やおすそわけとして利用されることが多い。魚を出荷している世帯はイカ釣りや定置網による漁業に期間的に従事している人がいる世帯であった。

出荷する場合には商店や宿などへの個人取引のほかに、直売所で売ったり、漁協に卸したりするなど様々な出荷方法があった。特にイワノリは売れば高値がつき、養殖ノリの約10倍の値が付く。店では1枚250~300円で売られている。ウニも高値で取引される。捕れる量が少ないため、現在は自家消費やおす

表 2. 世帯ごとの採捕物利用

	呼称	世帯記号						
		A	B	C	D	E	F	G
海	イワノリ	●	△	△	○	△	○	△
	ハバ	△	△	-	○	○	-	-
	ズンメ	○	-	-	○	○	-	-
	セイ	○	-	-	○	○	-	-
	アオノリ	○	-	○	-	○	-	-
	ワカメ	●	○	●	●	○	-	○
	アラメ	-	-	○	○	-	-	-
	テングサ	●	△	-	○	○	-	-
	ウゴ	-	-	○	-	-	-	-
	モズク	○	○	○	-	○	○	-
	ウニ	●	○	-	-	○	-	-
	サザエ	○	○	●	●	○	-	-
	アワビ	○	-	○	-	○	-	-
	ニシ	-	-	○	-	-	-	-
	魚（漁・釣り）	△	-	●	●	●	-	-
山	山椒	-	○	○	-	-	-	-
	フキ	○	○	○	○	○	-	○
栽培	稲作	△	-	△	○	○	○	○
	畑	○	○	○	○	○	○	○

【凡例】

○：完全自給利用

（自家消費・おすそわけ）

△：自給利用＋やや商業利用

（沢山とれたら、少量出荷もする）

●：商業利用＋やや自給利用

（出荷をする。自家消費もする）

—：採捕・栽培を行っていない

*筆者らの聞き取り調査をもとに作成

そわけとして利用する人がほとんどだが、販売する場合、価格に変動はあるが塩漬けのビン 1 本（約 60 g）で約 2000 円である。それぞれお歳暮やお中元の贈答品として利用される。

A、C、D 世帯は採捕物の商業利用が多い。C 世帯は伝統的な「磯見」をおこなう漁師であり、A 世帯は親がおこなっていた採藻業を定年後に引き継いでいる。「磯見」とは、磯船と呼ばれる 1～2 人乗りの小型船に乗り、艀側に座り左手で櫂を操作してジグザグに移動させながら、箱メガネを口にくわえて海中を覗き、右手に鉤のついた竹竿を持って岩場の獲物を捕る方法である²²⁾。D 世帯も漁業に従事していたが、現在は知人からの要望に応じた採捕と販売をおこなっている。一方、B 世帯と E 世帯は漁師を主要な生業にしてきたわけではないこともあり、商業利用は少なめである。F 世帯は袖志育ち、G 世帯は集落外からの移入者で、機業をおこなっていた。

山菜類は山椒、フキを山中で採るほか、私有地（山奥の田）で栽培したり、畑の縁に生えているものを採ったりする。

稲作、畑作はほぼすべての世帯でおこなわれているが、棚田で耕地が狭く、ほとんどの世帯で自家消費である。

袖志は昔からサルによる農作物の被害が多かった。それに加えて、ここ 10～15 年でイノシシによる農作物の被害が出てきたので、その対策に費用がかかり、「野菜は作るより買った方が安い」という話も聞かれた。この点は京都府北部全体で重大な問題となっている。

この調査結果からも、現在のおかずとりは山や畑地での採捕事例は少ないために、磯漁を中心に取りあげることが妥当であると判断した。

（３）漁場と岩場の名称

磯漁をする場所は、大きく 3 つの場所に分けられる。「経ヶ岬」と、集落の東端からさらに東に位置する経ヶ岬までの「手前の岩場」と、集落の「西側の岩場」である（図 4）。

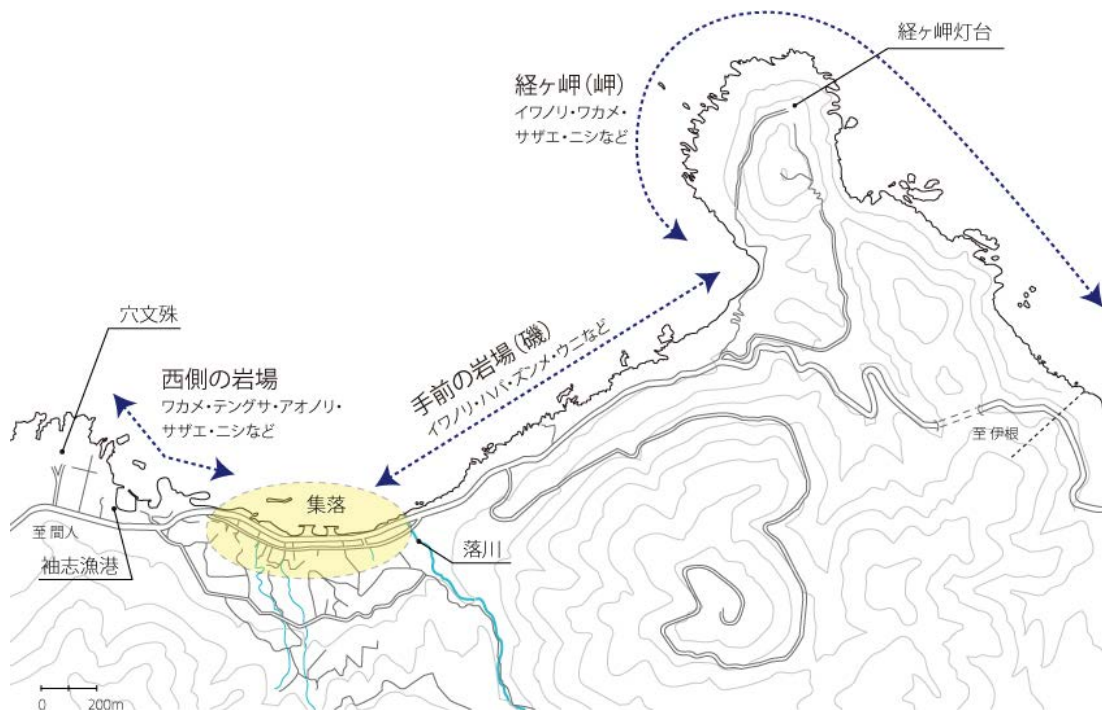


図 4 磯漁の漁場と採れるもの（国土地理院数値地図 200000 に筆者加筆）

ノリやワカメなど、同じ海産物でも、経ヶ岬と手前の岩場では味が違うといわれている。手前の岩場はおもに女性が採捕をおこなう場所だが、昔から本職の漁師は経ヶ岬まで採りに行く。手前の岩場から西の岩場にかけては、海が比較的浅めだが、経ヶ岬は海が深い。波の当たりがきついことが磯の生物にとっては好条件になっている。「魚も身が締まっていると言われる」「ワカメは村の岩場でも生えるが、経ヶ岬の岩場まで行き、深い海の所を採ると、ワカメが黒々としてきれい」「ワカメは経ヶ岬の方は（集落付近の磯よりも時期的に）遅くなってきても生えていた」「岬の方行って採るのが本当のテングサ。（磯で採るものと）テングサ自体が違う」などといわれ、袖志の人々が場による生育条件の細かな違いを認識していることが明らかとなった。

集落の東側の岩場には詳細に名称がつけられている。集落の東端からカワシリ、ハシラ、スキノサキなどと、経ヶ岬を囲むように 30 近くに上る。岩場の名称は地区のほとんどの人に認知されており、採捕の成果を報告する際に使用される。袖志で生まれた人は、教えてもらうでもなく、周囲と会話したり、岩場に行ったりすることで自然に名称を覚えていくと、ほとんどの人が述べている。詳細に名前を書き込んだ、手製の地図を持っている人もいた。

詳細に名称がつけられていることは、岩場が袖志の人々にとって大切な生産の場であることを示唆している。

（４）採捕に関する規定

採捕に関連した法律、規定や決まり事はおかずとり活動を制約する一方で、資源の保持や安全性の確保のために不可欠である。ここでは採捕に関する法的な規定や地域内、採捕者間での決まり事についてまとめる。

１）採捕活動に必要とされる資格

磯で採捕される海藻や貝などは、第一種共同漁業権の対象になっている。これらの採捕には漁業協同組合の組合員の資格が必要であり、資格を持っていないければ採捕はできない。袖志では、採捕に行かない高齢者世帯以外はほとんどの世帯が漁業協同組合に加入している。

２）日時規定

特定の生物には、採捕日や採捕期間が制限されている。袖志では、解禁日のことを「ヤマノクチ（山の口）¹」と呼ぶ。解禁日だけ採捕してもいい生物と、解禁日以降は自由に採捕できるものがある。テングサとワカメは解禁日以降な

¹ ヤマノクチは「山の口開け」が省略されたものだと考えられる。口開けは「山・磯などの共有地の利用の禁を解くこと。また、その日」（*）である。袖志では磯のことも「山」と呼ぶようだ。*デジタル大辞泉「口開け」の項目を参照

（<http://kotobank.jp/word/%E5%8F%A3%E9%96%8B%E3%81%91>）〈閲覧日：2014/1/10〉

ら自由に採捕できる。ワカメは4月までは午前中しかワカメを刈ってはならないが、5月以降は午後でも刈ってもよい。ウニは年2日の解禁日のみ共同で採捕をおこなう。このように解禁日の扱いは対象物によって異なる。

イワノリの採捕期である11月半ば～3月までは「海止め」が実施される。これは落川より経ヶ岬側の岩場に行くことと、そこでのいかなる生物の採捕も禁止するものである。

海止め期間のイワノリやハバなどの採捕は解禁日のみ共同でおこなうことになっている。イワノリの解禁日は目安として波の高さ²が0.5m以下の波が穏やかな日を選んでおこなわれている。イワノリの生育期間を確保するため解禁日は15日以上期間を空けることから、海止め期間中に可能なイワノリ摘みの日は単純に計算すれば4、5日程度しか取れないと算出される。そのうちで、波の低い日を選ぶのであるが、冬の経ヶ岬沿岸は概して波が高く、2004年から2005年を例にとると、0.5m以下の波の日はひと月に数日程度であり、この二つの条件を合わせると日数はさらに少なくなる。波の高さによる解禁の判断は、村の役員と組の組長が相談して決めていた²³⁾が、現在は漁業協同組合の組合長が決めている。子どもや高齢者でも行けるくらいの穏やかな波のときで、なおかつ前回のノリ摘みから15日以上空いた日を解禁日としている。

海止めや解禁日の規定は地先ルールと呼ばれ、地域によって内容が異なる。地先ルールとは別に、京都府が海洋資源保護のために、禁漁期間や体長制限、使用を禁止する道具などについても定めている²⁴⁾。

3-2-4 各生物の採捕

(1) 採捕の概要

聞き取り調査に基づき、各生物の採捕の概要を以下に記す。磯で採捕できる生物はそれぞれ時期が限られるため、各採捕物は一時期にまとめて採捕し、乾燥や塩漬けなどにして保存しておく例がほとんどである。おすそわけや自家消費する場合や出荷する場合も、自宅で加工が必要である。

1) イワノリ (図5)

採捕方法は、1) 道具で岩場を搔く方法と、2) 「ツミノリ」という手でつまむ方法がある。

1) の方法では、ゼンマイカイガラという道具を熊手のように使って採取す

² ここで言う波の高さとは、「有義波」を指す。有義波とは、ある地点で連続する波を観測したとき、波高の高いほうから順に全体の1/3の個数の波を選び、これらの波高および周期を平均したものを有義波と言う。大きな波や小さな波が混在する実際の海面では、目視で観測される波高は有義波高に近いので、一般に波高と言った場合は有義波高を指す。

る方法である。ゼンマイカイガラとは桐製のシャベル状の道具で、シャベルの周囲に時計のゼンマイの鋼を釘で打ちつけた道具の呼称である。2) は、おもに護岸のコンクリート堤防壁に生育しているノリを摘むときの方法である。

イワノリ摘みは 11 時までには終了し岩場を出る決まりだが、それより早く帰る人もいる。水分を含んだイワノリは重く、持ち帰るのが「しんどい(つらい)」という声が多い。

採捕量は、イワノリを 1 枚の板ノリ（全形）に加工したものに換算して、多いときで 1 回 200 枚程度、年間で 500 枚程度摘む者もいる。しかし、聞き取りからは 30 年以上前は 1 人で年間 1000 枚くらいは採っていたという。減少の理由として、ノリの生息量自体が減っている、という声が多く聞かれた。



図5 イワノリを流す



枠に入れる



干す



ゼンマイカイガラ

2) ハバ・ズンメ・セイ・アオノリ

藻類のハバ、貝類のズンメ、セイの採捕時期および場所は、イワノリとほぼ同じである。採捕時期は前述のとおり海止めが実施されており、イワノリの解禁日に採捕する。しかし、イワノリは高値で取引され、重要視されているため、ハバ、ズンメ、セイの採捕はイワノリを採り終わった後に時間があればおこなう、という順位づけになっている。

3) ウニ (図 6)

ウニは 7 月中旬、梅雨が明けた頃の解禁日 2 日間の午前中に採捕をおこなう。2013 年のウニ捕りは 7 月 16、17 両日におこなわれた。おもに集落を挟んだ西と東の岩場に生息する。袖志で捕れるウニはおもにバフンウニという小さい種類で、塩漬けに加工され、瓶詰めにして売られる。鮎に使用されるムラサキウニやアカウニは袖志では少ない。

採捕方法は、海に潜り、岩をひっくり返しながら、岩の裏に付いているウニを、手袋をはめた手でつかむ。

採捕量は昔に比べて少なくなっており、資源減少のため、採捕可能日が従前の 1 週間程度から 2 日間程度へ減った。解禁日 2 日目はそれほど捕れないという。「昔は小さい岩にも付いていたが、今はあまりいない」「この頃は捕れる量が少なくなってきたので、みんな自家用だ」などの意見が聞かれ、採捕量の減少が指摘されている。

4) ワカメ・テングサ (図 7、8)

ワカメやテングサ、サザエなどは、伝統的に「磯見」で採捕がおこなわれてきた。ワカメの場合は「ワカメ刈り鎌」を、テングサの場合は「テングサツキ」をそれぞれ竹竿に取り付けて採捕をおこなう。舟を細かく操りながら、長いもので 2 m の竹竿で採捕する。かつては磯見をしている人が多かったが、現在は地区内で 2 名ほどしかいない。磯見以外の採捕方法は、岩場でワカメ刈り鎌を使用して刈る方法がある。テングサは、ウェットスーツ着用のもと、潜って採捕する人がほとんどだという。ただしテングサは、比較的浅い所に繁殖するため、潜らなくてもいいような場所でも採捕ができる。

5) ウゴ・モズク

ウゴとモズクも、伝統的には磯見で採られている。ほかの海藻のように岩に付着するのではなく、「藻場」と呼ばれる、ホンダワラ類（海藻の一種）に付着して生育する。ウゴは藻場ごと刈り取り、あとでウゴと藻場とを仕分けする。モズクはブラシ状のもの（板に釘を裏から打ち付けたものや市販のヘアブラシ）で落ち葉かきのように藻場からモズクを掻きとる。モズクは舟上から採捕する以外にも、同じ道具で岩場からモズクを掻きとる方法もみられる。モズクは季

節によってできる、できないの差が激しいようで、「去年は沢山採れたけど、今年はひとつもなかった。ちょっと時期を外すと採れない」とのことである。

6) サザエ・アワビ・ニシ（図9）

サザエは経ヶ岬や、集落の正面の海、西側のタタミイワなど様々な場所で捕れる。多く採れるのは経ヶ岬である。サザエは前述のウゴやモズクを採る道具に類似した「三本ヤス」という道具を使用して、伝統的な磯見で採捕される。テングサと同様に、潜らない程度の浅いところでも容易に捕ることができ、子ども（小学生）がその父親と一緒に採捕をおこなうこともできる。

アワビはあまり生息していないようで、サザエを捕りに行ったついでに、見つけたら捕ることもある。ニシという貝はあまり採捕されていないが、舟の上から、タモを使用して採捕する。



図6 ウニ



図8-1 テングサ



図7-1 ワカメ



図8-2 テングサの乾燥



図7-2 板ワカメ作り



図9 サザエ

（２）採捕に関するまとめと考察

袖志におけるおかずとりとしての磯漁には、伝統的な漁法である「磯見」と、それよりも簡易な方法の２種類が存在することである。

簡易な方法とは、磯見のように舟や箱メガネなどを必ずしも使用することなく、岩場から届くところだけで採り、特別な機材なしに潜って採り、海の浅い場所で潜らずに採ることが可能な、道具や技術が磯見に比べて簡便な漁法である。どちらにしても、技能を持った人はそうでない人よりも漁果を上げやすく、実際に人によって漁の効率は大きく違うといわれるが、簡易な方法でも採捕することができるので、磯での採捕活動のすそ野が広がっているのである。

イワノリは「搔く」「つまむ」といった単純な方法のため、誰でもおこないやすい。しかし、誰でもできるからこそ、早くいい場所へたどり着いた人が採ってしまう。そのため、先に述べたとおり、海止めと解禁という地先ルールが厳格に定められ、守られている。磯におけるおかずとりは、このように経験や技量、目標とする採捕物の獲得量に合わせ、様々な道具や採捕方法がある。そのことが、おかずとりをおこないやすくし、採捕を継続している要因の一つであると考えられる。

3-3 採捕の動機と伝承

3-3-1 採捕の動機

採捕活動が続ける動機やきっかけについて聞き取りをおこなったところ、袖志の人々にとっては採捕活動はいたって普通の活動であるといい、特に明確な動機付けをもっておこなっていると答えた人は見受けられなかった。調査対象者の年代（60代～80代）は、漁業を営む人もいるが、集落外に働きに出たり、機織り業に従事したりしていた世代でもある。それにもかかわらず、現在採捕活動をしているのは、かつては出稼ぎや機業などを行っていた人々がすでに第一線を退いているという社会的な状況や環境が影響しているとみられる（表3）。

半農半漁の様式で生活を営んでいた中で育った調査対象者に子どものころの体験を聞いたところ、子どもの頃から、「風いだら海に行く、荒れたら田んぼや畑に行く」という暮らし方を見てきている、と述べた。ほかの対象者には、本業や主たる生業としては海に関する仕事をしていないが、普段の仕事が休みの日にイワノリやウニの解禁日にあたると採捕に参加したり、「たまにワカメを切るのを手伝いに行ったり干すのを手伝ったりするから自然に覚えてきますね」というように、空いた時間に親が採捕したワカメの加工を手伝うなどしていた人もいた。

表 3. 採捕を誰に学んだか/子どもの頃の体験

テーマ	聞き取り内容
子どもの頃の体験	<ul style="list-style-type: none"> • 《筆者：子どもの頃ノリ摘みをしていたか⇒》でも、行っとなねえ。分校がそこにあって、昔はノリが収入源だったから。この村端の下までは子どもとかよく行ってました。(a) • 主人(70 代前半)が小学校の頃はノリ摘みがあるいうたら、学校を早引きして行ったと。お昼から尻になって、お昼からノリ摘みに行く時もあるんです。「おい、袖志の子はノリ摘みあるで帰れ-」いうて、子どもも行ったんです。(60 代後半のご本人の時代は)そういうことはなかった。袖志から小学校に連絡が入る。全員帰るわけではないが、帰ろうと思う子は帰ってノリ摘みをした。(d) • 4 年生くらいまではノリ摘みに行ってた。朝学校に行く前に 30 分とか 1 時間とかカワシリという一番近い所ではと行ってきて、2 枚でも 3 枚でも採ってきて、それから学校に行った。(d) • 少しだけノリは採ったことがある。しかし、他の作物(海産物)はあまり採ったことはない(e)。 • (地元の人の)話を聞くと、私世代の人は皆、子どもの頃、海産物を捕る、加工するのを手伝ったという話を聞く。子どもでもノリ摘みに行ったとか。(g) • 小学校行っても「今日はノリ摘みだ」と言ったら、皆帰っていた。小学校の先生も黙認していたとか。生活が苦しい時代だったので、それだけ現金収入が多かった(から、ノリ摘みは大切であった)。昭和 30 年代はまだ子どもが行っていたかもしれないが、昭和 40 年代はもう子どもは行っていない。今は、親も行かせませんし、そういうのは一切ない。(g) • ノリ摘みは子どもの頃していた。中学生の頃、ノリ摘みにいくためにグループで無断で欠席して問題になった。(h)
採捕方法を誰に学んだか	<ul style="list-style-type: none"> • うちのワカメ刈りは定年後 2~3 年でやりはじめた。おじいさん(ご主人の親)が前、していて、私らも干すのくらいは手伝っていた。親がしとるのを見てきとるから、子も同じように(する)。そういういろんな道具もあるから。《筆者：親の代がしていたから引き続きやっているのか⇒》そうだねえ、自然にそういうのが身についていたから。道具もちゃんとあるし。自然に何も思わずにしている感じ。(a) • もう見よう見まね。見てるうちにずんずんそれは。難しいものじゃないし。仕方さえわかればねえ。たまにワカメを切るのを手伝いに行ったり干すのを手伝ったりするから自然に覚えてきますね。(a) • 見て覚えるというか、こういう感覚だなあいうて大きくなってきとるから、親がおらんでも大体こうなると。道具さえあれば。(b1) • 小さいときから教えてもらったわけじゃないけど、見てるから。(b1) • (イワノリについて)見よう見まね。他の人を見てただけだけど。(e) • ノリは見よう見まね。自然と。モズクはお嫁に来てから始めた。その技術は取りに行く人に教えてもらった。(g) • (イワノリについて)親や舅さんが採るのを見ている。(j)

また、調査対象者は子どもの頃にノリ摘みに行かされたり、ウニの加工を手伝わされたりした世代である。1974（昭和 49）年までは、集落の西に下宇川小学校袖志分校があり、「お昼から風になって、お昼からノリ摘みに行く時もあるんです。『おい、袖志の子はノリ摘みあるで帰れー』いうて、子どもも行ったんです」という。また、「小学校行っても『今日はノリ摘みだ』と言ったら、皆帰っていた。先生も黙認していた。生活が苦しい時代だったので、それだけ現金収入も多かったから、ノリ摘みは大切だった」と述べている。この場合は単におかずとして自家消費にするのではなく、副業としての意味合いが強くなっている。また、「4 年生くらいまでは朝学校に行く前に 30 分とか 1 時間とか一番近いところでノリ摘みに行って、2 枚でも 3 枚でも取ってから学校に行った」ことが思い出として語られている。ただし、子どもは昭和 40 年代はもうノリ摘みをしなくなっていた。

採捕の技術については、「親がしとるのを見てきとるから、子も同じように（する）。そういういろんな道具もあるから」と述べている。また、教えてもらうというよりは、見よう見まねで習得している人が多いことが「もう見よう見まね。見てるうちにずんずんそれは。難しいものじゃないし。仕方さえわかればねえ」という返答からわかる。また、「たまにワカメを切るのを手伝いに行ったり、干すのを手伝ったりするから自然に覚えてきますね」「ノリは見よう見まね。自然と。モズクはお嫁に来てから始めた。その技術は採りに行く人に教えてもらった」「ノリは親や舅さんが採るのを見ている」という答えが多く、子どもの頃の経験が現在まで継続している。さらに「親が上手だと子どもも上手だった。『あの人親がノリツミ（ノリを摘むのが上手）だったから、よう摘むねえ』とか言った。しかし、それは私らの世代（60 代後半）までかもしれない」と述べている。

現在も、仕事の休暇や合間には、サザエ捕りなどに子どもを連れて行く人がいる。親が漁業協同組合員だとその家族も採捕資格があり、また採捕道具が一式そろっているということなどが、活動をおこないやすい理由として挙げられる。

「海に行く気持ちがあるかどうかが問題だ」とし、「天気がいい、海が風、まあ今日はごろごろしとろうかという人は何もせん。でも、ちょっと『風だなぁ、タコバカシ³に行くか』とか『サザエを拾いに行くか』とかする」といい、海に行き食材を得ることが、普段の生活と密接につながっていることを示唆している。「海の近くに生まれた人は小さな頃からそう（いう習慣に）なっとるで

³ タコバカシとは、タコは赤や黄色のものに寄りつく性質があるため、棒に赤や黄色の布を付けて磯の中で動かすことでタコをおびき寄せる漁法。

（採捕に行く）。よそから来たもんは海って言っても発想がないんだけど。サラリーマンになるとそういう発想がないから（なくなるから）、海から離れていくみたい」と述べ、海やそこでとれる採捕物に対して、生活様式の違いが海での採捕という行為に対する認識に影響していることも表わされている。この言葉が示すとおり、周辺に自然環境があったとしても、そこで身近に採捕がおこなわれていないと自然に対する「思い」は生まれまいだろう。袖志の活動は現在も進行しており、かつて子どもの頃に経験したことを伝承する役割を持っているものと捉えられる。

今は経済規模も大きくないため、採捕に「無理やり行く人はいない」という。よって、採捕活動はそれが好きな人がおこなう趣味性の強い活動に変化している、とみることができる。すなわち、調査対象者が子どものころはノリ摘みが現金収入をもたらす副業的な意味合いもあったが、現在では袖志地区でも、「ノリ摘みに行く人も昔の 1/3 くらいになった」という声もある。しかし、それでも続けている人は、上記で述べたとおり、子どものころから手伝いなどで体験していた、家に道具がそろっている、また海の近くにいておかずとりの方法を親から教えられて知っている、ということが継続の要因となっていると考えられる。

3-3-2 「おかずとり」の楽しみと伝承

調査対象者から採捕活動を聞く中で、おかずとりにある喜びや楽しさを抽出し、以下にまとめた（表 4）。

（１）採捕活動の意義

採捕活動自体に関するものは、１）人との交流、２）没頭、３）生活の張合い、４）自然との対話、という要素がみられた。

１）人との交流

集団で採捕が行われる場合は、普段は会わない人に会う機会になる。「ストレス解消」や「皆いろんな人と会話ができる」といい、イワノリ摘みは話をしながらできるからいい、と述べている。採捕しながら人と会話し、岩場での採捕の成果について「あそこが良かった、ここが良かった」と採捕者同士で情報交換をおこなうなど、採捕活動自体がコミュニケーションの場となっている。

２）没頭

イワノリを「採っている最中は夢中。採るのはおもしろい。一生懸命になれる」という声が聞かれた。イワノリの採捕はゼンマイカイガラでひたすらノリを掻

きとるだけの単純作業であるが、目の前の作業に一所懸命になれることに採捕者は魅力を感じている。

表 4．採捕活動の意義

分類	聞き取り内容
(1) 人との 交流	<ul style="list-style-type: none"> • みんな面白い。ストレス解消よ。海に行けば西の方の人とも喋れるでしょ？ たいていここにおったら話さん人ともそこに行けば、みないろんな人と会話ができる。(b2) • イワノリだって皆行く。人との話し合いができる。人のいろんな話も聞いたりできる。友達が皆行くから海は楽しい。話もってできるから（話をする事ができる、しながらできるから）。(c2) • ここは場所がいっぱいあるから。岬の向こうから岬の裏まで。行った所によって（ノリの量が）違うから。あそこが良かった、ここが良かったという話し合いも面白いし。(c2) • 畑は高齢者の生きがいになっている。90 歳を過ぎてもまだ畑に行っている人もいる。(中略) 毎日何もなくても畑に行っている人もいる。外に出れば誰か人に会うし、話ができる。(d)
(2) 没頭	<ul style="list-style-type: none"> • 採っている時は夢中。採るのはおもしろい。一生懸命になれる。(i, j)
(3) 生活の 張合い	<ul style="list-style-type: none"> • だから元気でおれる。楽しみがあるから。海がない上宇川の方行ったら年金だけで。田んぼなんて秋が済んだらなにもやることがない。「袖志はええなあ」とうらやましがられる。(c2) • ノリ摘みは、冬、特にやることがなかった集落のストレス発散になった。(h)
(4) 自然と の対話	<ul style="list-style-type: none"> • こっち来てわかったのは、海は毎日表情が違う。同じということはない。1 日 1 日違うし、季節によっても違う。365 日同じということはない。僕は家の 2 階からいつも見てるんだけど、全然違う。沖に舟に乗って連れて行ってもらって、村をみるのもまた違うな。(b1) • 楽しみは海だけだ。凧になるのが楽しみ。(c1) • あそこに行ったらサザエがおるか、今日はウラにいかなおらんか……場所を決めていかなあかん。天気予報はその下準備で。風が何 m 吹いて波がどれだけになるか……あれもまあ、ええかげんなこっちゃけど。(c1)

表 5. 採捕物の価値

分類	聞き取り内容
1) 食物としての価値	<ul style="list-style-type: none"> • 家庭で食べるのに重要です？ 食べないものは採りに行かない。(a) • 青ノリだってお好み焼きや焼きそばにふりかけたり、子どもにも粉にしてあげたり。店で買うのはべったんこでちょっと香りもないのに高いし。香りがいいですよ、自分でしたのは。(a) • 野菜もきゅうりでもトマトでも買ったのは薄いというか水っぽいけど、トマトなんか赤くなったら採ってくるでしょ？ だから味が全然違う。まあ、いらないものは採りに行かないねえ。(a) • いらんもんは行かんで。買った方がいいんだわ。(b2) • ここのが美味しい。経ヶ岬は外海なので水がきれい。(c2) • 自分で採って自分で食べると安心は安心。ウニも塩しか使ってないし。(b1)
2) 人に喜んでもらう嬉しさ	<ul style="list-style-type: none"> • たくさん捕れた時はうれしい。魚も野菜もそこらじゅうに配り歩いている。一由さんの元職場の人達におすそわけしている。自分たちも近所の人にたくさんもらっている。喜んでもらうことが自分たちの楽しみ。(b2) • 作って人の笑顔を見るのが楽しみだ。(b1) • フキは生のまま知り合いに、ウニなんかも飛んでいく。(b2) • サザエも……みんなにあげても喜ぶし。(a) • 人にはよくあげますよ。近くに姉がおったり、親戚の人には採らない人もあるから。まあ、袖志はサザエとかとるけど、よそはそんなに採らないでねえ。この岬というのがいろんなものが採れるんです。この経ヶ岬灯台の下の岩場が。だから久僧とかそういうところは採る人は少しは採るけど、ようけ採れるわけではないみたい。だから採らない人もいる。(a) • あの人に送ろうかと思ったら、買ってまではなかなかやれん。自分でしたらえらいけど、変なもんも混ざってないし、味は分からんけどあれだぞと言ったらやれるやんか。ノリでもハバでも。自分で採ったというのは喜ばれるし、美味しかった言われたらまた採ろうか……となる。(b1) • 食べたり、親戚にやったり送ったり。子どもや親せきに。山の方にお父さんの同級生とか親戚とかにあげたら今度は山の物をもらうから物々交換みたいなことになる。たくさん柿をもらった。(c2) • 孫らが喜んで食べる。夏になったらバーベキューですわ。大学出て、会社に行くようになってからでも、皆来ますわね。そんでみんなで食べて飲んで、バーベキューでしょ。それが楽しい。そしたらみんな喋るでしょ。いろんな話聞けるし、私も楽しいし。(c2) • あげてもみんなに喜ばれるしね。サザエごはんにしたり壺焼きにしたり。(c2) • 「海が好きだからモズクなどを取りに行く。」(理由) ⇒物を採る楽しみがある。そして、採ったものを食べてもらう、喜んでもらう楽しみがある。(f) • ノブキを取ってきてつくだ煮にして配って歩くのが私の趣味。結構それが評判がよくて、せっせっせとノブキをとっては配る。「美味しい」と言ってもらえたら、また持って行ったりする。(d)

3) 生活の張合い

稲作を主要な生業にしている地域では、稲刈り後は戸外での生産活動は縮小する。袖志においてはイワノリ摘みという労働が存在する。「だから元気でおれる。楽しみがあるから」といい、「イワノリ摘みは、冬、特に『やること』がなかった集落のストレス発散になった」ことが示され、冬場の生活の張合いになっていたとみられる。

4) 自然との対話

海での活動は採捕であっても加工であっても、海の様子や天候に左右される。ある採捕者は「海は毎日表情が違う。同じということはない。1日1日違うし、季節によっても違う。365日同じということはない」という。「楽しみは海だけだ。風になるのが楽しみ」ともいい、季節ごとの自然の変化を感じること、採捕の前段階に気象予報を見ながら獲物がある所を予測したりするのも楽しみだといいい、自然の変化に敏感である。

(2) 採捕物の価値

採捕物に関するものは、1) 食物としての価値、2) 人に喜んでもらう嬉しさ、という要素がみられた(表5)。

1) 食物としての価値

「青ノリだってお好み焼や焼きそばにふりかけたり、子どもにも粉にしてあげたり。店で買うのはぺったんこでちょっと香りもないのに高いし」というように、買ったものよりも、近辺で採ったものの方がおいしいという声が聞かれた。また、「自分で採って自分で食べると安心は安心。ウニも塩しか使っていないし」というように、採捕物の加工は自分でおこなうため、食品添加物や人工調味料を使用していないこと、入っているものをすべて把握できることなどから、食物として安心だという。「ここのが美味しい。経ヶ岬は外海なので水がきれい」ともいい、地域の自然を把握していることから食物の価値が生じてくるといえる。

2) 人に喜ばれる嬉しさ

多くの人が採捕物をおすそわけしていた。「たくさん捕れた時はうれしい。魚も野菜もそこらじゅうに配り歩いている」「ノリでも自分で採ったというのは喜ばれるし、美味しかった(と)言われたらまた採ろうかとなる」という。自家消費の何倍もの量を人にあげているという世帯も珍しくない。「作って人の笑顔を見るのが楽しみだ」「サザエもみんなにあげても喜ぶし」「ウニなんかも飛んでいく」といい、採捕や加工が面倒でも、採捕物を人に喜んでもらえることがおかずとりの動機であり楽しみとなっていた。「山の方にあげたら、今度は山

のものをもらうから物々交換みたいなことになる」と磯の採捕物と山の物との交換をしている例もみられた。また「孫がきたら喜んで食べる。いろんな話聞けるし、私も楽しいし」と、離れている家族との団らんの時を楽しむ様子が窺える。採捕物を家族で食べたりおすそわけをしたりすることが新たなコミュニケーションを生み出している。それを受け取った人からの「おいしかった」という反応によって、採捕者は自然環境の恵みを自分自身の喜びとして受け止め、生きがいを感じるようになる。

3-4 考察

以上みてきたように、「おかずとり」は袖志地区において、採捕活動が岩場という「場」と四季の変化のある自然環境において成立した活動であることを述べてきた。また、そこには採捕活動自体と採捕物に関する楽しみの要素があることを明らかにし、「親がしとるのを見てきたから」、「小さい時から見てるから」といった前の世代から無意識的に伝承がなされていることが示された。さらに「小学校の頃はノリ摘みがあるというたら、学校を早引けして」行ったというように、地域全員が行っていたことも明らかとなった。

比較的規模の大きな農業や漁業とは違い、「おかずとり」はほとんど機械化されておらず、本来は簡便な方法でなされる活動である。しかし磯漁の特性からある程度の危険と制約が伴うことが示された。そのため採捕活動を敬遠する人や、高齢化によって活動が不可能になる事例もみられた。

その一方で、「行った所によって違うから」といった住民の間で採捕場所の確保や採捕物の収穫量などに競争心がみられた。また、青ノリを粉にしてふりかけることや自分で作ったものは安心で香りがいい、という言葉からもわかるように、加工方法、調理方法の情報交換や、加工品や調理品の交換もおこなわれた。これらは「おかずとり」が誘発するコミュニケーションである。「いろいろな人と会話ができる」、「ストレス解消」、「おすそわけをして喜んでもらうことが楽しみ」、「人の笑顔を見るのが楽しみ」という言葉からも、それが満足感を与え、動機となり、楽しさにもつながっていたのである。自家用として消費するためだけではなく、採捕物が人に喜ばれることも重要な楽しみの要素のひとつであり、総じて楽しみがあることがおかずとりを継続させている動機である。

袖志でおかずとりが継続されてきたことの背景に、採捕者の自然認識と豊かな自然環境があげられ、その上で、採捕者に手伝いなどの経験があることや、採捕に必要な道具が家に揃っていることが採捕活動をおこないやすくしている条件であることが見いだされた。

これらの聞き取り内容を世帯ごとにまとめてその特徴を表にした（表 6）。聞

き取りをおこなった8項目についてみると、最も多く語られていたことは「食物としての価値」と「人に喜んでもらうことの楽しさ」であった。世帯ごとの特徴がはっきりと区別できるわけではないが、A、B、Cの世帯には共通する要素がみられるといえるのではないだろうか。いずれも夫婦二人であるが、食物の価値だけでなく、対話や喜びといった要因が強く働いているといえる。

表6. 聞き取り内容評価

世帯	聞 き 取 り 内 容							
	体験	誰に	交流	没頭	張合い	対話	食物	喜び
A	○	◎					◎	◎
B		◎	○			○	◎	◎
C			◎		○	◎	○	◎
D	○		○					◎
E	○	○						
F								◎
G	○	○						
H	○							
I				○	○			
J		○		○				

○ 1回 ◎ 2回以上

袖志における「おかずとり」という言葉には特別の意味がある。「おかずとり」は周辺の自然環境への信頼と誇り、採捕者同士や非採捕者との交換やコミュニケーションを生み出し、生活を豊かにしていることが明らかとなった。そこにはコミュニケーションをとおした生きる喜びが存在することになり、高齢世帯の人々にとっては大きな意味を持っているといえよう。「おかずとり」が現在まで継続されてきた要素がこの点に見出され、現代生活におけるおかずとり活動の意味が浮き彫りにすることができたといえる。

すなわち、袖志地区におけるおかずとり活動は、漁業組合員であるという採捕に関する資格が存在し、資源保護や危険回避のための日時指定や海の自然条件についての規定があることから単なる趣味的な採捕活動ではない。また、地域の住民が総出でおこなう活動であり、地域の社会的規範を守ること、共同体の意識が育まれている公的な活動である。そこでは、社会的規範を守りながら自然の恵みを共用するかかわり方について「おかずとり」から読み取ることができる。したがって「おかずとり」は個人的な活動ではなく、規範のある地域社会の中で存在する行為であることが、地域社会の一員としての自覚を生み出しているといえる。さらに、そこで生活をする人々にとっては生活文化の一端をにない、地域のコミュニケーションを保ちながら食生活の豊かさを示す事例であることが明らかとなった。

「おかずとり」は地域差が大きい営みである。今回は袖志地区の磯漁を中心とした調査をおこなったが、採捕活動と活動場所としての自然環境のかかわりについては、さらなる事例の蓄積が必要だと考えられる。海辺に限らず、山間部や田沼などでの営みの調査が求められる。

さらに「おかずとり」という言葉は限られた地域での言い習わしである可能性が強い。「おかずとり」に似ている行為が他の地域でおこなわれ、そこに特徴的な言葉が充てられているかどうかについては、未だ明らかとなっていない。また、「おかずとり」の歴史的な変遷や変化の要因を明らかにすることも必要である。袖志の事例では、かつては主たる生業であったものが今は「おかずとり」に転化しているものと、商品価値がそれほどないために商業利用が中心とはならず、「おかずとり」として続けられてきたものがみられたが、このような変化は他の地域にも多様にみられると推察される。それぞれの活動の違いや生活における意義を見極めたうえで、その生活の中での位置づけの変遷を明らかにすることで、生業と合わせて、豊かな生活様式の全容が見えてくると考えられる。

「おかずとり」は、身体をとおして自然に触れる機会であり、また、地域特有の生活文化に触れる機会である。自然と人間との関係の希薄化、地域の生活文化に対する意識の変化がみられる現在、「おかずとり」という行為を通して地域に共に生活することが大きな意義を持つてくる。現代の都市域では、ほとんど自然に触れる機会がないままに日常生活を成り立たせることが可能であるが、採捕を行っている人々の自然認識や理解は現代において人間生活を豊かにするために応用しうる、価値ある文化といえるのではないだろうか。

引用文献

- 1) 宮本常一 (1999) : “日本人の主食” . 日本の食事文化 . 講座食の文化第 2 巻 . 農文協 . 69
- 2) 江原絢子 (2012) : 家庭料理の近代 . 吉川弘文館 . 187
- 3) 鈴木龍也, 松本一実 (2011) : 共同的・自主的漁業管理の課題と可能性 舞鶴市野原地区の事例調査から . 龍谷法学 . 44-1, 142-181
- 4) 秋道智彌 (1995) : なわばりの文化史—海・山・川の資源と民俗社会 . 小学館 . 1995 . 216-7
- 5) 今里悟之 (2004) : 定置網漁村における複合生業形態の計量分析—昭和初期の丹後半島新井集落を事例として . 日本民俗学 . 2004, 240 . 1-28
- 6) 田辺悟 (2014) : 磯 . もの与人間の文化史 164 . 法政大学出版局 . 3, 406-416
- 7) 森本孝 (1980) : 特集・丹後の海 . あるくみるきく . 158 . 16 .
- 8) 井之本泰 (2005) : 丹後袖志冬物語 . 季刊東北学 . 5, 148-163 .
- 9) 北村敏 (2005) : 日本海沿岸イワノリ調査報告 . 大田区立郷土博物館紀要 . 15, 62-92
- 10) 京丹後市の統計 . 住民記録 , 人口世帯集計表 , 平成 25 年 3 月 31 日付 . 2013
- 11) 総務省 . 平成 22 年国勢調査 . 2010
- 12) 丹後町編 (1976) : 丹後町史 . 16, 556
- 13) 京都府教育委員会 (1962) : 京都府緊急民俗調査報告書 . 昭和 37 年度民俗資料緊急調査 . 52
- 14) 総務省 (2010) : 平成 22 年国勢調査 .
- 15) 今里悟之 (2004) : 前掲 5) 16
- 16) 前掲 13)
- 17) 武田聴州 (1973) : 日本の民俗京都 . 第一法規出版 , 69-72
昭和 37 年ごろの袖志についての聞き取り調査では、113 戸のうち漁業従事は 93 戸であったことや、当時の磯漁の様子が詳述されている。
- 18) 京丹後市史編さん委員会 (2014) : 京丹後市の民俗 . 京丹後市市役所 . 194-201
- 19) 松岡憲司編 (2010) : 地域産業とネットワーク 京都府北部を中心として . 新評論 , 262
- 20) 前掲 17)
- 21) 丹後町社会科主任会 (1983) : 丹後の民話第 2 集 . 丹後町教育委員会 . 9
- 22) 福田他 (1999) : 日本民俗大辞典 (上巻) . 吉川弘文館 . 96 . 前掲 4) , 17) , 18)
- 23) 丹後郷土資料館友の会 (1998) : 丹後の漁労習俗 . 京都府立丹後郷土資料館 . 29

- 24) 京都府漁業調整規則(昭和 40 年 7 月 3 日) 1965
http://www.pref.kyoto.jp/reiki/reiki_honbun/aa30006341.html
〈閲覧日：2014/1/10〉

第4章

自然とかかわる自立自存的な生き方

第4章 自然とかかわる自立自存的な生き方

4-1 本章の目的

本章では、現代の非産業的かつ自然共生的な生活について行動観察および聞き取りをおこない、そこにみられる特徴的な様相から要素を抽出して現代社会における「自然共生的な生活」と「自立自存」的な生活の在り方を捉えることを目的とする。そのためには、個別の事例から抽出された生活の概念図を作成し、本概念図を「自然共生的な生活」と「自立自存」について検討する手がかりとして提案をおこないたい。

主要な既往研究については、以下のような論文を見出すことができた。まず生活の自立自存については景山ら（2002）¹⁾がイリイチを通した論考をおこない、生業活動については金城（2013）が地域社会との組み合わせにおいて、生業からマイナー・サブシステムまでを明らかにしている²⁾。サブシステムの視点からは、戸崎（2005）³⁾、丸井（2007）⁴⁾が論じ、高齢者の自立的な生活については松川（1996）⁵⁾が論じている。さらに大鋸ら（2006）は自然と共生し、資源循環という視点からの発表をおこなっており⁶⁾、真下（2000）は生活環境づくりの課題を論じている⁷⁾。遊び仕事については、三橋（2013）が自然共生、自立自存という観点からまとめている⁸⁾。

以上の研究は、自然共生や自立自存という立場で発表されているものの、理論的な論考や一部の地域の調査に根差している内容である。これらは参考にはなるが、人間の生活全体を総合的にとらえ、生活意識や行動から生活基盤となる要素を考察する研究は見当たらない。

そのようななかで「自然共生的な生活」と「自立自存」に関する研究がしだいに多くなってきつつあることは、一般的に自然破壊に対する警告や過疎化・高齢化社会の問題と関連してきているといえよう。しかし、個別の事例を積み重ねるだけでは、多くの事例を集めることにのみ終始してしまうことになる。本論では、前述のように個別の事例から普遍的な概念図を作成することによって研究の一般化を図ると共に、自然と人間との関係を生活の視点から捉えていくこととする。

4-2 調査の概要

4-2-1 調査対象

（１）研究対象地

2011 年より京都市北部の宮津市由良地区（以下由良）において学生合宿による調査の指導をおこない、地域の現状を把握するとともに、主だった住民との交流をおこなっていたため、継続的な調査対象地とした。また、対象地として選定した理由には、かつては丹後由良駅から海水浴の人々が多数訪れ、駅から海岸まで人の波で覆われたくらいであったというが、高速道路の開通により、鉄道利用者の激減によって過疎地となってしまったという経緯がある。このような社会の変化を受けて生活が変化し、住民の構成も異なってきたことから、現代社会の典型的な地域であり、「自然共生的な生活」と「自立自存」についての研究対象として取りあげることとした。

宮津市字由良（図 1）は、旧国名と合わせて通称「丹後由良」と呼ばれ、宮津市の東端に位置する。隣接する舞鶴市の神崎地区とともに由良川の河口を挟み、他方はほぼ海と山に囲まれている集落である。世帯数 458 戸、人口は 1125 人（2010 年国勢調査）⁹⁾、東西に約 4 キロメートルに海および川沿いに広がる街である。面積や人口の割に耕地面積は広くなく、元来は国内交易船の北前船の船頭町として成り立っており、現在も集落外に通勤する者が多い。

特産物としてはミカンが挙げられ、海水浴場としても著名であったが、どちらも近年は勢力を弱めている。冷泉が沸くために温泉宿がいくつかある。かつては海で取れる塩が他所の塩よりも高値で取引されるなど特筆される産品であった。前述のように海水浴が盛んだった昭和時代は、最盛期で約 70 軒の民宿や旅館な軒を連ねていたが、今はその 10 分の 1 程度の件数にまで減じている。

（２）対象者

A 氏は調査当時 85 歳の男性（1929 年生まれ）で、由良地区周辺で生活してきた方である。舞鶴市となる近隣の集落出身で、出征前 16 歳の時にアジア太平洋戦争の終戦を迎えている。家は兼業農家であったので、その手伝いなどをしており、21 歳のころは紡績会社に 3 年ほど勤めていたが、「ただ機械的に働くのが性に合わずやめた」という。22 歳から養鶏を始めた際、鶏が病気で全滅し、借金しつつまた種卵からやり直したことがあり、母親に手当てを出しつつ手伝ってもらいながらの養鶏と同時に、農作業を続けて生計をたてた。

1959 年、30 歳で婿入り結婚して由良地区に転入、荒れ地の山を開墾しミカン畑を作った。ミカンは由良地区の特産であったため始めたそうで、最盛期には 1200 本を植えていた。もとは 1 反程度しかなかったが、7～8 反購入してそのうち 6 反ほどの山林を開墾し、半分ほどはミカン畑、残りを山荘の敷地と道路、小規模な畑とした。田畑での農業をおこなうが、別の場所にある水田では

コメはほとんど出荷せずに自給分としていた。

1960 年代後半になるとミカンが値落ちしたが、A氏はそれでも 1970 年代いっぱいには続けた（図 2）。その後、山の中腹を整地して山荘を建てることにし、1982 年、子どもたちの自然学習のための宿泊施設（およそ 50 人分）として機能するよう、10 畳 2 間続きの部屋が 2 部屋、広めの台所や風呂場を確保し、作業場や倉庫も建てている。

1980 年代からはシイタケ栽培をおこない、ミカンに代えて現金収入のための主たる生業とした。年間 8 千本から 1 万本のほだ木を購入し、ミカンの収入減少分をそうしたシイタケの大量生産で支えていたが、これも 20 年続けるとほだ木の価格が当初の 3 倍以上になり、また中国産の安価なシイタケが市場を席巻したため利益をうることが困難となり、生産を縮小した（図 3）。

そののち、現在に至るまでコメ作りや規模を縮小したミカンとシイタケを含む農業を中心的な生業としてきた。ちなみに現在のミカン生産は最盛期の 10 分の 1 程度である。由良の街中に娘の家族（娘婿、孫 3 人）とともに定住している家があるが、日中の大半は由良の海と河口を臨む丘陵地にある山荘にて 1 人で生活している。

以上のような生活から、対象者はミカンとシイタケを収入の糧としていたが、いずれも価格の下落等、社会の変化の影響を受けて縮小せざるを得なかった。また、コメは自家用のみ生産し、その他の生活に必要な農作物などは自給生産している。かなりの部分を自給自足的な生活で賄っていることがわかり、高齢者であるが自立的な生活を送っていることから、経験に裏付けされた生活の工夫や節約を現代にどのように活用しているのか、また、どのような生きがいを感じているのかを明らかにすることとした。

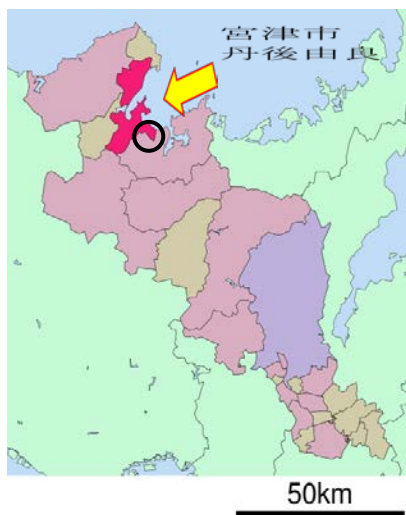


図 1-1 宮津市由良の位置



図 1-2 由良川



図 1-3 由良海岸



図 1-4 由良ヶ岳



図 1-5 山荘付近



図 1-6 A 氏



図 1-7 A 氏庭より



図 2 ミカン



図 3 シイタケ

(3) 調査方法および期間

共同生活をととしての行動観察と聞き取りを分析し、生業としての収入、自給自足をしている内容、日常生活についてのさまざまな工夫や生活全般に対する考え、人間関係や生活態度などの分析から生活概念図を作成した。

調査期間は 2011 年 10 月から 2014 年 7 月まで、毎月原則として 2 回、平均して 4 日間ずつの現地調査をおこなった。

4-2-2 調査結果

共同生活をととしての行動観察および聞き取りの調査から表 1 に示すように A 氏の生活行動が明らかになった。ここでは、その活動を農作業、調理、季節行動、漁・猟、自作道具、その他に分類した（表 1）。

このような生活行動のなかで、食生活にかかわる行動と住生活にかかわる行動とに分け、調査結果を踏まえて分析する。

表 1 A 氏の生活行動

	農作業	調理	季節活動	漁・猟	自作道具	その他
活動内容	柿・ミカン シイタケ・ ウド等収穫 除草作業	干し柿づくり 干物づくり 漬物づくり 撤果ミカン 搾り イノシシ解体一部	タケノコ 茹で 山菜取り 除雪作業	手長エビ 漁	モンドリ (金網) シジミ保管 網(金網) 竹ぼうき	消し炭づくり 堆肥づくり 石垣積み 炭焼き釜作成 買い物(魚市場 や道具) 生活全般にわた る意識

（１）食生活とそれに関する道具類

食物の栽培、採取、保存等は自立した生活をおこなう上で重要である。１年の季節の変化や栽培・採取物の変化によって作業をすることは、これまで各地域でなされてきたことであった。しかし、近年の生活の変化は過疎地においてもみられるものであり、伝統的な食生活の中心であった食材の入手方法や保存といった技術が失われつつある。Ａ氏はかつての技術や生活方法を伝承しながら、現代の生活を営んでいることが生活行動から明らかになった。そこで、以下に調査によって得られた特徴的な食物の入手・保存等について述べる。

１）手長エビ（図４）

手長エビは、たとえば京都市などでは高級食材として取引される料亭食材であり、由良川でも捕獲される。漁は由良川漁協の管轄のもと、モンドリ（ワナ的一种）を仕掛けておこなわれる。Ａ氏は、５月～１２月前後に十数個のモンドリを同時にかけ、一度に多くて数十匹を捕獲する。少ない日や時期では数匹にとどまるときもある。すべて自宅で消費するか人におすそわけしていたが、ここ２年は体力の衰えから中止している。

調理は自宅（山荘）でおこなわれ、おもにから揚げとして食される。保存は生の状態で冷凍し、必要なときに解凍して調理する。実際には冷凍庫が保存の主要な手段として用いられており、現代の生活を基盤としながら、伝統的な漁をおこなっていることがわかる。また、漁に使われるモンドリは、Ａ氏の手製のものである。従前は稲わらで作成されたモンドリが一般的であったが、現在は金網製が主流で、Ａ氏はどちらも製作してきた。そのため、金網は相当量の在庫を常に持っており、現在は稲わらを使用しないものの、従前の稲わらも在庫している。

なお、手長エビをおびき寄せるエサは購入してきており、ここで手長エビ漁における恒常的な現金支出がある。実際に自家用の食料の入手であっても、エサの購入や漁協の許可を得るための入漁料を支払う必要がある。



図４ 手長エビ



モンドリ



唐揚げ

2) 柿 (図 5)

柿の木は庭先などにあり、時期になると自家消費もしくはおすそわけのために収穫する。柿の収穫の際は枝を切り落とすため、剪定作業も兼ねており、収穫と剪定を考えながら効率的に作業をする必要がある。

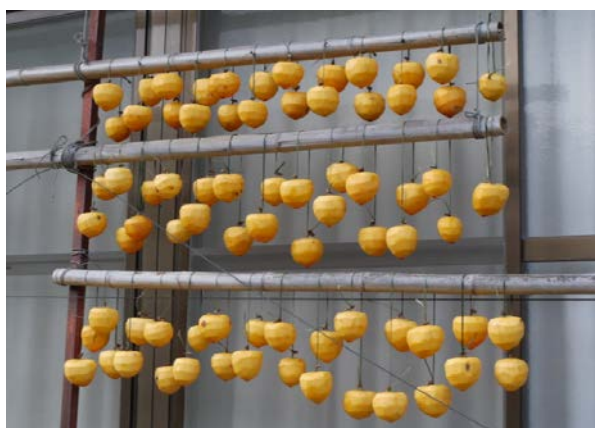
生で食する以外に、保存を兼ねた干し柿づくりが行われる。干し柿作りでは、シュロの葉を割いたものを使って柿を吊るしているが、これはA氏が「ごみになるものは使わないように」と指示したためだ、とA氏の娘は述べている。また、A氏は干し柿作成の際に剥いた柿の皮も干しておいて、漬物に入れたりおやつとしたりして食べ、無駄を出さないようにしているという。

柿の実を食べ終えたとき、A氏は柿の葉を取ってそれで手と口をぬぐい、作業へ戻った。手ぬぐいなどを出す必要がないし、使用後の洗濯もいらず、またごみにもならないという意識のもとであると述べている。



図 5 柿

柿の皮



つるし柿



3) 魚 (図6)

以前は海や川での漁をおこなったことがあるというA氏であるが、中心的な生業ではなく、近年は、魚はもっぱら外部から入手する。魚は現金による購入の他に物々交換や譲り受けといった取引形態がみられる。市場に行った際に、売りに出されず捨てられるような雑魚や傷物をもらってきていることも少なくない。食べ物を粗末にしないこととともに、安い値段で買い取る、もしくは無料で引き取ってくるので、家計が助かると、A氏は頻繁に述べている。

干物は、生魚を購入もしくは譲り受けてきて、A氏がさばいて塩を振り、干して作る。保存は、大量に入手した場合は一夜干しにしたのちに冷凍することが大半である。また、それに適さない魚やアラの部分などは煮物にし（当該地方では「炊く」と呼称する）、冬場は常温、夏場は冷蔵庫保存としている。

さばいた際、身から骨・アラまでできる限り何らかの形で利用している。干物、刺身などへの調理の際、肝臓や頭の部分は煮物にし、骨は味噌汁の出汁として利用するなど、そのまま捨てる個所はエラや鱗、尾ひれなどごく一部しかない。それら残った部分や利用後に出る生ごみも、すべて堆肥として活用している。



図6 魚 (トビウオ)



魚市場で



干物作り



4) コメ

A氏は山荘周辺の山以外に平野部に水田2反3畝ほどを所有しており、10俵(600kg)程度が自家消費分に回される。A氏は常に6～7俵を備蓄米としており、また日頃はその備蓄米すなわち古米を食している。

この蓄えによって、たとえば1992年の冷夏によるコメ不足の際も、まったく慌てることなく、知り合いや親戚にコメを配布することができたという。

5) 野菜類

トマト、ナス、キュウリ、タマネギ、ネギ、ウド、ダイコン、ニンニク、ジャガイモ、ハクサイ、キャベツ等を栽培しており、現在はほぼ自家消費もしくはおすそわけで消費されている。ネギなどは時折、市場に出荷することもある。

山荘の畑の面積(およそ1～2反)がさほど広くないことから、すべての食生活を充足するには不足することがあるが、不足する野菜類は農作物同士の物々交換にて補充している。

6) 山菜摘み・タケノコ掘り

山荘周辺では、春先に山菜やタケノコが採れる。タラノキが植わっている区画があり、そこでタラの芽を摘む。同じ個所から3度以上は摘まないようにしており、これは伝承にもある通り、タラノキの成長を考えてのことなどが理由である。(図7)

タケノコも所有区画の中にある竹林で自生するため、5月あたりには毎日竹林に入り、タケノコを掘り出していく。2013年は、「生まれて初めて」小型の油圧ショベル(バックホウとホイールローダー)でタケノコを掘る作業をおこなった。2014年はまた従来の手掘りに戻しているが、こうした試行錯誤はほかの活動でも頻繁にみられる。効率を上げるためと、楽しみを兼ねているとA氏は述べている。(図8)

タケノコは、掘り出したその日のうちにかまどに薪をくべ、大きな釜で米ぬかとともにゆでる。ゆでた後はその状態で人におすそわけするほか、塩漬けにして保存する。2斗桶に2桶分ほどは常時備蓄されている。

7) 漬物など備蓄

一部は前にも述べているが、食材は備蓄へまわすものがある。コメ6～7俵やタケノコ2斗桶2杯のほか、ウド2斗桶1杯、梅干しは200kgに及ぶ。ほかにもダイコンはたくあん漬け、魚の干物類は冷凍、フキの煮物も冷凍にて貯蔵されている。

コメと梅干しや漬物は、停電を含む自然災害などの「いざ」という時の蓄えの意味を持ち、A氏は特にこれらの蓄えを重要視している。

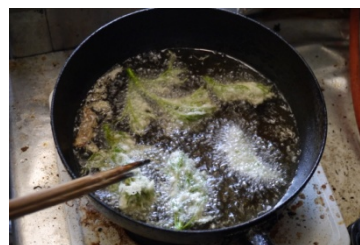
なお、ウド、タケノコ、ダイコンのたくあん漬けは、それぞれ新しい季節の

ものが手に入ったり味が悪くなったりする春先に、塩抜きして刻み、みりんやしょうゆで煮なおし、この地域独特の呼び名である「ぜいたく煮」という料理として消費され、更新代替されていく。



タラの芽

図7 タラノキ



天ぷら



図8 タケノコ堀り



皮をむいて茹でる



掘ったタケノコ



塩漬けで保存



タケノコ寿司

図9は、採捕や交換で得た食材で調理された食事の例である。畑でとれた野菜に購入したこんにゃくを使った煮物、買ってきた魚やもらってきた魚の調理などがみられる。



図9 採捕・備蓄食品による食事例

(2) 住生活にかかわる行動

1) 消し炭

冬季の調査中に、消し炭の作成と利用の様子が見られた。まず、ミカンの木や垣根などを剪定した枝は持ち帰り、大工仕事を頼んだ折に大工が残していった木材の切れ端なども、すべて袋に入れて持ち帰る。それを、冬季はストーブで薪として燃やし、暖を取りつつ魚を焼くなどする。燃えかすはそのまま火消し壺に入れて、蓋をして自然消火させる。こうしてできた炭を「消し炭（ケシズミ）」とよび、火をつけることがたやすいので、七輪で餅や魚などを焼くときに使う。さらに灰と炭は選り分けてそれぞれ袋に入れて保管し、灰は肥料として使う、循環の構図となっている（図10）。このように廃棄されるような木材を生活の中で利用し、無駄のない循環を実践していることは、この地域であってもそれほど多いわけではないことが分かった。ちなみに、消し炭は一冬でコメの30kg袋に25袋分ほどとれ、灰は同1袋分になるという。

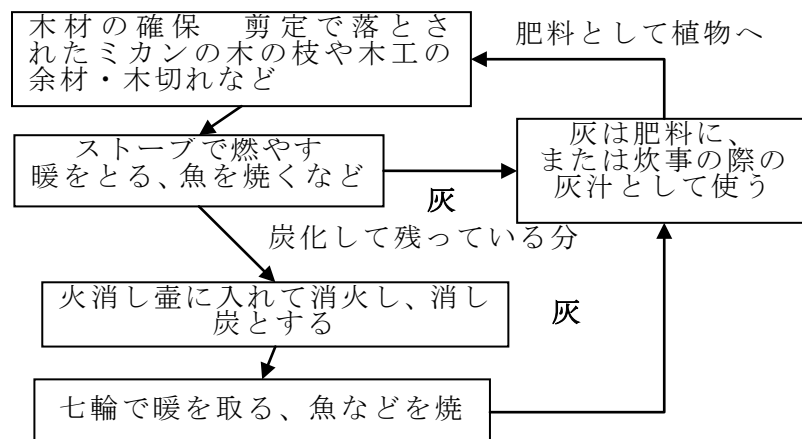


図10-1 消し炭を介した木材の循環



図 10-2 消し炭を介した木材の循環 (図)

2) 庭園・石垣積み (図 11)

山荘周辺は、土留めや整地のため、石垣が積んであるところがある。石垣は A 氏が自身で積み上げたもので、山荘建設の前後の約 30 年前に積んだところと、ごく近年に積み上げた個所がある。材料となる石は人からもらったものや、自分で拾ってきたものでできしており、購入はほとんどしていない。また、石垣の裏に流し込んだコンクリートも、工事の余剰を貰い受けてくるなど、物々交換や譲り受けによるものである。

特に庭木や石は、A 氏が何らかの形でかかわった人たちが、置いていくのだという。物々交換のひとつの例であるが、特に A 氏の庭には大きな石が多くあり、一般には購入するには高価なものである。

3) 炭焼き窯 (図 12)

2012 年になって、家の裏手にあたる南側、北向き斜面に炭焼き窯を製作した。これも A 氏の手によるもので、小型工作機械で斜面を掘り込み、石を積んで土留めを施して窯を製作したものである。

窯の突き方 (製作方法) は若いころに窯づくりを見ていたことから、その記憶を辿って設計したとのことである。

実際は、水が出るなど釜としての機能を十分に果たせないことが完成後に判明したため、A 氏はまた別の位置に釜を築きたいと述べている。

4) 大量の資材の備蓄

A 氏は、前述のコメや漬物に代表される食糧備蓄の他に、大量の資材を保管している。大工作業に関連する道具は、丸木を製材し、家を建てていく過程で必要になるであろう道具はほとんど揃えており、特に刃物類は 1 組ずつではなく、各々複数所有している。薪割りに使う道具、猟や漁に使用される道具、それら道具を作る道具や材料に至るまで保管されている。また、宿泊施設のた

めの鍋など調理用具も大量にあり、食器什器類はおおよそ 50 人分、椅子も 50 脚程度などというように、あらゆる種類の道具がそろっていると言っても過言ではない。藁や網、金網、ロープなども同様である。山荘周辺にはA氏が建てた小屋が十数か所あり、それぞれに木材を中心とした資材があり、A氏いわく「小さい家ならすぐにでも建てられるだけの材料と工具はそろっている」とのことである。最大の大きさの機械は「ユンボ」と呼ばれる小型バックホウ、小型ホイールローダー、および軽自動車のトラックである。小型船舶を所有していたこともあった。これらを駆使して、造成や造園、除雪から農作業、大作業など様々な作業を自らがこなすほか、道具を借りに人が訪れることもしばしばである。



図 11 庭園・石垣積み



図 12 炭焼き窯

4-3 対象者の生活の基盤となる行動理念

A氏の行動観察と聞き取り調査から、A氏の行動理念を抽出して「生活の基盤となる7要素」の概念図を作成した（図13）。

図の外側から内側に向かってA氏の生活に対する理念が形成されている。各円内の隣接する要素はそれぞれ関連を持っており、またほかの円内の用語とも隣接している要素同士で関連を持っている。外周部から内部へ向かうにつれてA氏の内面に向く。

この図の説明を以下に述べるが、いずれもA氏の聞き取りと行動の観察によってまとめたものであり、前述した内容と重複する場合には説明を簡略にした。

4-3-1 生活の外周3要素

A氏の生活を縁どるのは、「自然環境」「社会環境」「経験」である。それぞれについて以下に詳述する。

（1）自然環境

農業を主たる生業としてきたA氏にとっては、自然環境は重要な要素である。季節に応じた暮らし方と食料の入手という、自然と向き合い、そこでの生活を工夫していることから理解される。それと同時に、次に述べる「社会環境」も相まって、時代柄、自然の中で生活をしていくことが当然であったということも前提条件である。自然の中での「経験」が大切である、とA氏はよく発言しており、山荘建造の理由であった子どもたちへの自然学習という発想も、子どものうちから自然体験をさせることが人生にとっていい経験になる、というA氏の論理に従ったものである、

（2）社会環境

A氏の思考の背景には、もちろんA氏が生きてきた時代の背景がある。それは社会的な環境と呼べるもので、自然環境とともに人格形成には大きな役割があると考えられる。商品をたやすく買いに行くことができなかったり、そもそも商品やサービスというものが現代ほどまでに充実していなかったりした時代であり、それは後述の「先を見据えた行動」にも大きく影響してくる背景である。また、その社会での「経験」は、現代で育った人々との間で思想の違いを生み、A氏の行動の特徴を形作る。見方を変えれば、A氏の行動をA氏の世代として捉えなおすと、それぞれの活動は至極普通の活動ばかりでもある。漬物の大量の備蓄はハウス栽培や冷蔵技術、流通法が未発達であった時代には当然のことであるし、自然の中での知識や活動も同時代的にはごく一般的なことである。しかし、現代の社会環境を充分に利用し、さらなる工夫をして生活して

いることや、隣人との交流を大切にしていることなどは、決して社会から離れて生活しているのではないことを示している。

(3) 経験

A氏が自然と社会の中で得た経験こそ、現在のA氏の行動を可能とする技能や技術となって表れているもので、その具体的な内容は、調査結果において述べている。そして、これらはA氏の生活様式に大きな影響を及ぼしている。

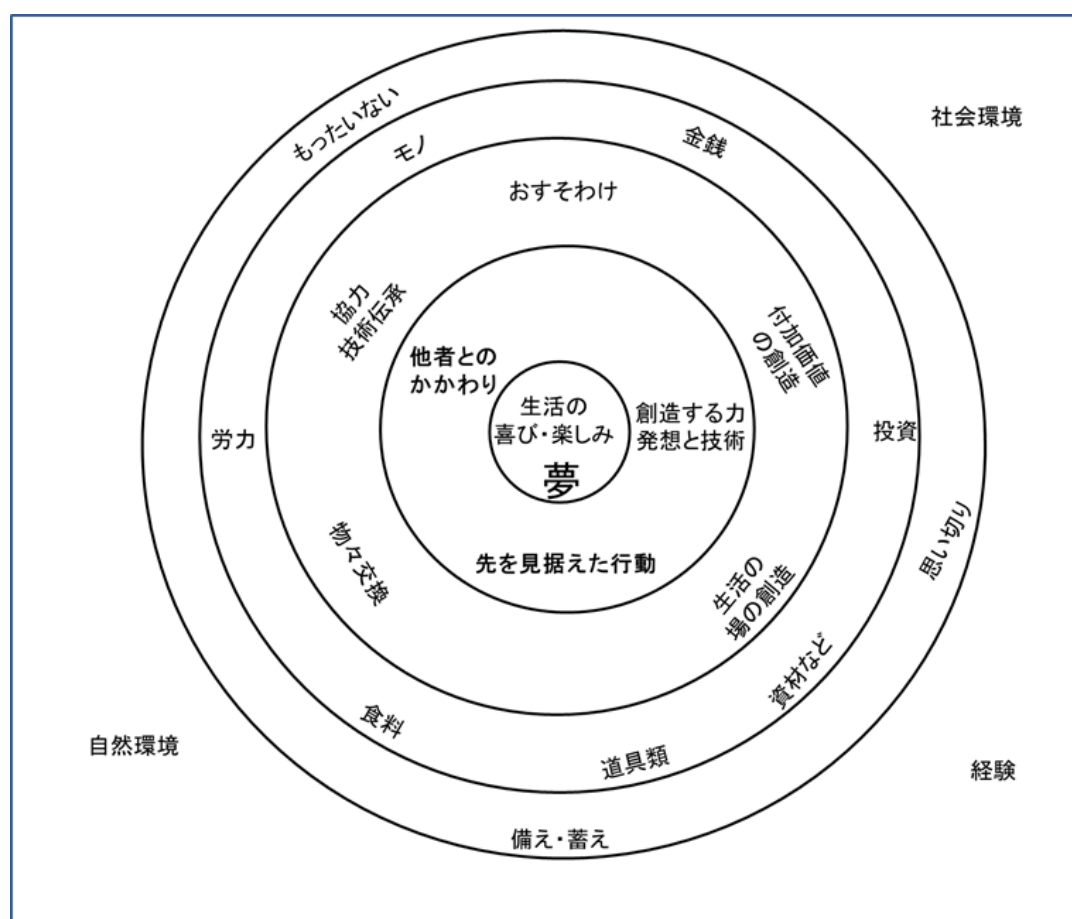


図 13 生活の基盤となる 7 要素

4-3-2 特徴的な思考 3 要素

上記の環境 3 要因を下敷きに A 氏の行動を分析した結果、次に述べる 3 つの言葉で言い表すことができる。「もったいない」、「思い切り」、そして「備えと蓄え」である。

(1) 「もったいない」

「もったいない」という概念は、A 氏の中ではごく自然に身に付いたもののようである。それは、A 氏の生活背景にある社会環境、モノが少なかった時代、または経済的に豊かではなかった時代を経てきたことからのものであると考えられる。また、自然が限られた資源であることを認識しており、これは自然での体験が元となっている発想であるといえる。A 氏の「もったいない」には、さらに 3 つの形態がある。それは、内側の円で重なっている「労力」「モノ」「金銭」それぞれの「もったいない」である。この 3 つの「もったいない」を分析すると、ばらばらな概念ではなく、連動していることが見いだされる。たとえば、食物では柿や魚を無駄なく消費することや、木材の再利用を徹底しておこなっていることなどがあげられる。つまり、モノの浪費を削減することと労力を削減することは、直接的に金銭的、経済的な無駄を抑制することへつながるのである。道具を自作して漁をおこなったり、取れる時期の食料を保存して 1 年間用いたりすることは、この例であろう。食べ物や資材を大切にすることに自然の恵みへの感謝があることは、裏を返せば生活を支えてくれるのが自然であるからこそその考え方であるともとらえられ、すべての「もったいない」は生活経営のために必須の概念であったことが察せられる。

(2) 「思い切り」

「もったいない」はそのまま「備えと蓄え」に通じる概念であるが、一方で A 氏は、前述の「もったいない」の反面、「人にやったれ（モノや労力を提供する）」という時は、思い切ってやる（提供する）」「普段は無駄なことをしないようにしていても、行動するべきときには思い切ってやらないといけない」「思い切ってお金を払うことが必要なときもある」と述べている。

A 氏の言葉を借りれば、「もったいないにもいろいろある」とのことだ。たとえば、かつておこなっていた養鶏で、鶏が病気で全滅した時には、「思い切って」すべてを廃棄する決断が必要であるという。

同様に、野菜の種を撒いてきれいに生えなかったら、すべて掘り起こしてやめにし、新たに植えるかほかの作物に変えてしまうという思い切りが必要である。

また、この「思い切り」は内側の円にある「投資」や「資材など」の経済支出にも当てはまるが、これは後で述べる。

(3)「備えと蓄え」

これは一面、A氏の育った時代的には当然の概念であったと思われる。すなわち、食糧の備蓄や道具の管理などは、買いに行けば手に入るという現代とは様相が大きく異なるもので、家に備えがなければ暮らしが成り立たなかったということである。単に食料や生活用品を購入して蓄えるのではなく、季節ごとに収穫や採集した食料をさまざまな方法で保存していくことが、無駄なく資源を使うことにもなっている。しかしA氏の備えや蓄えは一般家庭の規模ではなく、後述する「先を見据えた行動」による「いざ」という時の備蓄に重きを置かれているところが特徴的である。

その「備えと蓄え」を放出する覚悟が必要なときがあり、それが前項の「思い切り」である。

4-3-3 生活の基盤となる7要素

次の円周は、生活の基盤となる物事で、ここでは7の要素が見いだされた。「労力」「モノ」「金銭」「投資」「資材など」「道具類」「食料」である。それぞれが、外周の「もったいない」「思い切り」「蓄え・備え」と関連するとともに、次に述べる内周円の5要素、さらに内周の3要素に関連してくるので、説明は一部を省く。ここでは、外周にある「もったいない」に関連する3つ、「労力」「モノ」「金銭」それぞれにおけるA氏の「もったいない」概念を説明する。また、そののち、「投資」「資材など」を外周要素「思い切り」に関連させて説明する。

(1)「モノ」が「もったいない」という概念

A氏の発言に多く聞かれたのが、「もったいない」「無駄が出ないようにする」という言葉であった。

例として挙げられるのは、以下の行動である。

柿の収穫の際に、柿が木の上に生っている状態のまま熟したものを「ずくし(熟柿)」と呼んでいる。A氏は「ずくし」を大切ににとって食べたり、熟しすぎて落下した実でも汚れた部分を小刀で切り取って食したりする、という行動が見られた。特に後者の行動は、A氏いわく「もったいないから」であり、落ちている実でも無駄にしない姿勢がうかがえる。

ミカンの間引きにあたる摘果をおこなったものは、捨てられることが一般的だが、A氏はそれを絞って砂糖と水を加え、飲料として人に提供している(図14)。これも、「同じように生まれてきた(命である)のだから、捨てられるのと同じように(飲み物などとして活用され)生かされるのでは、生かされた方がいい」と考えているからだという。魚の調理において肝や骨を利用す

るのも同様の理由である。このように、生活のあらゆる場面でモノを大切にし、それらをくまなく活用するという姿勢がみられた。そこには、自然への畏敬の念や恵みに対する感謝の思いが見える。



図 14 摘果ミカンのジュース作り

（２）「労力」が「もったいない」という概念

「もったいない」は、とかく「モノ」や「金銭」の消費について用いられているが、A氏の行動には「無駄のない行動」という要素がみられることを見いだした。「無駄のない行動」はA氏の基本行動概念とみられる。いわく、「空身で動くことはしない」とのこと、どこかに行く際には何かを運搬し、または帰ってくる際には何かを持って帰ってくるなどを心がけているという。畑に行く途中では、周囲の様子をよく観察する。それによって、たとえばあの盛り土を補修しなければならないとか、あの木は何に使いそうだとか、どこにどのような石が落ちているのかなどを覚えておく。後日、作業にかかり、モノが必要になった際には、そうした日頃の観察が役に立つ。

また、常に「次」の行動を意識して動いている。使うべき道具を作業する場所の周囲、手が届く範囲に集めて置いておくことがその一例である。タケノコをゆでる際、釜のそばには薪や火箸、火消壺、まな板、包丁、鍋のふたなど必要と思われる道具や材料はすべて運んでおいてあり、作業中は座ったまますべての作業が完結できうるようにしてある。

その意識が細部にわたっていることが示されるのは、食事の時である。炊飯器には常に飯が入っており、電気湯沸かし器の中にも常に熱湯が満たされている。その湯沸かし器のそばには、追加するための水が置いてある。食卓周辺に食器を入れた箱があり、箸など什器も原則的には手の届く範囲にある。ほとんど動くことなく、料理や使用済み食器を台所へ受け渡しができるよう、台所と食事をおこなう居室の間にはいわゆるカウンター方式といえる受け渡し口がある。このように、食事をおこなう際にも、いったん座ったらほとんど動かずに

食器什器類を台所に返すまでの行動が可能となるように「設計」されている。これはA氏が自分の考えを実践するための山荘を建設した折に考えられた設計である。

（３）「金銭」が「もったいない」という概念

経済的に余計な出費をおこなわない、すなわち無駄な金銭を消費しないこともA氏の行動に浸透している。傷ついた魚などを漁港でもらってくることもそのひとつである。しょうゆを購入する際は、一箱という単位で購入することで、1本当当たりの単価を下げている。

漁港で魚をもらってくる、もしくは購入することは、一般商店で購入するより安価である。それを自ら調理することで食品に付加価値を生みだすようにし、調理済み食品などの商品を購入することをできる限り避けることで、経済的な支出を低減している。

ただし、こうして安価でもしくは無料でモノを譲り受ける代わりに、A氏は売り物にはなりにくい形や色のミカン、または自らが採ってきて調理したタケノコなどの食品、道具類などを人に提供している。ここに物々交換の形態が成立しているため、金銭は動かないがモノの交換は起こっている。前述のしょうゆも、人への贈答に使うことが多い。

様々な場面で、低廉な価格で購入もしくは譲り受けたもの、自ら栽培・製作したものを外周要素「物々交換」の物種とすることで、現金の支出を抑えることが、A氏の経済である。

（４）「思い切り」と「投資」「資材など」

「思い切り」と関連して、A氏は経済面でも支出すべき時には金額が大きくても支出をためらわないとしている。道具を買う時などは、安物を買わず、値段に応じて質が高いものを購入するようにしている。必要な支出を怠ると、かえって後で支出がかさむことがあり、一般に言われる安物買いの銭失いとなりがねない。「金銭」のみならず、自らが「蓄え・備え」ている「食料」「道具類」「資材など」も、思い切って放出する必要があるときがあるという。

また、そうした思い切った支出の中でも、特に現金に関しては、たとえば宴会や外食の食費やパチンコといった、その場で消えてしまうことには投資しないこととしている。出費はすべてモノを作るため、あとに残る何かを作るために「投資」しているとし、土地の購入や機械の購入、田畑の整備などがそれにあたる。若いころに婿入りした先の家の状態が悪かったが、家をよくするためには金銭を使わず、すべて畑や道具類に投資していくことで、将来の収入の糧としていった。70歳になるまで借金を持ち続けたのも、そうした投資のためであった。

しかし、ただ単に借金をして投資をおこなっても、回収がきかなくなる恐れがある。それに対しA氏は、後ろ盾を構えていたと述べる。それは、借金と、保有している現金と、また保有している土地などの財産貯蓄の3者の関係を良好に保つことであるという。借金は土地を売れば返せる額にとどめておくとか、土地が売れてしまっても次の事業を始めるだけの現金や土地は残している状況にしておくとか、またはその土地を開墾して付加価値を高めるための機械の購入のために借金をするとか、そのように経済を回してきた。それこそが、A氏の「家庭経済」の経営理念であるといえ、その概要を図式化して示した(図15)。このようなA氏の経済についての考え方は一般的な考えであるともいえるが、A氏の経験に基づいた生活経営の基本であるといえる。

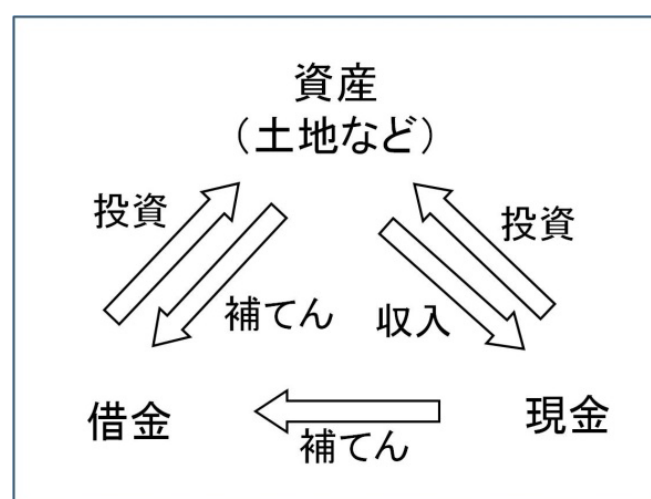


図15 家庭経済の経営理念

4-3-4 行動の5要素

A氏の行動を分類すると、次の5要素に分けられる。「物々交換」「協力・技術伝承」「おすそわけ・譲渡」「付加価値の創造」「生活の場の創造」で、これもそれぞれが内外周円内の要素を介して関係しあっている。

(1) 物々交換

ひとくくりに言えば、人づきあいを大事にする、というところであろうか。人づきあいは、金銭を介さない物々交換と、金銭を介する売買の双方の活動に見られる。

まず、物々交換で生活に必要な物資を得ている場面が日常的にみられる。これまで述べてきたように食材の多くはA氏の畑で採れたものなどを他人におすそわけし、見返りとして人からもらっている例が多い。あるときは、ゆでたタ

ケノコを塩漬けにする作業をしていた A 氏に聞き取り調査をしている時に、A 氏の知り合いの漁師が大きな魚を 2 尾持ってきたが、A 氏はビニール袋いっぱいゆでたタケノコを詰めて漁師に渡した。このような食べ物の交換は、「生活の豊かさ」を増大させると A 氏は言う。すなわち、自分が作らないような農作物や、採りに行かない魚や肉、調理しないような料理が食卓に上ることになり、日常の暮らしが豊かになるのだという。これは単に食材を贈与されたということではなく、日ごろの人的交流の上に成り立つ関係であることは言うまでもない。

（２）協力・技術伝承

食べ物同士の交換のほか、労力との交換もある、除雪作業を手伝ってやったり、竹ぼうきの作り方を教えてやったりした相手が食べ物を持ってくることもある。極端な例では、大工道具を貸してやったり指示を出してやったりした大工がおり、その棟梁がやってきて感謝のしるしとして余ったコンクリートを A 氏の石垣に流し込んでくれることがあった。部屋にある電化製品、テレビやハードディスクレコーダー、インクジェットプリンターとそのインクや印画紙に至るまで、知り合いの電気屋が「持ってくる」という。庭園にある庭木や石もほとんどが「もらい物」であるというが、それはすなわち何らかの形での「交換」で得たものであるとみられる。これも生活の「豊かさ」を増大させている例であるといえる。

また、交換の有無にかかわらず、人に手を貸したり、技術を伝承したりすることも積極的におこなっている。

（３）おすそわけ

これは前述の物々交換の中で、モノが返ってくことを前提としない行動であるといえる。もとより A 氏は見返りがあることを狙ってモノを人に譲渡したり貸与したりしているわけではないので、本来はすべて「おすそわけ」の觀念に基づいたものであるとみられるが、実際はそのお礼という形でモノの交換が発生していることがある。すなわち、ここまでの 3 要素は大きな意味の違いはない。

（４）付加価値の創造

荒れ地を開墾して造成し、農地や山荘建設のための宅地とする、切り出した丸木を製材する、もらってきた魚を干物にする、タケノコをゆでる、漬物を作るなど、様々な場面において A 氏は「ひと手間」かけてから人に提供するようにしている。この「ひと手間」により、提供した相手の労力負担が軽減すると同時に、A 氏のモノに付加価値が生じ、後の物々交換にも好影響を及ぼすものと考えられる。すなわち、たとえば漁港でもらってきた魚をそのまま他人に譲

渡すればその価値は現金換算で魚の原価 30 円程度だったとしても、干物にして譲渡すれば小売店の干物の価格である 80 円から 100 円程度の価値を持つだろう、ということである。もちろん A 氏が干物にする手間は現金収入として返ってくるものではないが、もらった側の人間が生魚ではなく干物をもらったことによって貰い物の価値が向上し、あとで別のモノを A 氏に提供するときもその分価値が高いものを提供する「気持ち」になる。

こうした付加価値の創造を、自らの労力でおこなうことで、現金支出を増やすことなく資産を増やすことができるのである。その労力は「並大抵のものではない」と A 氏が述べるとおり、重機の無い中で 6 反もの山中の荒れ地を整地したことによく表れている。しかし、それを人に金銭で頼んだり、整地されていた土地を購入しようとしたりしていたら、A 氏の家計は回らなかったことだろう。

（５）生活の場の創造

本論にそもそも必要なのは、A 氏の暮らしを可能としてきた「場」の存在である。

A 氏の暮らす京都府宮津市由良地区は、山に近い河口の集落であることから、海も山も川もあるという自然条件に恵まれた土地柄だと考えられがちである。しかし、農地として利用できる土地は人口の割に広くはなく、決して農業に適している地域ではない。「3 反百姓」という言葉があり、由良では 3 反でも田畑があれば立派な百姓であるという意味であるが、これは専業の農家としてはむしろ狭い方であり、生活を十分に支えられる規模ではない。

そのような土地柄にあって、A 氏が大量の備蓄、道具類の保管をおこなうことができ、または炭焼きや製材、山菜取りからシイタケ栽培、ミカン栽培に至るまでをおこなえるというのは、由良では非常に特殊な例である。しかしそれは、恵まれた環境に A 氏がいたからではない。A 氏は荒れ地であった山を自らの手で開墾し、今の山荘を作る礎を作り、山荘が建ってからでも周囲の手入れを怠らなかったのである。

山に上がる道は、A 氏の山荘周辺までが運転しやすい広さがあり、2 本の経路のうち 1 本はコンクリート舗装がなされている。家の周りはどこでもクルマで入れ、転回できる広さがある。石垣や生け垣は道路のほうへ出っ張ることはない。作業場には道具が充分にあり、道具類はいつでも使えるように整備がなされている。電源や水道は山荘の内外至る所にある。食糧や燃料が尽きることはまずない。

このような環境を設計したのは、A 氏自身であり、またそのほとんどを自らの手で作りだしたのである。山荘自体の建造以外、外回りはほぼすべて自身で

おこなったと言っても過言ではない。こうした、自らが生活する場を設計し、実現する力があってこそ、A氏の暮らしなのである。

また、その場の形成は物々交換などを介した人々との関わりで形成されたものであるし、付加価値の創造と合わせてA氏の創造力を見出させる場面である。

このようなA氏の行動理念を図式化してあらわした（図16）。

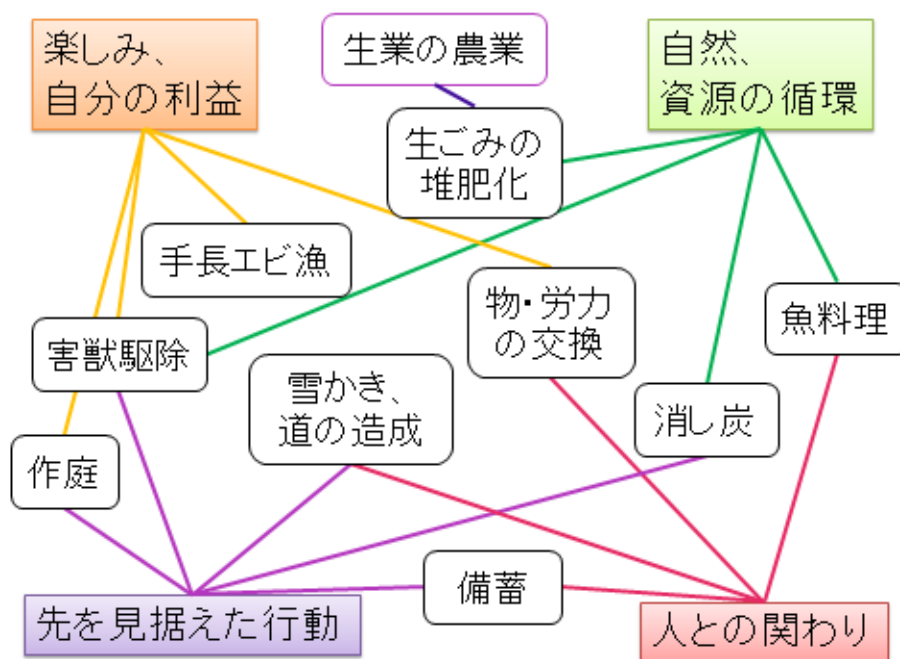


図 16 行動理念の図式化

4-3-5 生活の根幹の3要素

これらすべての活動の根底に通じている概念を、3要素抽出した。「他者とのかかわり」「創造する力、発想と技術」「先を見据えた行動」である。

（1）「他者とのかかわり」

前述した「物々交換」などは、一面では経済を回すために必要な概念である。ただし、「付加価値の創造」は、物々交換でいいモノを得ようとするという経済的な考え方ではなく、相手への「思いやり」とするとA氏は述べている。先述の例でいえば、魚を生のまま人に譲渡するよりも、干物にした方が相手の調理が楽になるし、なにより気持ちがこもっていることが相手にも伝わるだろう、という。こうした他人への「思いやり」はA氏が常に述べるところである。若い頃も、ほかにしなければならぬ仕事があっても、人が困っているとなれば

飛んでいき、何をおいても駆け付けたという。そのために自分の仕事は夜なべとなることが頻繁であったという。

また、物々交換やおすそわけなど金銭を介さない人間関係のほかに、金銭を介した売買の中にある人間関係でもA氏は信念を持っている。A氏は店でモノを購入するときは、なじみの店に必ず行くという。なじみの店で品切れだからといって他に店に行くこともせず、その店に注文して待つようにしているという。A氏は原則的には先述のとおり「先を見据えた行動」をしているため、慌てて買い物をすることがないので、腰を据えて待つことができるし、安売りに走る必要もないのである。ところがこれが逆に経済的に助かることもある。たとえば肥料が値上がりする直前にはA氏のもとへは肥料の小売店のほうから連絡があり、安い値段のうちに納めてもらえたり、値上がり後でも旧価格で納めてもらえたりすることもあったそうである。こちらから頼まずとも割引してもらえた例として、横井戸を掘った時の請求額が半額以下になっていたこともあったという。

このように、人づきあいや人への「思いやり」を金銭の有無にかかわらず大事にしてきたことは、A氏の他者とのかかわり方の根幹であるとともに、その「人とのかかわり」がA氏の生活を支える要素のひとつであり、「生活の豊かさ」を増大させているといえるだろう。

（２）「創造する力、発想と技術」

「他者とのかかわり」で支えられているとはいえ、A氏自らが動かないことには生活が動かない。また、後述の「先を見据えた行動」を前提として動くためには、すでに述べたとおり、「付加価値の創造」や「生活の場の創造」をおこなうための発想と、それを実現する技術、技能が必要となる。

創造力、モノづくりをおこなう力は、A氏の生活を根幹から支える技術技能であるといえる。

（３）「先を見据えた行動」

A氏の行動は、今おこなっている行動の「次」の行動を考えてなされていることが、本人の言動で示されている。たとえば火を使う時、水を汲んだバケツを近くに用意してあることはその一例である。また、電気釜には常に飯が残るようにしてあり、電気湯沸かし器にはお湯が満量近く常に沸かされているというのは、いつ災害が起こって停電になったとしても、とりあえずは食事ができるように、という配慮からである。農作業や山荘への行き帰り、または外出時に周囲の様子を注意深く観察して回るのも、いつ災害が起きてもすぐに対処できるように、またはいつどこを補修したりどこに行けば何が手に入るかなどを記憶したりしておくためである。これも先に何が起こるかわからないから、そ

の準備としておこなっている行動であるといえる。

こうした行動を、A氏は「次のことを考えている」「先を見据えている」と述べており、ここでは「先を見据えた行動」と呼ぶこととする。

ここまで述べてきた中でも、「先を見据えた行動」はさまざまな場面に表れている。干し柿を吊るす際のシュロの葉で作られたひもは、ナイロン製のひもを購入する経済支出を「もったいない」とするほかに、ごみが出ないようにする、すなわち資源が自然に早く返るように考えての行動であり、地球環境的な意味での「先を見据えた」行動である。経済支出における「思い切った」投資も、自分の生活や資産、または村や周囲の人々の「先の生活を見据えて」考えた行動である。

外周にある概念の「思い切り」においても、「先を見据えた」思考が必要であるという。A氏が言うところの「思い切り」は行動力の強さを示すものであると考えられる。A氏は常に行動することの意義を説いており、考えたことは実行しなければならないという。時間がかかっても一度思ったことはあきらめずに続けるというA氏であるが、そうした目標を実現するためには、やるべき時に腰を上げる「思い切り」が必要であるということである。これは、準備に時間をかけ、天候など条件が合う日を待ち、時機を見て一時に行動に移さなければならないという農業の経験から生み出された考え方であるとみられる。裏を返せば、それだけの準備が必要であり、準備を入念におこなう必要があることも同様である。それはA氏の「蓄えと備え」や「先」を考えた行動が下敷きとなっており、A氏本人の言葉を借りれば、常に「先を見据えて行動している」ということになる。先を見据えて準備しているからこそ、やるべきときに思い切って行動できるのであって、準備ができていなければ「思い切り」もできない。「思い切り」の裏には、常に「先を見据えた」準備がある。

さらに、A氏のコメや漬物等の備蓄、および膨大な工具や道具類の保管は、ともすれば過剰な溜め込みとも捉えられかねない。A氏自身も、「この家を見たときに、2種類の人の反応が見られる。ひとつは、ごみの山だという人。もうひとつは、宝の山だという人」と述べているとおり、見方を変えれば日常に必要なものが山積みになっているだけ、とも捉えられるのである。しかし、「ごみの山」という見方を否定するのが、この「先を見据えた」考え方である。A氏の備蓄や所有物には、それぞれ「次」や「いざ」を考えての意味づけがあり、またそれが「いつでも」使えるようになっているのであって、A氏の見据えている「先」の生活にとっては、決して無駄な溜め込みではないのである。

常に先のこと、次のことを考えて行動することが、A氏の行動に貫かれている理念なのであるし、それがあってこそA氏の持ち物と生活様式なのである。

4-3-6 各要素の指向

ここまで分析してきた要素は、すべてA氏との共同生活をとおしての行動観察と聞き取りの調査から導き出されたものであり、それぞれの要素が、概念図で提示した円形のみではなく、行動理念の図式のように、より複雑に絡み合っている（図 16）。しかし、それらすべての生活要素は、A氏にとってはひとつのところに向かっている。それは、A氏の思い描く生活の理想である。A氏はそれを「夢」といい、「夢」の内容を具体的には語らないが、生活全体にわたって意識して目標を設定し、それに向けて努力している姿勢が見られ、生活の基盤となる要素を概念図として示すことができた。これを手掛かりとして、さらに個別研究を進めることができると考える。

4-4 生活のデザイン

A氏の生活から抽出された根幹となる3要素は「他者とのかかわり」「先を見据えた行動」「創造する力、発想と技術」であった。この要素が、生活デザイン、すなわち生活全体を設計していくA氏の特徴であるといえる。

これらの要素をさらに分析していくと、A氏の生活の根底に流れる思いが浮き彫りになる。上記では「夢」としたその部分を、A氏の行動と聞き取り調査からA氏の「夢」について考察する。

A氏は日頃から、社会問題について自分の意見を語り、特に政治や他国の戦争、貧困などを例に挙げて、良い社会を作るにはどうするか、と述べている。それを直接的に自分の行動と結びつけた物言いはしないものの、A氏は自分が生きてきた社会に対する疑問や、よりよい社会とは何かと考えた結果を行動にうつすようにしてきたのである。それが、抽出した生活の要素を生み出しているとみられる。特に「もったいない」と「先を見据えた行動」、「他者とのかかわり」の3点は、現代社会への問題解決の方法をA氏が行動で示している、と考えられる。「もったいない」はここで改めて論じるまでもなかろうが、3種類のもったいないがあり、それを各々の生活環境に応じて柔軟に適用していくことが可能だろう。「先を見据えた行動」は由良で農作業をおこなっているA氏のみならず、どんな環境であれ人間生活を組み立てていく中で必要な視点となろう。また、「他者とのかかわり」についても、金銭を介する場面と介さない場面のどちらにもA氏の事例があり、参考とできるだろう。こうしたA氏の暮らし方は、現代から未来へのどのような場面にも応用しうる、一般性があり、かつ一貫性のあるものだといえる。

「他者とのかかわり」のなかでも、「思いやり」は特に頻繁に語っているところ

ろである。「自立自存」は本来、ひとりで生き抜くことを表す言葉であるが、A氏の場合は、ひとりで生活できるだけの技術を持ちつつ、他者とのかかわりを持って生活を成り立たせていることに大きな特徴があるといえる。その傍ら、「もったいない」という、現金貯蓄の意味も労力の節約も合わせもっている概念が合わさり、多面的な意味で無駄のない、必要最低限の行動を見ることができる。まさに「サブシステム」的な生き方ということができよう。それら行動規範に加え、本人は「楽しみ」「喜び」があると述べている点も重要である。A氏はよく、生活が苦しくて大変だったと語ると同時に、それでも楽しかった、辛いとは思わなかった、と述べるのである。

A氏が生活のための労働を苦とは思わず、楽しんできたこと、それでも決して楽ではなかったこと、そうした一見矛盾のようなところに生活の喜びの要素が垣間見える。決して楽をしようとしているわけではなく、楽しもうとして遊ぶようなことはしないというA氏だが、結果として暮らしそれ自体が楽しい、と述べている。夢に向かって設計して実行した生活、そこからもたらされる楽しみと喜びがA氏の行動すべてを導き出し、活動させているものとみられる。

A氏の意識についてより深く考察することで、遊びとは何か、労働とは何か、生活とは何か、楽しみや喜びとは何かなど、現代の産業社会の生き方を様々な観点から見直すきっかけとなり得るのではないだろうか。

あわせて、こうした自立自存のあり方は、現代に求められる自然共生や循環型社会などに対する、オルターナティブ（他の選択肢・視点）な生活¹⁰⁾のあり方を示唆しているとみられ、自然共生的で持続可能な社会を実現するために重要な知見であると考えられる。

ある時、A氏はこう述べた。

「わしの今の暮らしは、子どものころに思い描いていた世の中のミニチュアみたいなもんやと思う」

趣味らしい趣味はないというA氏は、しかし暮らしが楽しいと述べている。約3年間にわたっておこなったA氏の行動観察および聞き取り調査から、A氏は自らの生活をつくっていくこと自体が趣味であると捉えられる。A氏が子どものころに描いた社会や自らの生活にどれだけ近づいているのかは確定することは難しいが、A氏はまだ夢があり、やりたいことがたくさんあるのだという。そうした想いに、幼少期から青年期までの戦争や貧困、また自然の中での経験が合わさって、A氏が思い描いてきた「生活の場の創造」の過程すべてを貫いてきたのではないか。

このような生き方は、「自立自存」という言葉から想像されるように、尊厳をもって自らの暮らしをおこなっていくことである。それは社会の動向に反した

自給自足的な生活を推奨しているのではなく、社会のなかでいかに暮らしているのか、ということであろう。岸見（2010）はアドラーの心理学においては他者との間に隔たりがあり、差異があるから他者との結びつきが意味を持つ、といい、さらに自分の価値は他者からの評価に依存しない、という¹¹⁾。すなわち、自らの暮らしに生きがいを見出し、他者と関わりを持ちながらも自らの生き方を追求していく姿勢は、今日の私たちの生活を見直すきっかけともなるのではないだろうか。

4-5 考察

本研究のまとめとして、以下の点について述べる。

調査対象地および調査対象者の選択は、筆者が大学生を対象とした自然学習に指導者として参加したことによる。

調査対象地が地方都市でも過疎化された地域であること、社会の変化と共に地域の生活が大きく左右されてきたこと、ある程度自然が残っているので「自然共生的な生活」を見出すことができると予測したことにより、選択した。さらに調査対象者の選択は、自然学習において、参加者にさまざまな生活技術や工夫を教えていたこと、自らの理想的な生活を実現するための住居を所有していること、積極的に自分の生き方を貫いていることが推察されたこと、現在は山荘での一人暮らしを楽しんで自立的な生き方としていること、その生き方が他の地域住民とは異なっていることによる。

このような地域の高齢者を選定したことによって、調査結果は必ずしも一般的な結果であるとはいえないかもしれない。しかし、対象者のように、過疎地の高齢者が自立的な生活を積極的に楽しんでいることを明らかにすることは、他の地域の調査にも役立つといえる。すなわち、本研究で作成した「生活の基礎となる行動理念」の図式は、高齢者に限ったことではないが、生活の現状を把握し、それについてどのような目標を持って生きているのか、という質的調査に役立てられる。自らの生活を本研究の図式をもとにして作成していくことで、各自がどのような生き方を求めているのか、また、何を必要としているのかという視点から分析することができる。地域の自然的、社会的環境の違いによって、生活の求める要素が異なってくるはずである。地方都市や過疎地域、首都圏など、それぞれの地域が抱えている生活の問題を、本研究の図式を用いて、必要とされる福祉的支援を明らかにすることができよう。たとえば、物的な支援のみではなく、精神的な支援としての地域コミュニティの必要性や、そこでの活動を通じた共同体意識の形成の向けての働きかけなど、さまざまな生

活支援の可能性を見いだすことになり、それぞれの地域の生活調査においてひとつの指針となるのではないかと考えている。

アンケートなどの数量によるのではなく、ひとりひとりの生活を掘り起こしていくことは、結果を得にくいものである。しかし、このたび「生活の基礎となる7要素」を抽出できたことにより、生活経営調査の新たな方法を見いだしたと考える。

引用文献

- 1) 影山 彌・熊田 伸子 (2002) : 生活の自立・自存の問題(1)イリイチの所論をとおして郡山女子大学紀要. 38, 61-78
- 2) 金城達也 (2013) : 生業活動の組み合わせとコモンズの役割:徳之島におけるソテツ利用を焦点に. 北海道大学大学院文学研究科研究論集. 13, 569-582
- 3) 戸崎 純 (2005) : サブシステム視座の含意--環境問題への平和学アプローチ再論. 文化国際研究. 9, 51-60
- 4) 丸井清泰 (2007) : 地域自立と入会: サブシステムと生活世界. 龍谷大学経済学論集. 46 (5), 189-206
- 5) 松川昭子 (1996) : 山村高齢者の自立的な生活-山梨県東八代郡芦川村上芦川地区の事例-. 早稲田大学人間科学研究. 9 (1), 57-74
- 6) 大鋸智, 渡辺広範, 樋口孝之, 植田憲, 宮崎清 (2006) : 草木活用の知恵を活かして自然と共生する山里の姿-山形県飯豊町中津川地域の地域資源調査をとおして. 日本デザイン学会研究発表大会概要集. 53, 100
- 7) 真下広征 (2000) : 生活環境づくりの課題-自然環境型生活環境づくりへ向けて. 京都教育大学環境教育研究年報 8, 11-40
- 8) 三橋俊雄 (2013) : 遊び仕事の自然共生・Subsistence な生き方 : 自立自存、自分の力で生きることの大切さに関連して. Bulletin of Asian Design Culture Society. 7, 877-884
- 9) 宮津市ホームページ 国勢調査 2016 年 3 月 9 日更新,
<http://www.city.miyazu.kyoto.jp/www/info/detail.jsp?id=779> 2015
年 12 月 3 日閲覧
- 10) イリイチ, イヴァン (1990) 玉野井芳郎・栗原彬訳: シャドウ・ワーク. 岩波書店. 52

- 11) 岸見一郎 (2010) : アドラー 人生を生き抜く心理学. 日本放送出版協会.
206-20

第 5 章 総 括

第5章 総括

5-1 総括

本研究は、京都府北部の丹後・丹波地方で、高齢化・過疎化がみられる地域を対象に、生業の合間や生業に付随して行われる自然とかかわる活動、すなわちマイナー・サブシステム活動が、その担い手の生活や、当事者が属する地域社会にとってどのような意味をもつのかを検討したものである。実態調査をもとに、地域社会を構成する他者との関係性のなかでマイナー・サブシステム活動が展開されていることを明らかにし、そこに生活の豊かさにつながる意義があることを論じた。

5-1-1 第1章の概要

本章では、研究の背景、目的、方法を述べ、既往研究を検討した。調査手法の参考として民俗学で蓄積されてきた自然とかかわる研究を概観し、さらに本研究に参考となる類似する研究事例を検討した。

既往研究において、マイナー・サブシステム活動に着目した研究事例は多数ある。本研究もこれに着目し、豊かな自然を残す丹後・丹波地方で、自然とのかかわりを追跡できる山間、海辺、その両方を有する地区の3か所を調査地域として選定して、「活動」を担う人びとへの聞き取りと行動観察調査をおこなった。

既往研究と対比される本研究の特徴は、マイナー・サブシステム活動の意義を、担い手である個人および集団の生活という視点から考察することにあると指摘し、本研究の位置づけをおこなった。最後に、本論文の構成について述べた。

5-1-2 第2章の概要

本章では、害獣駆除の実情を明らかにし、福知山市山間部で害獣駆除をおこなう兼業猟師に聞き取り調査をおこなった。

具体的には、駆除の実態を記録するとともに、駆除猟に対する意識を探るため、対話形式の聞き取りをおこなった。その結果、道具やわなの製作、また肉や骨の利用等に、「楽しみ」という猟師の精神性にかかわる要素が関与していること、害獣駆除は地域の生活を守るために必要な活動と位置づけられていること、害獣駆除によって得られる肉は、消費を目的とせず、投棄されることが多いことを把握し、そこに義務感や地域貢献への意欲という動機が存在することを明らかにした。害獣駆除は、市の補助金が支給される公

益活動とも位置づけられるが、本研究では、害獣駆除に関わる当事者に着目し、地域における彼らの生活の中でその位置づけを考察することによって、そこに特有の動機と精神性があることを指摘した。

5-1-3 第3章の概要

本章では、京丹後市丹後町袖志地区を対象に、海辺の生活調査をおこなった。同地区ではマイナー・サブシステム活動と捉えられる磯漁がひろくおこなわれている。

ここでは、磯での採捕活動に「おかずとり」という言葉が用いられていることに着目し、「おかずとり」を意味する採捕の動機と伝承を明らかにした。また、「おかずとり」では採捕の資格や規定が存在し、地域の住民が総出でおこなうことから、資源の保持や安全性の確保への配慮があること、「おかずとり」の動機は「子どもの頃の体験」に遡り、親から学んだことに由来することを指摘した。さらに、採捕活動の意義として「人との交流」、「没頭」、「生活の張り合い」、「自然との対話」が語られ、採捕物や採捕活動の価値として「食物としての価値」以上に、「人に喜んでもらう嬉しさ」が活動を動機付けていることから、「おかずとり」は人びとに「楽しみ」や食生活の豊かさをもたらしていると考察した。

「おかずとり」には地域社会の規範が反映されており、活動自体が採捕者同士のコミュニケーションの場ともなって、共同体の意識が育まれていることから、これらを、地域生活における「おかずとり」の意味や活動の意義として提示した。

5-1-4 第4章の概要

本章では、宮津市由良地区に居住する高齢男性を対象に、その行動観察と聞き取り調査をおこない、自然とかかわる自立自存的な生活の特徴を明らかにした。調査者が対象者と生活を共にしつつ、その活動を農作業、調理、季節行動、漁・猟、自作道具、その他に分類して、そこにみられる工夫を指摘した。また生活調査を基礎として、行動理念を抽出し、「生活の基盤となる7要素」の概念図を作成した。

まず、生活の外周には、「自然環境」「社会環境」「経験」があり、それらと連関する「もったいない」「思い切り」「備えと蓄え」という特徴的な思考パターンがある。次に、この3つの思考パターンと結びついて、「労力」「モノ」「金銭」が「もったいない」と捉えられ、「投資」「資材など」が「思い切り」と結びつくこと、「道具類」「食料」が「備えと蓄え」の対象となるこ

とを論じ、以上7つを生活の基盤となる要素と位置づけた。さらに、行動の5要素を挙げ、それらの根底にある「他者とのかかわり」「創造する力／発想と技術」「先を見据えた行動」が生活を方向付けていることを示した。

以上を踏まえて、対象者は自らで生活全体を設計し、自然とかかわる自立自存的な生き方を実践していること、またその生活は、他者への思いやりなど他者との関係性によって規定される精神性と深くかかわっていることを指摘した。

5-2 結論

本研究では、京都北部丹波・丹後地方の3地区における生活を、マイナー・サブシステム活動に着目して調査し、次のような結論を得た。

1. それぞれの地域で観察・調査した「活動」には、「楽しみ」や「共同体意識」という共通の動機や精神性を見いだせる。それらは、1年の季節の移り変わりとおした自然とかかわりのなかで受け継がれてきたものである。

それぞれの「活動」の「楽しみ」や「共同体意識」は、ゲーム性、道具づくりにおける創意工夫、成果物の分配、他者との交流、また活動を担う主体の地域特有の自然への親しみや他者への信頼によって支えられている。

2. マイナー・サブシステム活動は、地域における共同体としての意識や規範を反映している。害獣駆除は公益活動であり、「おかずとり」は村人全員が一定の規則のもとでかわる公的な活動と位置付けられる。由良地区の高齢者は、利他性を意識した行動原理を内面化して、自らの暮らしを整えている。そこでは地域特有の自然がもたらす生活条件や資源を利用しながら、私的な「楽しみ」とともに共同体としての秩序の維持の要素を見出すことができた。
3. 調査対象地区におけるマイナー・サブシステム活動は、地域特有の自然とかかわる生活条件や資源を利用するものである。この活動は単なる採捕物や生産物の譲渡ではなく、伝統的な技法や習慣が継承されるとともに、新たな工夫が重ねられ、現在に至っている。

マイナー・サブシステム活動の中には、要する労力や危険性が無視できないほど大きいものもある。にもかかわらず、これらはそれを実践する者に「楽しみ」をもたらしている。道具類の製作や活動のゲーム性はその楽しさ

を高め、成果物の分配や物々交換など金銭を介さないやり取りは「喜び」をもたらしている。そこではまた、交流できる他者の存在や共同体意識の存続が重要な役割を果たしている。

「活動」を可能にしている自然環境は、この活動が維持されることによって適切に管理されており、そこに人と環境との望ましい相互作用を見出すことができる。すなわち、この「活動」は、自然環境の適切な管理、地域社会における共同体意識の醸成、生活者としての主体的な生き方の実現に通じている。

以上を踏まえ、本研究では、生業の合間や生業に付随しておこなわれる自然とかかわる活動が、現代においても生活の豊かさや共同体の持続性と結びつくことを示唆し、結論とした。

以上の結果は、これまで個々の地域の記録中心であった民俗学、生活学等の既往研究ではみられなかった知見として意義のあるものである。すなわち、本研究は、調査対象者の自然活動にみられる精神性を明らかにすることで、地域や高齢者の生活研究のあり方の一例を示すことができた。さらに、地域が抱えている生活問題を調査する場合に、本研究で作成した「害獣駆除を続ける心理図」、「採捕活動の動機や意味、価値に関する表」、「生活の基盤となる要素の概念図」等を用いることによって、地域コミュニティの必要性や共同体意識の形成に向けての支援の方法などを明らかにすることができると考える。類似の図式は既往研究では個々の事例としてのみ用いられていたが、本研究の図式は個々の研究事例の総合化をおこない、比較をすることが困難である地域研究の相互の関連性を検証するために今後の研究に使用できると考える。さらに本研究の図式は福祉的支援や精神的支援の必要性を具体的に見出すことができるであろう。

本研究は、それぞれの調査結果の比較検討といった研究の新たな方向性を示唆するものである。そして、地域の伝統的な生活を知ることが、単に過去の暮らしを学ぶのではなく、現在の生活をみつめて、よりよい社会へ、よりよい生活へと視点を向けていくことにつながるのではないだろうか。

5-3 今後の課題

本研究で示した「害獣駆除」については、現在、猟師の高齢化がみられ、実際に駆除活動をおこなうことができる猟師の人数が限られていた。今後は、駆除の目的、方法などのさらなる調査をおこなうとともに、若年層が害獣駆除に

携われない・携わらない要因を解明していきたい。

「おかずとり」については、他の地域での採捕活動を調査し、地域特有の規定や技術、採捕の動機などを研究し、本研究と比較検討していきたい。

「自立自存」の生活については高齢者を中心とし、対象地域と対象者を広げていく。高齢者の生き方において本研究で分析した要素がどのようにみられるのかを比較していきたい。

全体をとおして、人の生活を研究する際に、調査する活動をどのように切り取るか、またその調査過程でいかにその人の背景を分析し整理していけるかには課題が残る。膨大な時間を費やしても、単純に数値化のできない分野の研究では、いかに整理していくのかということと同時に、逆にいかにすれば数値化できるのか、という点にも課題がある。

以上、それぞれの活動についての研究を継続して多くの事例を検証し、全体としてマイナー・サブシステム研究を総合的にこなしていきたいと考えている。

参考文献一覽

参考文献一覧

- 1) 秋道智彌 (1995) : なわばりの文化史—海・山・川の資源と民俗社会. 小学館, 216-7
- 2) 天野正子 (1996) : 「生活者」とはだれか—自立的市民像の系譜. 中公新書. 中央公論社
- 3) 石川寛子 (1988) : 食生活と文化. アイ・ケイ・コーポレーション
- 4) 芳賀登・石川寛子・長坂慶子編 (1998) : 食文化の領域と展開. 全集日本の食文化 第一巻.
- 5) 石川寛子・江原絢子 (2002) : 近現代の食文化. アイ・ケイ・コーポレーション
- 6) 市川孝一 (1978) : 「生活学」のための覚え書き. 文教大学紀要. 12号, 89-94
- 7) 井之本泰 (2005) : 丹後袖志冬物語. 季刊東北学. 5, 148-163.
- 8) 今井光映・山口久子編 (1991) : 生活学としての家政学. 有斐閣
- 9) 今里悟之 (2004) : 定置網漁村における複合生業形態の計量分析—昭和初期の丹後半島新井集落を事例として. 日本民俗学. 240, 1-28
- 10) 井村秀文 (2009) : 環境問題をシステムの的に考える 氾濫する情報に踊らされないために. DOJIN 選書 023. 化学同人. 34-38
- 11) イリイチ, イヴァン (1990), 玉乃井芳郎・栗原彬訳 : シャドウ・ワーク. 岩波書店. 50
- 12) 岩本通弥・菅豊・中村淳編著 (2012) : 民俗学の可能性を拓く—「野」の学問とアカデミズム. 青弓社
- 13) 岩本通弥 (2012) : 民俗学と実践性をめぐる諸問題—「野の学問」とアカデミズム. 岩本通弥・菅豊・中村淳編著. 民俗学の可能性を拓く—「野」の学問とアカデミズム. 青弓社, 9-81
- 14) 卯田宗平 (2003) : 「両テンビン」世帯の人々ととりまく資源に関する複合性への志向. 国立歴史民族博物館研究報告. 105, 123-157
- 15) _____ (2005) : 環境問題と環境民俗学—「地域」環境問題から地域を読みなおす視点—. 地域政策研究. 第7巻第3号, 1-15
- 16) 江原絢子 (2009) : 食文化研究の蓄積と課題—調理、料理形式、日常の食生活を中心に—. 日本調理科学会誌. 42巻5号, 269-274
- 17) _____ (2012) : 家庭料理の近代. 吉川弘文館. 187
- 18) 大鋸智, 植田憲, 宮崎清 (2011) : 伝統的ものづくり羽越しな布にみる資源循環型生活の要素の抽出—現代における資源循環型社会の志向と比較して. デザイン研究. Vol. 57. No. 6, 9-18

- 19) 大鋸智, 植田憲, 宮崎清 (2011) : 江戸期の会津地域の生活にみられる資源循環型生活—『会津農書』にみる自然と共生の姿. デザイン学研究. Vol. 58. No. 1 . 31-40
- 20) 大鋸智, 渡辺広範, 樋口孝之, 植田憲, 宮崎清 (2006) : 草木活用の知恵を活かして自然と共生する山里の姿—山形県飯豊町中津川地域の地域資源調査を通して. 日本デザイン学会研究発表大会概要集. 53, 100
- 21) 大鋸智, 樋口孝之, 植田憲, 宮崎清 (2007) : 資源循環型生活の形成に関する知恵の集積とそれに基づく 21 世紀型生活の指針の創出. 日本デザイン学会研究発表大会概要集. 54, D10
- 22) 大鋸智, 植田憲, 宮崎清 (2009) : 伝統的な資源循環型生活の知恵に基づく地域づくりの指針の導出—自然と共生する新潟県山北地域のつながりの文化. 日本デザイン学会研究発表大会概要集. 56, E04
- 23) 影山 彌. 熊田 伸子 (2002) : 生活の自立・自存の問題(1)イリイチの所論をとおして. 郡山女子大学紀要. 38, 61-78
- 24) 川添登 (1982) : 生活学の提唱. ドメス出版
- 25) 川添登・一番ヶ瀬康子編著 (1993) : 生活学原論. 光生館
- 26) 環境省. 環境基本計画 (1994) : 平成 6 年 12 月 16 日閣議決定,
http://www.env.go.jp/policy/kihon_keikaku/plan/kakugi.061216.html
(2014/1/10 閲覧)
- 27) 環境省 (2010) : 「年齢別狩猟免許所持者数」「狩猟及び有害捕獲等による主な鳥獣の捕獲数」「捕獲数及び被害等の状況等」
- 28) 環境省 (2012) : 平成 24 年版環境・循環型社会・生物多様性白書
- 29) 環境省自然環境局 (2014) : 狩猟制度の概要
<http://www.env.go.jp/nature/choju/hunt/hunt2.html>
- 30) 北村敏 (2005) : 日本海沿岸イワノリ調査報告. 大田区立郷土博物館紀要. 15, 62-92
- 31) 鬼頭秀一・福永真弓編(2009) : 環境倫理学. 東京大学出版会.
- 32) 鬼頭秀一 (1996) : 自然保護を問いなおす—環境倫理とネットワーク. 筑摩書房
- 33) _____ (1999) : アマミノクロウザギの「権利」という逆説. 講座人間と環境 12 巻. 環境の豊かさを求めて—理念と運動. 昭和堂. 152-167
- 34) 京都新聞 2011 年 8 月 23 日付 : 常設捕獲隊発足できず福知山市の有害鳥獣対策
- 35) _____ 2013 年 12 月 16 日付 : 有害害獣、3 市で償却 福知山・舞鶴・綾部、14 年度に施設建設
- 36) 金城達也 (2013) : 生業活動の組み合わせとコモンズの役割 : 徳之島におけるソテツ利用を焦点に. 北海道大学大学院文学研究科研究論集. 13,

- 37) 工藤由貴子 (2006) : 老年学—高齢社会への新しい扉をひらく—. 角川学芸出版
- 38) 国民生活センター編 (1991) : 高齢者の自立をめぐる生活問題. 中央法規出版
- 39) 小島孝夫 (2001) : 複合生業論を超えて. 日本民俗学. 227. 30-37
- 40) _____編 (2010) : 地域社会・地方文化再編の実態. 成城大学民俗学研究所グローバル研究センター
- 41) 小林定数 (2003) : 山陰地方の中山間地域における高齢者の生活環境に関する調査研究. 人間と生活環境. 10 (1)
- 42) 今和次郎 (1971) : 家政論. 今和次郎集第 6 巻. ドメス出版
- 43) _____ (1971) : 生活学. 今和次郎集第 5 巻. ドメス出版
- 44) 佐々木嘉彦 (1975) : 生活科学について. 日本生活学会編:生活学. ドメス出版
- 45) 佐藤哲 (2009) : 知識から智慧へ—土着的知識と科学的知識をつなぐレジデント型研究機関. 鬼頭秀一・福永真弓編:環境倫理学. 東京大学出版会
- 46) 篠原徹 (1989) : 風土の民俗学. 国立歴史民族博物館研究報告. 21
- 47) _____ (1992) : 聞き書きの中の自然. 日本民俗学. 190
- 48) _____ (1994) : 環境民俗学の可能性. 日本民俗学. 200
- 49) _____ (1995) : 海と山の民俗自然誌. 吉川弘文館
- 50) _____編 (1998) : 民族の技術. 現代民俗学の視点 1. 朝倉書店
- 51) _____ (2001) : 自然・労働・民俗. 国立歴史民族博物館研究報告. 87
- 52) 菅豊 (1990) : 「水辺」の生活誌—生計活動の複合的展開とその社会的意味. 日本民俗学. 181
- 53) _____ (1998) : 深い遊び—マイナー・サブシステムの伝承論—. 現代民俗学の視点 1 民俗の技術. 朝倉書店
- 54) _____ (2001a) : 自然をめぐる労働論からの民俗学批評. 国立歴史民族博物館研究報告. 87, 53-73
- 55) _____ (2001b) : 自然をめぐる民俗研究の三つの潮流. 日本民俗学. 227.
- 56) _____ (2006) : 川は誰のものか—人と環境の民俗学. 吉川弘文館
- 57) _____ (2013) : 「新しい野^のの学問」の時代へ—知識生産と社会実践をつなぐために. 岩波書店
- 58) _____ (2012) : 公共民俗学の可能性. 岩本通弥・菅豊・中村淳編著:民俗

- 学の可能性を拓く「野」の学問とアカデミズム．青弓社
- 59) 鈴木龍也，松本一実（2011）：共同的・自主的漁業管理の課題と可能性 舞鶴市野原地区の事例調査から．龍谷法学．
 - 60) 住田昌二（1977）：生活科学の立論と課題．西山卯三編著：住居学ノートー新しい生活科学のために．勁草書房
 - 61) 関礼子（1999）：どんな自然を守るのかー山と海との自然保護．講座人間と環境 12 巻．環境の豊かさを求めてー理念と運動．昭和堂．
 - 62) _____（2003）：生業活動と「かかわりの自然空間」．国立歴史民族博物館研究報告．105
 - 63) 武田聰州（1973）：日本の民俗京都．第一法規出版．
 - 64) 田辺悟（2014）：磯．ものと人間の文化史 164．法政大学出版局．
 - 65) 戸崎 純（2005）：サブシステム視座の含意ー環境問題への平和学アプローチ再論．文化国際研究．9
 - 66) 富田守・松岡明子編著（2001）：家政学原論ー生活総合科学へのアプローチ．朝倉書店
 - 67) 鳥越皓之・帯谷博明編著（2009）：よくわかる環境社会学．ミネルヴァ書房
 - 68) 鳥越皓之（2004）：環境社会学ー生活者の立場から考える．東京大学出版会
 - 69) 内閣府（2015）：高齢社会白書 平成 25 年版 印刷通販
 - 70) _____（2016）：高齢社会白書 平成 26 年版 日経印刷
 - 71) 中村淳（2012）：野の学問とアカデミズム．岩本通弥・菅豊・中村淳編著：民俗学の可能性を拓く．青弓社
 - 72) 中村久美（2010）：地域生活における集会所運営の評価とそのあり方ー宇治市における集会所の運営・管理の方法ー．生活学論叢. 18, 3-12
 - 73) 西山卯三編著（1977）：住居学ノートー新しい生活科学のために．勁草書房
 - 74) 日本家政学会編（1990）：家政学原論．家政学シリーズ 1．朝倉書店
 - 75) 日本生活学会編（1975）：生活学．ドメス出版
 - 76) 野地恒有（1996）：「環境民俗学」の動向と移住誌のかかわり．日本民俗学．213
 - 77) 畑明美代表（1985）：V 丹後海岸の食、自然、農・漁業 聞き書 京都の食事．日本食生活全集 26．農山漁村文化協会
 - 78) 前田信彦（2006）：アクティブ・エイジングの社会学ー高齢者・仕事・ネ

ットワークー. ミネルヴァ書房

- 79) 真下弘征 (2000): 生活環境づくりの課題—自然循環型生活環境づくりへ向けて—. 京都教育大学環境教育年報. 第 8 号
- 80) 松井健 (1997): 自然の文化人類学. 東京大学出版会,
- 81) _____ (1998): マイナー・サブシステムの世界—民俗世界における労働・自然・身体. 現代民俗学の視点 1 民俗の技術. 朝倉書店
- 82) _____ (2011): マイナー・サブシステムと琉球の特殊動物. 国立歴史民族博物館研究報告. 87
- 83) 松岡崇暢 (2009): 環境保全活動の変容が及ぼす地域づくりへの影響—岡山県津山市の事例から—. 生活学論叢. 15
- 84) 松岡憲司編 (2010): 地域産業とネットワーク 京都府北部を中心として. 新評論
- 85) 松川昭子 (1996): 山村高齢者の自立的な生活—山梨県東八代郡芦川村上芦川地区の事例—. 早稲田大学人間科学研究. 9 (1), 57-74
- 86) 丸井清泰 (2007): 地域自立と入会: サブシステムと生活世界. 龍谷大学経済学論集. 46 (5), 189-206
- 87) 三橋俊雄 (2013): 遊び仕事の自然共生・Subsistence な生き方: 自立自存、自分の力で生きることの大切さに関連して. Bulletin of Asian Design Culture Society. 7, 877-884
- 88) 三橋俊雄、宮崎清、松林健一 (1996): ものづくりを通じた自然と人間の共生に関する行動と概念. デザイン研究. Vol. 42. No. 5, 71-80
- 89) 宮本常一 (1999): “日本人の主食” 日本の食事文化. 講座食の文化第 2 巻. 農文協. 69
- 90) 森本孝 (1980): 特集・丹後の海. あるくみるきく. 158, 16.
- 91) 安室知 (1992): 存在感なき生業研究のこれから—方法としての副業生業論—. 日本民俗学. 190, 38-55
- 92) _____ (2006): 「遊び仕事」と「まごつき仕事」—小さな生業にみる自然と人の調和. 現代農業. 八月増刊号. 73, 140-147
- 93) _____ (2008): 「遊び仕事」としての農—前菜畑と市民農園の類似性—. 農業および園芸. 83 (1), 127-132
- 94) _____ (2013): 民俗学的観点からの“生活”へのアプローチ—「まごつき仕事」に注目して—. 生活学論叢. 23, 17-22

- 95) 安室知・小島孝夫・野地恒有 (2008) : 日本の民俗 1 海と里. 吉川弘文館
- 96) 結城登美雄 (2006) 人、自然とともに山野河海の人生を楽しむ. 現代農業 八月増刊号. 73, 14-25
- 97) _____ (2009) : 地元学からの出発—この土地に生きた人びとの声に耳を傾ける. シリーズ地域の再生 1. 農山漁村文化協会
- 98) 湯川洋司、古家信平、安室知編 (2009) : 民俗と民俗学. 日本の民俗 13. 吉川弘文館
- 99) 山下裕作 (2006) : 「遊び仕事」の記憶と農村伝承 「過疎高齢化」という「錯覚」を超えるもの. 現代農業. 八月増刊号. 73, 148-157
- 100) 和仁皓明 (1998) : 食物文化の形成要因について. 日本の食文化. 第 1 巻. 食文化の領域と展開. 雄山閣出版

謝 辭

謝辞

本研究を取りまとめるにあたっては、多くの方々のご協力を賜りました。

論文は、京都府立大学大学院の三橋俊雄先生によるご指導に始まり、主査の檜谷美恵子教授、副査の大場修教授、佐藤仁人教授、長野和雄准教授に論文の審査とご指導を賜りました。

調査にあたっては、以下の方々にご協力をいただきました。

京都府宮津市由良地域において、山田昭さまには演習と調査ともにたいへんお世話になりました。元公民館長の飯澤登志朗さまには演習へのご協力のほか、たくさんの史料、資料をご提供いただきました。そのほか、由良地区のみなさまには公私にわたってお世話になり、論文の貴重な資料となりました。

京都府福知山市雲原地域周辺では、糸井洋さま、山崎道夫さまに長期間の調査同行をお願いしました。糸井嘉宏さまとご家族さまには史料提供や調査へのご協力を賜りました。ほか、雲原地区のみなさまには並々ならぬご協力とご歓迎をいただきました。

京都府京丹後市において、袖志地区、野間地区や周辺の集落においては研究調査の関係で非常に多くの方々にお話をうかがい、研究を進めることができました。

環境共生教育演習にあたっては、上記のみなさまのほかにも、宮津市由良地区公民館、汐汲苑さま、府立青少年海洋センターマリーニピア、北陵総合コミュニティセンターにて宿泊を、また京都府立丹後郷土資料館、ハクレイ酒造さま、マリンハウスさま、NPO 法人由良の戸千軒長者の館さま、大江山鬼そば屋さま、北陵うまいもん市雲原店和楽家さまを中心にさまざまな企業様にもご協力をいただいております。

上記に列举できないほど数多くの方々のご協力をいただいておりますが、ここでは誠に失礼とは存じつつも紙面の都合で割愛させていただきます。

本研究は「京都府立大学地域・生活デザイン研究室 丹後丹波地域調査班／KPU research and field working team」、通称「両丹調査隊」の名前で調査をおこなっており、同地域での修士研究をおこなった中村仁美さんには本論文においてもご尽力いただきました。河野文隆さんも同地域での研究に同行し、議論を重ねました。そのほかの研究室所属学生にも多岐にわたりご支援いただきました。

野間地区の藤原利昭先生、丹後広域振興局の上家祐さま、元光華女子大学の田口和泉先生はじめ、多くの方々に調査や研究についてご相談に上がり、ご指導いただきました。秋田大学名誉教授の澤井セイ子先生にもご指導いただきました。

上記の方々のご協力のもと、本論文が執筆できたことに感謝申し上げます。
ありがとうございました。

2017 年 1 月 23 日

Sasai Toshifumi

